

# アシダカグモ分布記録へのコアシダカグモ属の種の誤入

徳 本 洋

## 1. はじめに

アシダカグモ *Heteropoda venatoria* (Linnaeus, 1758) は日本産クモ類の中ではもっとも大型のクモの部類に入る上、わが国では本種が屋内性である土地が多いため、その存在が目立ち、生息地では一般の人にもよく知られている。ところが本種が本来は分布しない地域や、ごく希薄な分布をする地域では、このクモによく似た別種のクモを見た人が、それをアシダカグモと誤認する例がかなりあるようである。近年、石川県内でアシダカグモの発見例があり、それを機会として私は一般の人がコアシダカグモをアシダカグモと考えた具体例をいくつも経験した。本報ではその経過を記録すると共に、この観点から国内各地、特に分布北限の地域や希薄分布地域と考えられる土地での過去のアシダカグモ分布記録をチェックしたところ、明らかな誤認や誤認を疑われる記録をいくつか見出したので、その結果について報告したい。なお、本種は居住施設の冬季暖房の発達や気候温暖化の進展のため、その分布拡大が目目されることが多く、正確な分布情報が求められる種であるため、特に誤認を避けたく、あえて誤認記録を取り上げることをお許しいただきたい。

また、本報で扱うアシダカグモ分布北限の地域や希薄分布地域というのは本州でのことをさすこととする。そしてそこでアシダカグモと誤認される種はコアシダカグモ属の種 *Sinopoda* spp. がほとんどであると思われたが、その他のクモがふくまれることがあるかもしれない。しかしその点についてはまだ不明確なので、本報ではコアシダカグモ属の種に限って取り扱うこととする。

## 2. 石川県におけるアシダカグモ分布記録

### (1) 金沢市における発見例

#### a. データ

1 雌成体 1998年10月18日金沢市元菊町(標準地域メッシュコード 54366581)採集者  
徳本 洋

#### b. 発見状況ならびに定着可能性の有無

コンクリート2階建て集合住宅の1階入口に設けられた郵便受けの中に潜んでいた。発見者はその一居住者で、その方によると、少し以前からこの建物の入口あたりに大きなクモがいるのを複数の居住者が見ていたが、たまたま、上記の日の朝に発見者の郵便受けの中にそのクモが潜んでいるのが見つかったという。それで石川県ふれあい昆虫館に問い合わせたところ、私を紹介され、私に電話をよこされた。私は午前9時半に現場にいったが、発見者から通報のあったその郵便受け内にこのクモが静止していた。

この建物の所在地は JR 金沢駅のすぐ近くで、住宅街である。私がこのクモを採集してから 1 か月ほど後に発見者にその後の状況を尋ねたところ、その後はこの建物内で本種を見た居住者はいないとのことであったので、この 1 個体だけが生息していた可能性が高い。私は幼時より金沢市に住んでいるが、本種が金沢市内にいるということは聞いたことがない。従って本個体自体がなんらかの機会に、荷物の移動にともなって他地域から運ばれてきたものであって、この地域で繁殖したものではなく、偶産的一時発生理だと考えている。

## (2) 松任市における発見例

### a. データ

1 乾燥死体 1988 年 12 月 20 日ごろ 松任市小川町(54366422) 採集者 東 勝公

### b. 出典ならびに発見状況

これは東(1989)に記されているもので、著者である東勝公氏が上記地区の海岸寄りにある倉庫内で発見し、本種であることを確認したと記してあり、本種の解説がなされている。しかし、性別、成長段階などは記していない。これが載っているのは同氏が所属していた石川県自然解説員のグループ誌で、私も最近にこの会誌の存在を知った。同氏は古くからの日本蜘蛛学会会員で、病を得たため、かなり以前に退会されたが、アシダカグモ、コアシダカグモをよく知っておられる方であり、この同定は間違いないと思う。

現在、この倉庫は残っていないし、その後の状況を確認しようもないが、私はこれも偶産的一時発生理であろうと考えている。

## (3) 石川県南部での分布記録

石川県にはもう 1 例のアシダカグモ分布記録がある。それは大利昌久博士の調査によるもので、大利(1975)に記録されている。これはそれまで断片的報告しかなかったわが国での本種分布情報を一気に飛躍させた詳しい全国調査報文で、その中に石川県の分布情報が含まれている。この調査では大利はほとんどの都道府県を自らの脚で回り画期的な成果を上げているが、その結果として本種の分布北限は「県で表すと茨城県、栃木県、群馬県、長野県、富山県、石川県で、緯度で示すと 36 度から 38 度の間、等温線では平均気温 12 度から 14 度の間にある」とし、石川県は分布北限域の一つとなっている。

この調査で大利は石川県内で 3 地点を調査している。それは報文中にある調査地点プロット全国図に示されているが、その位置を図で見ると県最南部にある加賀市、山中町とこの 2 つの東に接する小松市に属する地域でないかと推定される。そしてその 3 地点ともに生息情報があった地点として示されている。また調査方法全般の記述によると 1 調査地内では 10 か所を調査し、それで生息が認められなかった場合は不生息としたと記してあるから、石川県内各調査地点ではそれぞれに少なくとも 1 か所は生息が認められた箇所があったということであろう。また、人家内分布調査は地区によっては写真を見せて面接調査を行なったと記されているので、私はかつて大利博士にお尋ねしたところ、詳しくは記憶しないが石川県は写真を見せる方法だったかもしれないとのことであった。なお、この調査は 1963 - 1966 年、1972 - 1973 年になされているが、石川県がそのうちのいずれであったのかは不明である。

大利の調査は今から 30 ~ 40 年前であるが、それより前からを含めて私は石川県内でのアシダ

カグモの定着例をこれまで聞いたことがなく、石川県はアシダカグモ非分布県であると思っている。それで大木の分布記録がクモ自体の確認でなく、写真提示法による面接調査結果によったものであるならば誤認である可能性が高いと考える。その理由は被面接者がアシダカグモ近似種をアシダカグモと誤認して「見たことがある」と答えた可能性があるからである。詳細は次項に記す。

なお、私はアシダカグモの日本海側での定着分布域は新海・高野(1984)に示されているものが現段階では妥当と考えている。すなわち福井県若狭地方が分布北限域であろうとするものである。温暖化による北進が生ずる可能性があり、一時的出現記録にもよく注意を払ってゆかねばならないが、福井市や敦賀市での分布情報はこれまでのところ得られていない。

### 3. 石川県内におけるアシダカグモ分布情報にコアシダカグモ属が混入し、 またはそれが疑われた例

私のところへ、これはアシダカグモであろう、といって死亡個体や生存個体、あるいは情報を持ち込まれた事例が石川県内で前記以外に近年4件あるので、それについて次に記す。

例1. 同定結果：コアシダカグモ *Sinopoda forcipata* (Karsch) 1雌成体(乾燥死体)

1998.X.20 居住者採 金沢市鈴見台(54366574) 標高80m 家屋内

私が直接、その家を訪れて場所と標本を確認した。丘陵地形中腹に開発された住宅地。その家の中でたまたに見かけることのあるクモという。

例2. 同定結果：コアシダカグモ *Sinopoda forcipata* (Karsch) 1雄成体(乾燥死体)

1998.X.20 居住者採 江沼郡山代(やましろ)町(54363249) 標高60m 家屋内

石川県山代保健所へ持ち込まれたもので、所員から発見場所の説明を受け、標本を確認した。丘陵地形の麓部にある家屋。過去の出現状況は不明。

なお、この保健所は前記した加賀市、山中町、小松市を管轄しているが、管内でアシダカグモのような大型クモが屋内に生息しているという情報はこれまで聞いていないとのことであった。

例3. 同定結果：標本が存在せず、電話連絡のみで同定不可能

1997.IX ごろ居住者目撃 能登半島門前町深見(55367568) 標高20m 家屋内

場所は能登半島北部西側の山が海岸に迫った地形が連続している地域で、そこに流入している小河川の河口部に存在する小集落。新聞(下記)に載っていたクモとまったく同じものを家の中で以前に見たという。標本による確認ができないので、何グモであるか不明。コアシダカグモ類である可能性が高い。

例4. 同定結果：コアシダカグモ *Sinopoda forcipata* (Karsch) 1雄成体(生体)

1998.VII ごろ居住者採集 金沢市山川町(そごうまち)(54366505) 標高150m 家屋内

場所は低山地の集落。その家の中ではときどき見かけるといふ。

[例1～4に対する注釈]

前記した金沢市内で私が直接採集したアシダカグモ雌成体は、その生体の鮮やかなカラー写真が(図1)、記事をつけて地元でもっとも発行部数の多い地方新聞紙に掲載された。しかも大きさ



図1. 金沢市街地で採集されたアシダカグモ雌成体を報じた新聞の写真

を分かりやすくするため、一元アルミ貨幣と並べて撮影してある。その結果、この新聞を見た読者からその翌日、このクモならば家の中にいたという情報が3件、私のもとに寄せられたが、それが例1~3である。例4はそれらのさらに3か月前に独自に持ち込まれたもので、持参者は生き物に関心をもつ人なので、採集者自身がアシダカグモと判断して持参した。これらの4例には次に記すような共通する特徴がある。

- 1) いずれも持参ないし情報提供したクモをアシダカグモと自己判定し、それを固く信じており、これはアシダカグモと別の近似種である、(例3の場合は恐らく別の近似種である可能性が高い) といっても怪訝な面立ちで、すぐには信用しない。
- 2) いずれも家屋内で常時見るクモではなく、たまたま侵入してきた個体と考えている。例1、例4では家屋内にときどき現れるとクモといっている。
- 3) いずれもこんなに大きなクモはほかに見たことがなく、驚いたという表現をしている。
- 4) 4例ともにクモを発見した家屋が丘陵地の周縁部または低山地にあり、樹林がすぐ近くにある家屋である。

このような共通点から考えると、一般の人、特に真のアシダカグモ自体を知らない人が屋内に入ってきたコアシダカグモの成体を見た場合、ひじょうに大きなクモという印象を持ち、このクモの行動や色彩もからんで強い心理的インパクトを受けるらしいことが分る。そしてまたコアシダカグモは樹林環境が近くにある家屋では屋内へも侵入することがしばしばあると考えられる。従ってアシダカグモの分布調査を一般の人を対象として聞取りのような間接調査法でおこなう場合は、コアシダカグモ類との混同がないことをはっきり付記しておくことが望ましい。

大利(1975)の調査の際もコアシダカグモとの混同を避けるため、幼体については標本確認の方法をとったと記されている。しかし、前記した諸事例は一般の人にアシダカグモ成体の鮮明なカラー写真を提示しても、それだけでアシダカグモとコアシダカグモを区別させることは無理であることを示しているといえる。従って、アシダカグモの常時生息地帯以外ではアシダカグモの写真を提示することによる一般人対象の聞取りまたは届出方式の分布調査はきわめて慎重を

要し，専門家によるクモ自体の標本確認方式が望ましい。

#### 4．石川県以外の地域における誤認を疑われるアシダカグモ分布記録

アシダカグモとして記録されている例で，コアシダカグモ属などをアシダカグモと誤認したのではないかと考えられる例がいくつかあるので，それについて以下に述べる。

##### (1) 富山県

大利(1975)には富山県は本種生息県とされているが，この県は大利自身により調査されていない。というのは大利の調査時期までにすでにアシダカグモの分布が正式に報告されている府県が当時すでにいくつかあり，その府県は分布既知県として大利は直接調査対象から除いたからである。そして富山県はその本種生息既知県であった。その根拠を大利報文内に記されている引用文献から調べると関口(1943)によっていることが示されている。ところがその関口(1943)を見るとこれは安念(1940)によったものであることが分る。安念(1940)が *Acta Arachnologica* 誌上に発表したもので，「富山県産蜘蛛目録」として学名と和名のみを列記しており，それぞれの種のデータやメモはまったく記されていない。従ってアシダカグモについてもその詳しい産地は不明である。なお，このような目録は当時の日本のクモ研究段階では普通のことであって，このような県産蜘蛛目録さえもごく稀な時代であったから，そのこと自体をここで問題にはできない。

そこで私が調べたところ，この著者安念嘉一氏は上記と同じ表題の蜘蛛目録をいくつか富山県内で発表していることが分った。そしてその中には各種ごとに採集メモを付記したものが一つあり(徳本 未発表)，そのアシダカグモの項には「立山，称名徘徊」と明記してある。この称名(しょうみょう)という地名はかつての立山登山道の重要起点をさし，称名川上流の称名滝付近につけられた呼称であって，富山県内では広く知られている地名である。この称名川は立山火山の噴火で生じた大きな溶岩台地を削りとりつつ上流へ後退していったため，きわめて狭く深い谷を形成しており，切り立った兩岸の岸斜面の高さは谷入口で 500m，上流部の称名滝付近でも 300m はある。そして 7 月下旬でも兩岸の岸壁には残雪が見られる。登山路はこの称名滝の横の岸壁を蛇行しつつ，一気に這い上がる難所として知られていたが，その急坂の起点名が称名であり，谷底の標高が 1000m である。従ってとてもアシダカグモの生息環境ではない。しかもそこで野外を徘徊していたのであるから，コアシダカグモ属などを誤認したものであることは明らかである。なお，安念(1940)にはコアシダカグモは載っていない。

一方，東京蜘蛛談話会が 2001 年 7 月下旬に立山山麓称名川域で実施した合宿調査の際，コアシダカグモが 3 地点で記録されており(新海 明・徳本 2002)，これに漏れた記録が他に 1 点あり，計 4 地点で見つかったことになる。従ってこの区域にコアシダカグモがかなり生息することは確かである。なお，漏れた 1 点はベッコウバチの一種に引かれていた雌成体で，極楽坂スキー場山頂ゆき Gondola リフト 駅前，標高 500m 地点で私および同行者数名が目撃した。また石川県内ではコアシダカグモが標高 830m で記録されており(徳本，1963)，このクモが称名付近に生息する可能性は十分にあると考えられる。

以上のことから富山県における既知唯一のアシダカグモ記録は誤認記録として消去すべきも

のである．恐らくコアシダカグモ属の中でもコアシダカグモを誤認したものであろう．

## (2) 新潟県

大利(1975)は新潟県では2箇所調査をおこない、分布が認められなかった県としている．この2箇所は図にプロットされている位置から推察するしか方法がないが、新津市、長岡市あたりかと思われる．

しかし、新潟県内にはアシダカグモの報告が過去に2篇ある．第1は内田・水沢(1974)で、1973・1974年における長岡市内クモ相調査の記録の中に、サギの巣の中でアシダカグモが見られたことが記してあり、本邦最大の種であると注記してある．発見月日、成体・幼体の区別、サギの巣があった環境などは不明であるが、このようにアシダカグモが野外の鳥の巣で見られた例を私は他には知らない．これはかなり古い記録であるが、私の個人的感覚からいえば、これはコアシダカグモ属など、特にコアシダカグモであり、現在ならば記録者はこれをアシダカグモと同定することはなかったのではないかと思う．その証拠に水沢(1981)の「新潟県の真正蜘蛛類目録」ではこの記録は削除されている．第2はこの水沢(1981)でそのアシダカグモの項には新たに「長岡市で東京発送の荷物中より発見．家の構造から関東から人為的に持ち込まれても生育可能と考えられる」と記してある．それ以上の詳細は不明であるが、この生息可能とは一時的生息をさしているのであろう．なお、その目録のコアシダカグモの項には県内の2地点が記録されているが、長岡は含まれていない．

## (3) 青森県

大利(1975)では秋田県、青森県は調査していない．しかし、その後、青森県から水木(1990)が大鱈町で1973年5月と1988年6月に本種を記録している．大鱈町は水木氏の居住地で、秋田県との県境に接する町であるが、そのどこのどのような環境で本種が記録されたのかは不明である．町の中心地大鱈温泉駅付近の標高は100～200mであるが、この土地の年間気温の低さから見て、家屋内であっても一般的には本種の越冬不可能地域であり、もし本種であったとしても一時的偶産例であって、定着可能性はないと考えられる．また、もし富山県での例のように野外で採集されたとすればコアシダカグモ属などの誤同定が疑われる記録となるが、この点について検討に役立つメモがデータについていないのが残念である．水木(1990)にはコアシダカグモは載っていないし、私の知る限りではこの県からのコアシダカグモの記録はない．

## 5. 誤認であることを標本で確認できたアシダカグモ分布記録

鳥取県では大利(1975)は鳥取市と思われる地点1か所で調査を行っており、そこに分布が認められたことがプロットされている．鳥取市内にアシダカグモが生息することは同市内にお住いの鶴崎展巨博士が確認されている(私信)ので鳥取県がアシダカグモ分布県であることに問題は無い．

ところが、鳥取県立博物館所蔵標本目録(野村1984)に大山(だいせん)産のアシダカグモ標本が載っている．大山のどこなのか、詳しいデータは記載されていないが大山のような山地で

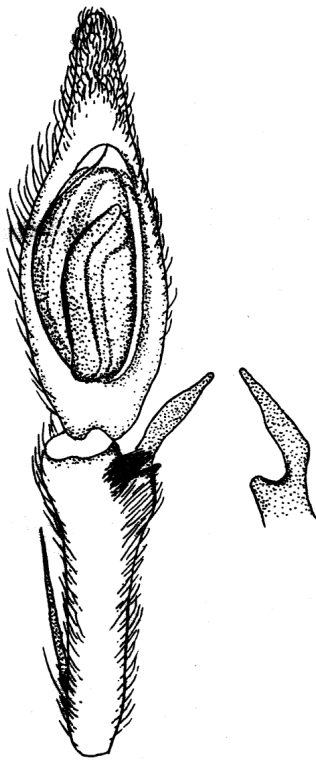


図2．鳥取県大山産コアシダカグモ属  
の一種の雄触肢

の分布記録は，前記した富山県での記録同様に他種を誤認したことが懸念される．鶴崎博士のご教示によればこの山の旅館街は標高 600m ほどであるし，大山にいないはずのコアシダカグモがこの目録に載っていないのも不思議であるという．

そこで私は同博物館にお願いしてこの標本を送ってもらい，それを検したところ雄成体 1，雄亜成体 1 が同一のピンに入っており，次のようなラベル記載があった．

アシダカグモ 1966.6.10 鳥取県大山 山下採  
標本番号 液浸 378-0301-01

古い標本であるため，いずれも強く退色して全体に黄色っぽくなっており，アシダカグモと誤認するのも無理がないと思えるものであった．しかし雄成体の触肢を検鏡するとアシダカグモとは明らかに異なっており，一見したところコアシダカグモに似た感じのものであったが，コアシダカグモよりも八木沼 (1986) に載っているヒメアシダカグモにより近いものであった (図2)．しかし，それとも少し違っていた．なお，図2には触肢末節の詳細構造は描いてない．雄亜成体は腹部背面後部に逆三角形の淡色斑紋が明瞭に存在し，各脚に散在する濃色小斑紋が色あせてはいてもはっきり存在しており，これのほうは雄成体標本よりも斑紋

上はよりコアシダカ風であった．ということで，両標本共にアシダカグモでないことが確認できたが，それ以上のことは私の手に負えないので，標本を返送した．

その後，Jäger & Ono (2002) によって日本初記録属の *Pseudopoda* カワリアシダカグモ属の種や *Sinopoda* コアシダカグモ属の種が多数記載され，わが国のアシダカグモ科相の内容に大きな変化が起った．中国や韓国など大陸部のアシダカグモ科の研究も進展しており，これらの地域にもわが国の種との近似種が多い．西日本は大陸部と距離的に近いので，中国地方以西のアシダカグモ科は大陸部に分布する種との関係が東日本よりも濃いと考えられ，特にこれら国外種にも十分に注意が必要である．また国内産のアシダカグモ科は各種ごとの分布範囲や種内変異の様相がまだよく分っていない．従って，アシダカグモ類似の野外性種が見つかるまで，それをこれまでのようにみなコアシダカグモと片付けるようなわけにはいかない．それで，この大山産の標本もこれらを踏まえた上で，今後，研究されるべきであろう．

Jäger & Ono (2002) には *Sinopoda stellatops* が新種として記載され，これが日本産のヒメアシダカグモに対する学名とされており，福岡・佐賀・大分・香川・広島・岡山・島根の各県からこれを記録してある．それで八木沼 (1986) の図鑑でヒメアシダカグモに使われている

*Heteropoda stellata* Schenkel 1963 は中国内陸部に固有の種であるとして、日本のクモから除かれた。鳥取県大山は地理的にはこれらヒメアシダカグモの既知産地に隣接するので、前記の大山産標本はあるいはこれなのかもしれない。しかし国立科学博物館に現在ある少数のヒメアシダカグモ九州産標本を見せてもらった範囲では大山産標本はそれに似ているが、少し違う点もあり、はっきりしなかった。なお、Jäger & Ono (2002) に本州産の *Sinopoda* 属としてもう一種新種記載されている *Sinopoda ogatai* オガタヒメアシダカグモも標本を見たが、ヒメアシダカグモや大山産のヒメアシダカグモ近似種とは違いが大きく、明瞭に異なる種であると思った。オガタヒメアシダカグモは愛知県で採集された種だが、これの分布がどうなっているのかも、今後、みなで気をつけねばならない。とにかく、本州、四国、九州にはコアシダカグモ近似的の野生種がいくつか生息することが分ってきたので、これらの地域のコアシダカグモ属には今後、十分に注意を払うことが必要である。

## 6. まとめ

- (1) アシダカグモは大型で目立つクモなので名を知られているだけに、本来分布しない地域や、ごく希薄な分布をする地域では、近似の他種のクモがこのクモと間違えられることが多い。
- (2) 間違えられる相手種はコアシダカグモ属のクモであることが多い。
- (3) 石川県内でコアシダカグモがアシダカグモと間違えられた4具体例について、それらに共通する事項を検討し、近くに林地が存在する人家ではコアシダカグモの人家内侵入はかなりよく起っているらしいことを指摘した。
- (4) アシダカグモの写真提示による一般人対象の分布調査は、近似種との混同を起す危険性が高く、慎重を要することを指摘した。
- (5) 石川県以外のアシダカグモ分布北限地域あるいは希薄分布地域での過去のアシダカグモ分布記録を検討し、その中にはコアシダカグモ属をアシダカグモと誤認した記録が含まれていることを明らかにした。
- (6) コアシダカグモに似た多くの種が国内に存在することが最近明らかになったが、それぞれの種の分布範囲や個体変異がまだはっきりしておらず、今後の資料集積が必要である。

## 謝 辞

アシダカグモ科について多くの教示をいただき、館所蔵標本を検鏡させていただいた国立科学博物館の小野展嗣博士、鳥取県のアシダカグモ情報を詳しく教えていただき、同県立博物館所蔵標本の借り出しに力を貸していただいた鳥取大学の鶴崎展巨博士、一部の文献入手について便をはかっていただいた岐阜県の須賀瑛文氏にあつく謝意を表します。

## 文 献

- 東 勝公 1989. アシダカグモ採集? の記. おとしぶみ (石川県自然解説員研究会会誌), 1: 7.  
安念嘉一 1940. 富山県産真正蜘蛛類目録 (1). Acta Arachnol., 5: 86-91.  
千国安之輔 1989. 写真日本クモ類大図鑑. pp. 308. 偕成社, 東京.



- Jäger, P. & Ono, H. 2002. Sparassidae from Japan. II. First *Pseudopoda* species and new *Sinopoda* species (Araneae: Sparassidae: Heteropodinae). *Acta Arachnol.*, 51: 109-124.
- 水木隆治 1990 . 青森県のクモたち . pp. 77. 著者自刊.
- 水沢正明 1981 . 新潟県の真正蜘蛛目録 . *Heteropoda*, 4: 8-31.
- 野村幸弘 (編) 1984 . クモ類目録 . 鳥取県立博物館所蔵目録 32 , pp.18. 鳥取県立博物館 , 鳥取.
- 大利昌久 1975 . わが国におけるアシダカグモの地理的分布 . *衛生動物*, 6: 255-256.
- 関口晃一 1943 . アシダカグモ *Heteropoda venatoria* Linnaeus の生活史について(上) . *Acta Arachnol.*, 8: 66-73.
- 新海 明・徳本 洋 2002 . 東京蜘蛛談話会 2001 年度合宿報告 . 富山県立山周辺のクモ . *Kishidaia*, 82: 31-38.
- 新海栄一・高野伸二 1984 . フィールド図鑑クモ . pp. 204. 東海大学出版会 . 東京.
- 徳本 洋 1963 . 白山国立公園のクモ類 I . *Atypus*, 31: 27-34.
- 内田善吾・水沢正明 1974 , 新潟県の真正蜘蛛について . 第 2 報 . 長岡農業高校研究紀要, 2: 51-27.
- 八木沼建夫 1986 . 原色日本クモ類図鑑 . pp. 305. pls.64. 保育社 , 大阪.

# 伊豆諸島式根島で採集したクモとヤマトウシオグモ， タニカワヤリグモの記録

松 田 ま ゆ み

伊豆諸島のクモ類については、小野(2001)が1921年から2001年までの記録をまとめ152種を報告し、このうち式根島からは34種を報告している。

筆者は2001年8月30日と31日に式根島でクモの採集を行い、6科23種のクモを採集したので報告する。特筆すべきはヤマトウシオグモの雄が1個体採集されたことと、タニカワヤリグモの雌が1個体採集されたことである。また伊豆諸島初記録としてこれら2種のほかにチリソウロウグモ、シモフリミジグモ、シラホシコゲチャハエトリの3種が記録された。式根島新記録種は上記の種も含めて13種であった。式根島産のクモ類は、小野(2001)の記録と合わせると14科46種となった。

## 採集目録

### Theridiidae ヒメグモ科

<i>Achaearana japonica</i> (Bösenberg & Strand 1906)	ニホンヒメグモ	10
<i>Achaearana tepidariorum</i> (C.Koch 1841)	オオヒメグモ	9 4 幼体
<i>Anelosimuus crassipes</i> (Bösenberg & Strand 1906)	アシプトヒメグモ	2
<i>Ariamnes cylindrogaster</i> Simon 1889	オナガグモ	1 幼体
<i>Argyrodes bonadea</i> (Karsch 1881)	シロカネイソウロウグモ	5 5
<i>Argyrodes kumadai</i> (Chida & Tanikawa 1999)	チリソウロウグモ	1
伊豆諸島新記録		
<i>Keijia sterninotata</i> (Bösenberg & Strand 1906)	ムナボシヒメグモ	1
<i>Rhomphaea tanikawai</i> Yoshida 2001	タニカワヤリグモ	1
伊豆諸島新記録		
<i>Steatoda cingulata</i> (Thorell 1890)	ハンゲツオスナキグモ	1 幼体 1 幼体
<i>Takayus lyricus</i> (Walckenaer 1842)	シモフリヒメグモ	1
伊豆諸島新記録		

### Tetragnathidae アシナガグモ科

<i>Leucauge subblanda</i> Bösenberg & Strand 1906	コシロカネグモ	5
---	---------	---

<i>Nephila clavata</i> L.Koch 1878	ジョロウグモ	2	1	2	幼体
Araneidae コガネグモ科					
<i>Argiope bruennichii</i> (Scopoli 1772)	ナガコガネグモ	2			
<i>Argiope minuta</i> Karsch 1879	コガタコガネグモ	2			
<i>Cyclosa confusa</i> Bösenberg & Strand 1906	ミナミノシマゴミグモ	10			
<i>Cyclosa vallata</i> Keyserling 1886	マルゴミグモ	4			
<i>Neoscona punctigera</i> (Doleschall 1857)	コゲチャオニグモ	1			
<i>Neoscona subpullata</i> (Bösenberg & Strand 1906)	ヘリジロオニグモ	2			
<i>Poltys illepidus</i> C. Koch 1843	ゲホウグモ	1			幼体
Agelenidae タナグモ科					
<i>Agelena limbata</i> Thorell 1879	クサグモ	2			
Desidae ウシオグモ科					
<i>Desis japonica</i> Yaginuma 1956	ヤマトウシオグモ	1			
伊豆諸島新記録					
Salticidae ハエトリグモ科					
<i>Pseudicius himeshimensis</i> (Dönitz & Strand 1906)	イソハエトリ	1	2		
<i>Siler cupreus</i> Simon 1888	アオオビハエトリ	1			
<i>Sitticus penicillatus</i> (Simon 1875)	シラホシコゲチャハエトリ				
伊豆諸島新記録					1

#### ヤマトウシオグモとタニカワヤリグモについて

これまでわが国でのヤマトウシオグモの分布は和歌山県以南であったが、今回の記録により式根島が北限となった。

式根島は周囲 12km、面積 3.9km<sup>2</sup>の台地状をした小さな火山島である。全島が黒雲母流紋岩質の溶岩から成り、海岸線はリアス式海岸で、伊豆七島のなかでは最も複雑な海岸線を持つ島である。海岸の大部分は岩礁から成るが、北部の泊港、北西部の大浦海岸や中ノ浦海岸、カンビキ湾、南東部の石白川海岸や釜ノ下海岸は湾奥部が砂浜となっている。



1



2

写真 1-2 . ヤマトウシオグモが採集された大浦湾

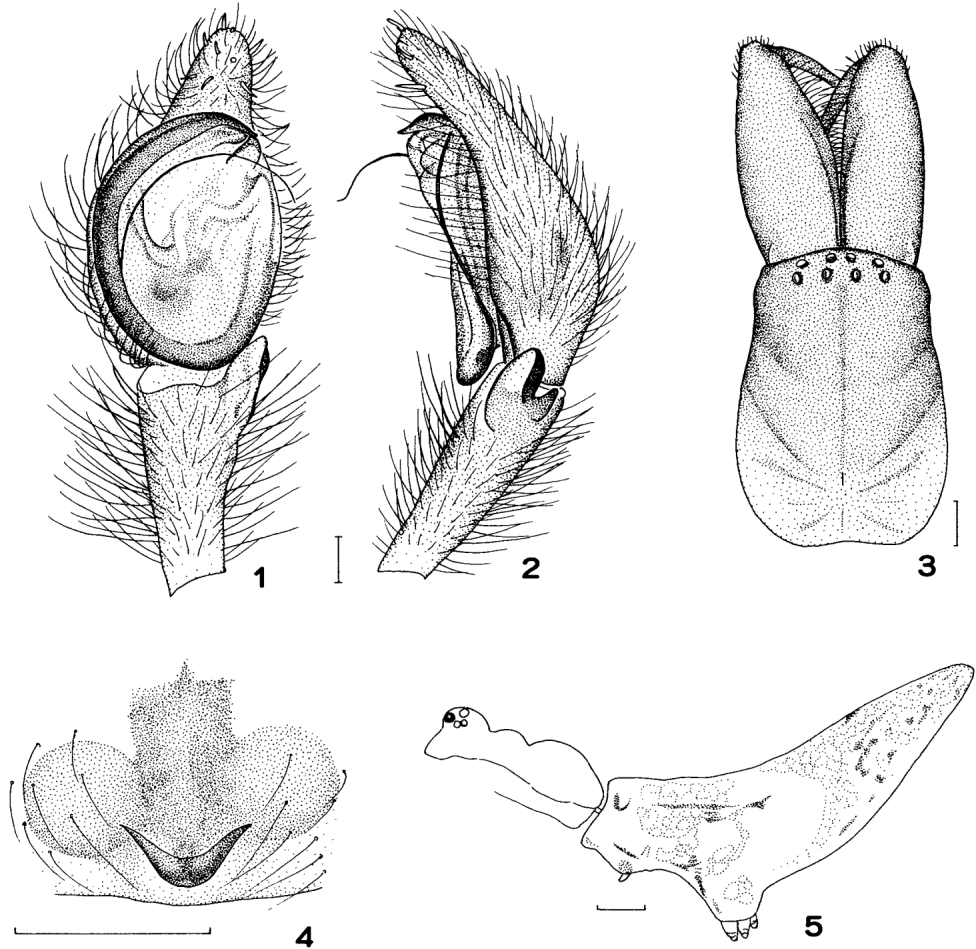


図 1-3. ヤマトウシオグモ . 図 4-5. タニカワヤリグモ . 1. 雄触肢下面 . 2. 雄触肢外側面 . 3. 雄背甲および上顎 . 4. 外雌器 . 5. 雌側面 (スケール : 1-2, 4, 5, 0.2mm ; 3, 0.5mm)

ヤマトウシオグモを採集したのは大浦海岸で、湾内の砂浜の汀線付近を歩行していた雄 1 個体を採集した(図 1-3)。砂浜は湾奥部のみで、湾の両側には岩礁や断崖が続いている(写真 1-2)。採集後、砂浜一帯と周辺の岩礁でほかの個体を探したが、発見できなかった。式根島の海岸の岩は、表面に小さな窪みが多数あるものが見られるが、このような岩の窪みがヤマトウシオグモの住居になるのではないかと推測される。式根島はこのような岩礁の存在とリアス式海岸という地形から、伊豆諸島の他の島と比べ本種の生息に適した環境が備わっていると思われる。

タニカワヤリグモはこれまで西表島からしか記録されていない種であるが、今回雌 1 頭が採集された(図 4-5)。ミナミノシマゴミグモとともに南西諸島と伊豆諸島に隔離分布する種である。

#### 引用文献

小野展嗣 2001 . 伊豆諸島のクモ類 . 国立科博専報 , 37:231-277.

## ヨロイヒメグモの網は放射状

安藤 昭 久

ヨロイヒメグモ *Comaroma maculosum* は、赤黒い小さな（体長約 1.4mm）クモで、雑木林の落葉の下などから見つかる。その網については、「落葉中の空間に簡単に糸を引いて網とし、糸の中間に静止している」との報告（山川・熊田 1979）がある。しかし、規則的な網構造が存在するとの記録はないようである。最近、筆者は、ヨロイヒメグモの成体の飼育を試み、このクモが放射状の網を造ることを確認した。

飼育に用いたクモは、2003 年 12 月に東京都八王子市上川にある丘陵地帯で尾根上のコナラの落枝落葉層から採集した。飼育には箱庭を用いた。箱庭は、透明なプラスチック容器で作られていて、これを横倒しにして土を盛りつけ、広葉樹の朽ちかけた落葉を数枚置いた。容器の口は料理用の透明ラップで覆った（図 1）。箱庭にクモを数匹放し、1～3 日後に観察した。箱庭には雌雄の成体を放したが、網を観察したのはいずれも雌で、3 例観察した。



図 1．箱庭の作成例

容器を覆っている透明ラップを静かに剥がし、落葉と土の隙間を覗くと、落葉の下面にヨロイヒメグモの雌が占座していた。クモの周囲には、数本の糸が張り巡らされ、さらに斜め下に向かって放射状に糸（縦糸）が張られていた。縦糸は落葉の下面に直接付着しているようだが、他の糸から釣り下げられているようにも見える。隙間の奥の方はよく観察できなかったが、落葉が水平であれば、縦糸はクモの周囲を完全に取り囲んでいるらしい。周囲を半周するのに縦糸 4～5 本を数えることができたので、1 周で 8～10 本程度であ

らうと推定される。網には、2～3本の横糸もあった。ただし、各々の横糸は1周することはなく、縦糸 2～5 スパン程度しか続いていなかった。落葉と土があまりにも離れ過ぎていると、このクモは網を造らないようだ。しかし、どの程度隙間なら網を造るのか、詳しく調べてはいない。観察では、高さが約 5～7mm で、幅が約 1cm であった。

以上、網全体の輪郭を要約すると、多角錐台（円錐台）になる。不思議な網である。ヨロイヒメグモは、名前には、「ヒメグモ」と付いているが、最近では、ヒメグモ科ではなくヨリメグモ科に分類されているそうである。網構造に詳しい新海 明氏に写真を見ていただいたところ、ヨリメグ

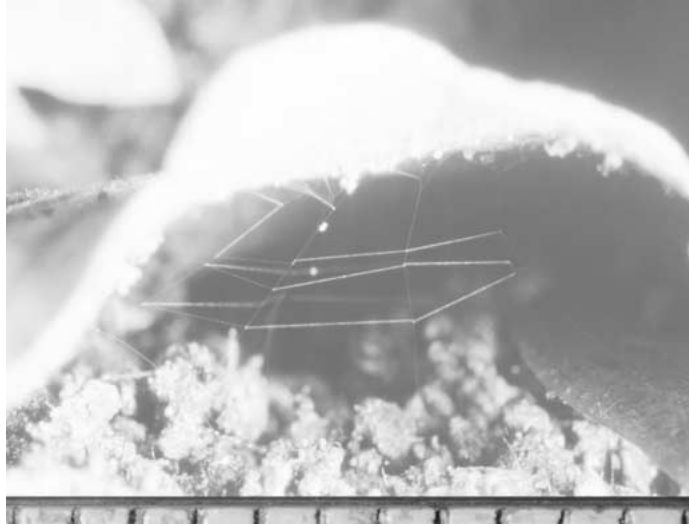


図2．ヨロイヒメグモの網の全景（2003年12月19日撮影）  
下端はモノサシ．同倍率で撮影し合成．

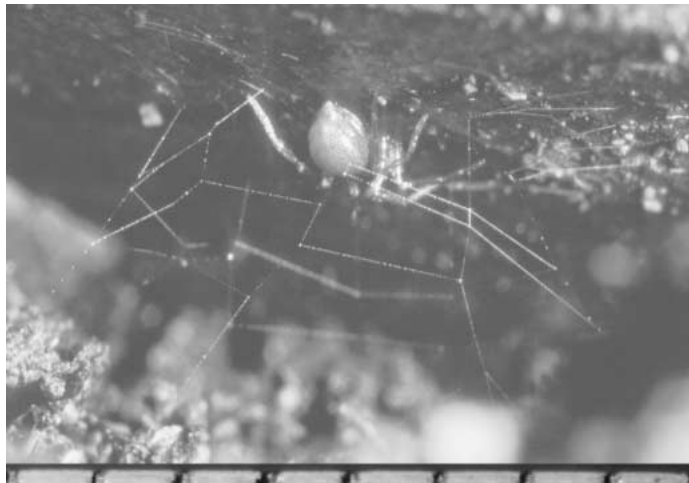


図3 占座しているクモ（2003年12月17日撮影）

モ科にありがちな特徴が出ているとのことであった．

網は、広葉樹の落葉の下面に付いているので、上からは見えないし、落葉を退けると網も壊れてしまうので、やはり観察できない．いずれにしても、自然な条件下で網は観察できない．従来、このクモの網がほとんど観察されてこなかったのもうなずける結果であった．

#### 引用文献

山川 守・熊田憲一 1979．丹沢山塊の真性蜘蛛類．Atypus, 74:1-14．

## クモの幼体はなぜ「まどい」を作るのか

西野 真由子<sup>1)</sup>

### Why the spiderlings aggregate after hatching ?

Mayuko Nishino

#### はじめに

多くの種類のクモは卵から孵化・出のう後、「まどい」という幼体の集団生活を経て独立して生活する。「まどい」については「みずから餌をとらず、体内に保有している卵黄を消費し、独立生活への準備をしている」（吉倉 真 1987）と考えられており、その機序や意義についてはあまり触られていない。高等学校でフェロモンについて学習した際に、「まどいも集合フェロモンで説明できるのではないか」と思った。これまでクモにおいて集合フェロモンの報告はない。しかし Stow らはナゲナワグモでエサとなる蛾を誘引する物質を同定し（Stow et al. 1987）、性フェロモンはいくつかのクモで報告があるなど、クモにおけるフェロモンの存在は認められている。どのような機序でまどいを形成しているのか、誘引物質は存在するか、集団を形成していることの意義等を明らかにすることを目的に 2003 年 5 月から 2004 年 5 月まで研究した。

#### 研究の方法

研究対象はこれまでの野外観察が豊富で、まどいの期間が 7 - 10 日と比較的長いジョロウグモとコガネグモを用いた。

#### 1. 誘引物質を調べる実験

- 1) まどいを作っている幼体 200 - 500 頭をエ - テル 10ml に入れ、抽出液を作る。
- 2) 抽出液 0.1ml を注射器でとり、飼育箱に敷いたろ紙（直径 15cm）の端に滴下する。対照液（エ - テル）0.1ml も注射器でろ紙の反対側の端に滴下する。
- 3) 抽出液、対照液とも乾燥したら（1 - 2 分）、実験対象となる幼体 70 - 250 頭を飼育箱にバラバラに入れる。幼体は糸を引いて連なっているが、糸を切って 1 頭ずつ入れる。

#### 抽出液作成の条件

抽出に用いた溶媒：生物の教科書のシロアリの実験を参考にエ - テルを用いた。一部の実験で

1) 大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎 3 年

はクロロホルム、ヘキサン、アセトン、水も用いた。

実験に用いた幼体数：予備実験で、抽出液を 10 倍・100 倍・1000 倍希釈して活性を調べると、10 倍希釈では元の抽出液とほぼ同じであったので、抽出液を作る時に幼体数を厳密に揃える必要はないと判断した。

抽出時間：抽出 30 分後・60 分後・3 時間後・24 時間後の活性を調べると、出のう後 4 日たったクモの抽出液ではすべて活性があったが、出のう直後のクモの抽出液では 24 時間後のみ活性があったので、24 時間抽出することにした。

）抽出液の誘引性の判定

飼育箱にバラバラに入れた幼体が飼育箱の抽出液側 1/2 に移動したら + 1，対照液側 1/2 に移動したら - 1 とした。同様に幼体が抽出液側 1/4 に移動したら + 2，抽出液側 1/8 に移動したら + 3 とした。「まどい」を作るかどうかは滴下した抽出液よりも実験対象グモに依存すると考え、ばらけた状態でもクモが移動すれば + とした。実験開始 24 時間後まで複数回観察し、2 回以上 + 1 ~ + 3 を示した実験は誘引性(+)と判断した。

）2003 年と 2004 年の実験方法の違い

2003 年のジョロウグモの実験では抽出液を必ず左に滴下した。そのため「幼体を誘引する他の要因（例えば光）が左側に存在したため結果が陽性になった可能性を否定できない」と指摘を受けた。そこで 2004 年は抽出液を左に滴下した飼育箱と右に滴下した飼育箱を同時に実験した。なおコガネグモは 2003 年の実験で抽出液を左・右に滴下、それぞれを同時に実験した。

## 2. まどいの意義を調べる実験

実験 1 では出のう当日からまどいを解消した日まで、毎日 5 頭の幼体をまどいから取り出し 1 頭ずつに分離した。実験 2 では出のう当日に 1 頭・5 頭・10 頭・20 頭に分離した。幼体はフィルムケ - スに入れ、脱皮の時期や生存日数を比較した。観察中、餌は与えなかった。

## 3. 幼体の形態・機能観察

ジョロウグモのみで観察した。1 齢グモ・2 齢グモ・まどいにいる 3 齢グモ・まどいを解消し独自に網を張っている 3 齢グモを双眼実態顕微鏡で観察し、形態を比較した。2 齢グモのまどいと 3 齢グモのまどいで、まどいの表面に見える幼体の頭の向きを調べた。まどいの 2 齢グモと 3 齢グモを分離し、網を張ることができるかどうかを調べた。

## ・ 研究の結果

### 1. 誘引物質を調べる実験

2003 年のジョロウグモの実験では、抽出液を左、対照液を右に滴下したが、一部を除きエ - テル抽出液で誘引性を認めた（表 1 参照）。水抽出液は誘引性（ - ）だった。2004 年は 2 齢グモのエ - テル抽出液で再実験を行ったが、右に滴下したときは左寄り若しくはまん中にまどいを作り、誘引性（ - ）だった。ヘキサン、クロロホルム、アセトン抽出液も誘引性（ - ）だった。コガネグモ（幼体、まどい糸、出のう後の卵のう）の抽出液（エ - テル、ヘキサン、クロロホル



ム、アセトン、水抽出)はすべて誘引性(-)だった。

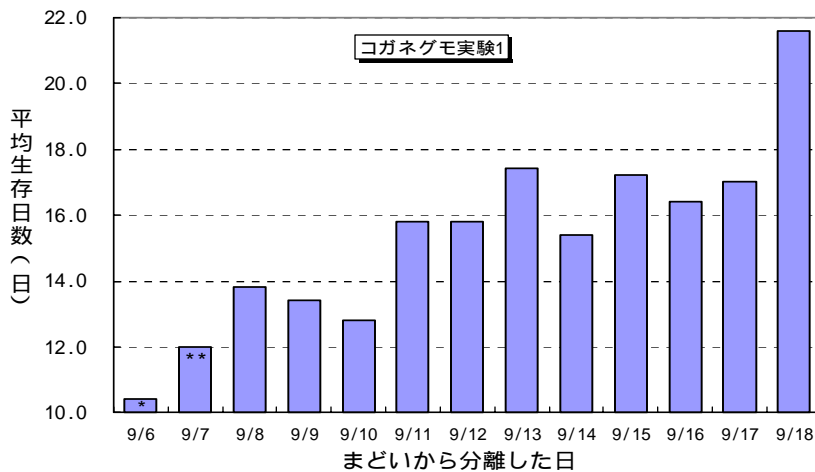
表 1 .

エ - テル抽出したクモ	飼育箱に入れたクモ	
	2 齢グモ	3 齢グモ
2 齢グモ	誘引性 (+)	誘引性 (+)
まどいの 3 齢グモ	誘引性 (+)	誘引性 (+)
まどいを解消した 3 齢グモ	誘引性 (-)	誘引性 (-)
まどい糸	誘引性 (+)	誘引性 (+) 一部 誘引性 (-)
夜, 分散している状態の 2 齢グモ	誘引性 (+)	実験せず
夜, 分散している状態の 3 齢グモ	誘引性 (+)	誘引性 (+) 一部 誘引性 (-)
2 齢グモ 暗くして実験	誘引性 (-)	誘引性 (+) 一部 誘引性 (-)
3 齢グモ 暗くして実験	実験せず	誘引性 (-)

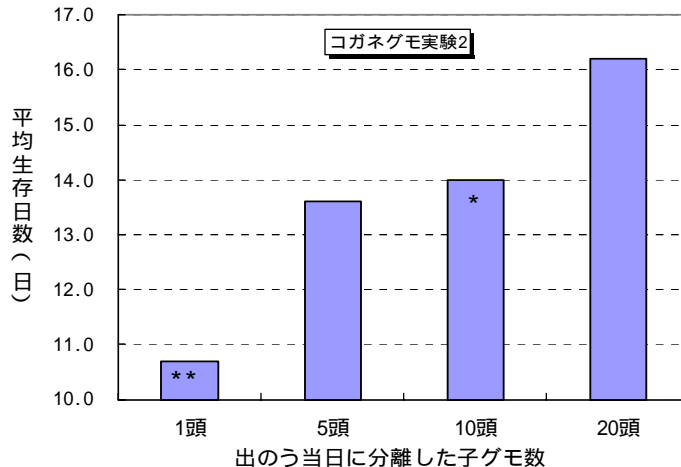
## 2 . まどいの意義を調べる実験

ジョロウグモでは脱皮の時期に注目した。実験 1 , 実験 2 とも元のまどいの幼体に比べ脱皮が遅れることはなかった。実験 1 では 1 ヶ月間観察したが、脱皮前に分離した幼体 (計 70 頭) の死亡率が 20% に対し、脱皮後に分離した幼体 (計 57 頭) の死亡率は 7.0% と低かった。

コガネグモはまどい中に脱皮をしないので生存日数のみを調べた。出のう後早期に分離すると (実験 1) , 分離する時期が同じであれば分離するクモ数が少ないほど (実験 2) , 平均生存日数は短くなった (グラフ) Mann-Whitney の U 検定を行うと実験 1 ではまどいの最終日 (9/18) に分離したクモに対し出のう当日 (9/6) ( $p < 0.05$ ) , 2 日目 (9/7) ( $p < 0.01$ ) に分離したクモは有意に生存日数が短く、実験 2 では 20 頭分離に対し 1 頭分離 ( $p < 0.01$ ) , 10 頭分離 ( $p < 0.05$ ) は有意に生存日数が短かった。



Mann-Whitney の U 検定で有意 \* :  $p < 0.05$  \*\* :  $p < 0.01$



Mann-Whitney の U 検定で有意 \* :  $p < 0.05$  \*\* :  $p < 0.01$

### 3. 幼体の形態・機能観察

まどいの時期のクモ、特に 2 齢グモは口器、牙の発達が不十分で感覚毛や保護毛も充分生えていなかった。独自に網を張って生活している 3 齢グモは牙の発達が明らかだった。2 齢グモではまどいの幼体の頭の向きが一定しないことは  $\chi^2$  検定で有意だった。3 齢グモになると網を張ることができたが、2 齢グモは糸を引いても網を張ることはできなかった。

## 考察

### 1. 幼体の誘引物質の存在

2003 年の実験結果はジョロウグモにおいて幼体の誘引物質の存在を示唆していたが、2004 年の再実験ではコガネグモ同様ジョロウグモにおいても、抽出液の誘引性は見られなかった。

ジョロウグモのまどい時期に、幼体が密集するのは昼間のみで夜間は分散する。昼間も糸の振動などで幼体が分散することもあるが、しばらくすると再び密集する。人工的に暗状態にすると密集していた幼体が分散することも確認しているので、幼体が光に反応しているのは明らかであった。2003 年の実験でも暗状態では幼体は抽出液に誘引されなかったが、この結果は誘引物質の存在を否定するものではなく、幼体の反応性が低下するためと考えていた。また日齢の進んだ 3 齢グモは光に誘引されることもあったが、2 齢グモでは抽出液の関与の方が大きく、環境要因（左右で 10 - 50 ルクス of 照度差があった）は無視できると判断していた。しかし 2004 年の 2 齢グモの実験の結果からは、光の存在が幼体の密集のみならず幼体を誘引する要因になっていると思われ、ジョロウグモでもコガネグモ同様、誘引物質の存在の可能性は低かった。

以前、屋外で密集していたまどいが分散した時の照度を調べた観察（観察数 24）では、2 - 538 ルクスと幅があった。今回の研究でもまどいを形成している幼体は機能的に未発達であることを確認したことから、果たしてジョロウグモの幼体、特に 2 齢グモが 10 - 50 ルクス of 照度差に反応したのだろうかという疑問も残る。仮にそれほど敏感に光に反応したとしても、右に抽出液を滴下した時に「明るい左側」ではなくまん中にまどいを作ったケ - スも複数回あったことは光以外の

要因の可能性も残している。

今回の実験方法は昆虫のフェロモン抽出法を参考にしたが、抽出に用いた溶媒や抽出方法に不備があった可能性もある。誘引物質の可能性を完全に否定するためには実験方法を再検討し、照度や他の条件を厳密に設定して再実験を行う必要がある。また糸の振動に幼体が反応するのも明らかなので、まどいの機序として誘引物質、光以外の要因も検討する必要がある。

## 2. まどいの意義

ジョロウグモでは脱皮前に分離した幼体の死亡率が脱皮後分離した幼体の死亡率より高くなったが、コガネグモでは出のう直後のまどいが幼体の寿命にとって有効であることがU検定で証明できた。これまで考えられていた「独自に生活できないから」という消極的な理由ではなく、集団でいない不利益があるという積極的な意味が明らかになった。

実験に用いたコガネグモの元のまどいではまどいの期間は13日間だった。1997 - 2001年のコガネグモの観察（観察数49）ではまどいの期間は4 - 24日間、平均11.7日間だった。今回のU検定では3日目以降の分離は生存日数に有意差はなかったが、野外で観察したまどいの期間は最短でも4日間だったこと、実験1で出のう後4、5日目に分離した幼体は3日目の分離幼体より平均生存日数が短くなっていることから、出のう3日目で独立生活が可能になると考えるのは無理がある。更に研究を重ねる必要がある。

まどいから分離すると寿命が短くなった原因は不明である。密集しているジョロウグモでは適切な温度や湿度が保たれることを予想したが、実証することはできなかった。気温の下がる夜に分散することは保温の必要性を否定する根拠になった。ただコガネグモはジョロウグモと異なり8 - 9月間は昼間も幼体が密集せず、10月になって気温が下がると密集した。室内実験でも分散していた幼体が温度を下げると密集したので、保温のため密集している可能性も否定できない。湿度を上げても幼体の行動は変化しなかったため、保温のためとは考えにくかった。

まどいから分離すると寿命が短くなった要因として、まどいの幼体が未発達であることがあげられる。「まどいの幼体は独立生活できない」ことはこれまでも指摘されている。今回もまどいの幼体は形態的にも機能的にも未発達で、特に2齢グモで顕著だった。しかしこれはジョロウグモの観察なので、そのままコガネグモに当てはめることはできない。まどいの期間はコガネグモ平均11.7日に対しジョロウグモ平均11.1日（観察数302）と近似しているが、コガネグモはジョロウグモと違い1)2齢でまどいを解消する、2)2次まどいを作らない、3)通常は昼も幼体の密集はみられず明暗に反応しない、など異なる点もある。まどいの機序や意義は同一ではないことも考えられ、個々のクモで検討が必要である。

## . 結論

まどいの機序として誘引物質を仮定したが、存在の可能性は低かった。まどいを作る意義としては、コガネグモにおいて出のう直後のまどいが幼体の寿命にとって有効だった。

#### ．謝辞

池田博明先生（神奈川県立西湘高等学校教諭）には全く面識がないにも関わらず，百通を超える電子メールのやりとりを通して研究内容の全般にわたりご指導，ご助言いただいた．西川喜朗先生（追手門学院大学教授）の研究室に伺って幼体の形態についてご指導いただいた．品田哲郎先生（大阪市立大学大学院理学研究科講師）にはフェロモンについて教えていただいた．森中敏行先生（大阪教育大学附属高等学校）には生物を教えていただいている．ご指導，ご助言いただいた諸先生には，深く感謝している．

#### 参考文献

- 太田次郎・丸山工作編 高等学校 生物 B．312p．啓林館，大阪．
- 吉倉 真 1987．クモの生物学．613p．学会出版センター，東京．
- Eberhard, W. G. 1977. Aggressive chemical mimicry by a bolas spider. *Science*, 198:1173-1175.
- Stow, M. K., Tumlinson, J. H. & Heath, R. R. 1987. Chemical mimicry: Bolas spiders emit components of moth prey species sex pheromones. *Science*, 236:964-967.
- 池田博明編．2003．SPIDER DATA. Hypertext version. <http://homepage3.nifty.com/%7Ehispider/>
- 湯嶋 健 1982．昆虫のフェロモン．166p．東京大学出版会，東京．
- William C. Agosta 1995. フェロモンの謎．163p．東京化学同人，東京．
- 高橋正三 1982．昆虫の生理活性検定法．209p．培風館，東京．
- 千国安之輔 1989．写真日本クモ類大図鑑．306p．偕成社，東京．
- 藤崎憲治 2001．カメムシはなぜ群れる？ 257p．京都大学学術出版会，京都．

## 積雪上で採集されたクモ

新 海 明<sup>1)</sup>

東京クモ談話会の採集会は、毎年5月・7月・10月・2月に実施されている。冬の採集会では場所によって異なるものの平均すると57種類(1991年から2000年まで、最少は東京都田無での23種類で最多は神奈川県飯山観音の86種類)のクモが採集されている。他の季節の半分程度とみてよいただろう。

冬期に採集されるクモは他の季節のように木々に造網したり、葉上を徘徊するものはまれで、ほとんどは樹皮下や土壌中あるいは常緑樹の葉間に残された廃網内などに潜んでいたところを探し出したものである。

我々の主たる調査地の関東地方の冬さえ、このような様子であるから甲信越や東北の雪国に生息しているクモは、厳冬期には積雪下でじっと過ごしているものとばかり思い込んでいた。

1996年2月に東京環境工科専門学校の薄葉重先生から、長野県黒姫山の雪上で採集したクモの同定を依頼された。これらのクモは積雪面上を徘徊していたのだという。冬期に雪上を徘徊していたクモというので、どのような特殊な種類かと思ったが、それらはヒシガタグモ・ヤミイロオニグモ一種・オオアシコモリグモ一種といった、我々もよく目にする普通のクモだった(新海1999)。

当時、積雪上でクモガタガンボの調査をしていた金野晋さんにこの話をしたところ、同氏も雪上を徘徊するクモをよく見かけるとの返事をいただいた。さらに金野氏はそれまでに各地の積雪上で採ったクモのリストをすでに作成しておられるとのことだった。

金野氏の採集したクモ類は296個体に及び、雪上を徘徊するクモについてある程度の分析が可能と思われた。

ここでは、金野氏と薄葉氏によって採集された積雪上のクモについて、科や種類の構成、成体の割合などについて分析し、若干の考察を加えた。

### 方 法

調査は、金野氏が1992年から1995年、薄葉氏は1996年と1999年におこなった。調査地は北海道から岐阜県までの1道10県に及んだ(表1)。いずれも11月から3月までの積雪上で徘徊していたクモを見つけ取りによって採集し、アルコールで固定した上で種名を確定した。標本の同定は金野氏の採集品は金野氏が、薄葉氏の方は谷川明男氏が行なった。

1) 〒192-0352 八王子市大塚274-29-603

金野氏の調査地では、積雪量（深さ）とその日の天候も記録してある。

### 結果と考察

両氏によって採集された積雪上のクモは 13 科（科不明 4 例を除く）29 種（確定した種類のみで、種不明 43 例以上を除く）309 個体だった（表 2, 3）。

積雪上から採集されたクモの科構成では、サラグモ科に属するものが最も多く 179 個体（57.9%）を占めていた。このうち 95 個体はヤガスリサラグモ *Neriene albolimbata* だった。本種は特定の地域に豊産したわけではなく、岩手県・宮城県・福島県・新潟県・長野県などから広く採集されたことから、積雪上のクモの優数種と考えられた。次に多かったのはガケジグモ科に属すヤチグモ類で 38 個体（12.3%）だった。このうち 20 個体はヤマヤチグモ *Coelotes corasides* だった。3 番目に多かったのはコモリグモ科で 20 個体（6.5%）だった（表 2, 3）。

積雪上を徘徊していたクモばかりを採集したにもかかわらず、造網性の種類が 264 個体（85.4%）を占めていたのは意外であった。

また、雪上で採集されたクモの成長段階を調べたところ、成体は 139 個体（44.9%）、亜成体は 86 個体（27.8%）であり、成体の占める割合が非常に多かった。成体のクモの性比は  $62 / 77 = 0.8$  であった。優数種であるヤガスリサラグモでは  $48 / 47 = 1.0$  だった。

実地調査をした金野氏によると、雪上で採集したクモは天気がよく暖かい日には多く、風が強く寒い日には少なかったという。ほとんどの個体は雪上をかなりの速さで移動していたが、中にはまったく動かないものもいたという。また、吸虫管で採集したクモがその中で共食いしていたこともあったという。雪上のクモの活動性が高いことを示す証拠のひとつとみなせるだろう。

では、なぜ厳冬の雪上でクモが活動しているのだろうか。金野氏によれば積雪上で活動する昆虫は結構多いのだという。たとえば、トビムシ・カワゲラ・キジラミ・ガガンボなどの仲間である。吸虫管内での食い合いがあったことから、餌の捕獲が目的であったことも十分に考えられる。ただ、造網性種が 85.4% を占めていたので、雪上での餌捕獲の方法がどのようなものであるのかは興味深い。コガネグモ類では円網をはっていたものも少数存在したという。

採集されたクモの 44.9% が成体で、性比も 0.8 だったことから、交配のための移動ということも考えられた。しかし、雪上で実際に交配を観察した例はなかった。

金野氏によれば、クモは木々の根元にあく雪の隙間から出入りしている可能性があるという。

積雪上をクモがなぜ徘徊するのか。「謎」はまったく未解明である。冬期の積雪下の山を訪れる方もいると思うが、ここでクモが採集されるなどは予想もしていなかったに違いない。私自身もそのひとりであった。だが、晴れた暖かな日には雪原上でのクモの採集が可能なのだろう。ぜひとも挑戦してみたいだろうか。そのような記録が増えていけば、いつか雪上を徘徊するクモの謎が説き明かされるに違いない。ここにも多くの観察者の目が重要なのであろう。

### 謝 辞

本稿は薄葉重さんと金野晋さんによる積雪上でのクモの採集記録から生まれたものである。それらの採集品を快く提供して下さった両氏に、心より御礼申し上げます。また、谷川明男さんには

標本の同定をお願いした．ここに記して御礼申し上げたい．

引用文献

新海 明 1999．雪上のクモたち（薄葉重氏の採集品より）．蜘蛛 31：52．

表 1．金野晋氏の調査地点とその概要．

調査地点	調査日	積雪	天候ほか	採集個体数
北海道札幌市南区藻岩山	1992.1.30	50cm	曇 / 晴	1
札幌市西区手稲山	1992.2.1	50cm	曇	1
千歳市千歳空港周辺	1992.2.2	20cm	晴	1
青森県南津軽郡碓ヶ関村久吉温泉	1994.12.3	20cm	曇 / 雪	16
秋田県平鹿郡山内村大松川ダム	1994.12.4	25cm	晴 / 曇	11
雄勝郡雄勝町雄勝峠	1994.12.4	15cm	曇 / 晴	5
岩手県稗貫郡大迫町早池峰山笛貴滝	1993.11.30	10cm	晴	47
	1994.12.2	15cm	晴	26
山形県西置賜郡小国町片洞門トンネル	1994.12.5	30cm	雪（夜間）	1
宮城県苅田郡七ヶ宿町船引山	1993.12.2	15cm	晴	31
福島県南会津郡桧枝岐村	1992.12.2	15cm	晴	30
	1993.12.3	20cm	晴	27
	1993.12.4	20cm	晴	32
新潟県中頸城郡妙高村関温泉	1994.12.6	70cm	晴	9
長野県須坂市梯子山	1992.12.5	10cm	晴	29
	1993.3.2	70cm	曇	0
小県郡武石村霊泉寺温泉	1994.12.27	10cm	曇 / 晴	27
南佐久郡小海町稲子温泉	1993.3.1	30cm	曇	0
諏訪郡富士見町入笠山	1994.12.26	10cm	晴	0
	1995.12.25	10cm	曇（強風）	0
静岡県御殿場市太郎坊富士山	1992.3.20	30cm	晴	数種
岐阜県中津川市恵那山黒井沢	1995.12.26	15cm	曇 / 雪	0

薄葉 重氏の採集地はすべて，長野県黒姫山．

表 2 - a．金野晋氏が採集した積雪上のクモの一覧．

ヒメグモ科

ホシミドリヒメグモ	2f,	ヒシガタグモ	1m, 1y
オナガグモ	1m,	フタスジヒメグモ	1y,
s p .	1m,		

小計 7

ホラヒメグモ科

sp. 1M,

小計 1

サラグモ科

ヤガスリサラグモ 47F, 48M  
 クスミサラグモ 4f, 9m, 1y  
 ユノハマサラグモ 8f, 18m  
 オオサカアカムネグモ 1F, 1M  
 ヤマトケズネグモ 1F,  
 Arcuphantes sp. 4F, 1M  
 sp. 2 1y,  
 sp. 4 1y,  
 sp. 6 1f,

コウシサラグモ 2F, 1M, 2y  
 ハクサンコサラグモ 1F, 1M  
 サザナミサラグモ 3m,  
 ニセアカムネグモ 2F,  
 クロテナガグモ 1F,  
 sp. 1 2y,  
 sp. 3 1y,  
 sp. 5 1F,  
 sp. 7 3f, 6m

小計 172

コガネグモ科

ムツボシオニグモ 1m, 1y  
 ナガテオニグモ 1m,  
 Araneus sp. 1 1y,  
 sp. 3 1m,

カラフトオニグモ 1f, 1m, 1y  
 メガネドヨウグモ 1m, 2y  
 sp. 2 1y,  
 sp. 4 1F

小計 13

アシナガグモ科

ウロコアシナガグモ 2y,  
 sp. 2 1?,  
 sp. 4 1f, 1m

sp. 1 3?,  
 sp. 3 2F,

小計 10

ガケジグモ科

ヤマヤチグモ 6F, 2M, 3y  
 デベソヤチグモ 1F,  
 ヤマヤチグモ一種 1F,  
 sp. 1 2y,  
 sp. 3 1M,  
 sp. 5 1y,

アズマヤチグモ 1F, 3M  
 オバコヤチグモ 1M,  
 ヤチグモ一種 4y  
 sp. 2 9y,  
 sp. 4 1y,  
 sp. 6 2y,

小計 38

ナミハグモ科

sp. 1 1y,  
 sp. 3 1y,  
 sp. 5 3F, 2M,

sp. 2 1y,  
 sp. 4 1F, 1M,

小計 10

コモリグモ科

ハリゲコモリグモ 1F,  
 sp. 2 2y,  
 Pardosa sp. 1 1y,  
 sp. 3 1y,  
 spp. 2y,

Pirata sp. 1 3m, 1y  
 sp. 3 3y,  
 sp. 2 1f,  
 sp. 4 4y  
 小計 19



エビグモ科			
ブチエビグモ	1F,	s p .	1 y ,
		小計	2
カニグモ科			
タカネエビスグモ	4f, 6m, 1 y ,	トラフカニグモ	1m, 1 y ,
ハナナガトラフカニグモ	1 y ,	カニグモ属一種	1f,
		小計	15
フクログモ科			
s p .	1 y ,	小計	1
ウエムラグモ科			
コムラウラシマグモ	1F, 1m	小計	2
キシダグモ科			
s p .	2m ,	小計	2
科 不明			
s p p .	1F, 2m, 1 y ,	小計	3
		合計	295

表 2 - b . 薄葉重氏が採集した積雪上のクモの一覧 .

ヒメグモ科			
ヒシガタグモ	1 y ,	小計	1
サラグモ科			
s p .	4F, 3M ,	小計	7
コガネグモ科			
ヤミイロオニグモ一種	1 y ,	キジロゴミグモ	1 y ,
コオニグモモドキ	2 y ,	カラオニグモ	1 y ,
		小計	5
コモリグモ科			
オオアシコモリグモ一種	1 y ,	小計	1
		合計	14

表 3 . 積雪上で採集されたクモ類の科の構成 . 金野氏と薄葉氏の採集分を合計した .

科 名	科 名	個体数	割合 ( % )
Nesticidae	ホラヒメグモ科	1	0.3
Theridiidae	ヒメグモ科	8	2.6
Linyphiidae	サラグモ科	179	57.9
Tetragnathidae	アシナガグモ科	10	3.2

Araneidae	コガネグモ科	18	5.8
Lycosidae	コモリグモ科	20	6.5
Pisauridae	キシダグモ科	2	0.6
Cybaeidae	ナミハグモ科	10	3.2
Amaurobiidae	ガケジグモ科	38	12.3
Liocranidae	ウエムラグモ科	2	0.6
Clubionidae	フクログモ科	1	0.3
Philodromidae	エビグモ科	2	0.6
Thomisidae	カニグモ科	15	4.9
unknown family	科 不明	3	1.0

---

合 計	309 個体	100.0%
-----	--------	--------

## カトウツケオグモはハエを誘引する？！

新 海 明

中部クモ懇談会の会誌「蜘蛛 36 号（2003 年発行）」の中に、杉山時雄さんと大原満枝さんによる「カトウツケオグモの捕食行動の観察」という報告があった。これを読んで私は仰天してしまった。

野外で葉上にいたカトウツケオグモを発見して観察していたところ、その餌捕獲行動を目撃したというものであった。葉上のカトウツケオに接近したハエが捕らえられた過程を記録していたのだが、問題は葉上のカトウツケオに接近したハエの様子だった。著者らの言葉を借りると「腹部後方 1 センチ近くに近付いた小さなハエの気配にも脚を小刻みに振るわせた。ハエは引きつけられるように前に近付き捕らえられた。小刻みに震わせることで、ハエをおびき寄せているように見えた」また、「小さなハエがカトウツケオグモに頻繁に接近した。1 匹のハエを食べていると、別の 2 匹が周りに飛んできた。その 1 匹は後から近づき、ツケオグモの腹部の突起を舐めているような行動を何回もしていた」というのである。

私が驚いた理由は、かつて近縁種のヘリジロツケオグモを使って誘引の可能性を調べた実験がなされていたからだった [ 千田ほか 1999 ; Acta arachnol., 48(1) ] 。このときの結論は「本実験からは、ヘリジロツケオグモにおける昆虫の誘引の証拠は認められなかった」「しかしながら本研究で示唆されるのは、揮発性の物質による双翅目の普通種に対する誘引の可能性が少ないということ」であり、「今後ツケオグモ属における餌の誘引の可能性についてさらなる検討を加えるためには、野外で実際に捕獲している餌種を特定することが先決であろう」と述べている。

千田さんらは慎重に考察しているにもかかわらず、私は始めに述べられた「ヘリジロツケオグモにおける昆虫の誘引の証拠は認められなかった」という結論だけが頭に焼き付いており、カトウツケオも当然同じように誘引などしていないのだろうと考えていたのだ。

杉山さんらの観察は私の思い込みを覆すものだった。そして、千田さんらが述べていたところの、今後に期待されていた野外での観察記録だったわけである。

私はさっそく杉山さんらに連絡をとってみた。ひとつは報告にあった「現場写真」が印刷の関係で不鮮明であったため写真そのものを送ってほしいというものであり、他のひとつは観察の際に葉上に飛来したハエのサンプルが保存されていないかというものだった。

返事はすぐに届いた。残念ながらハエのサンプルはとっていないとのことだったが、カラーで撮った鮮明な「現場写真」が同封されていた。この写真を見ると複数のハエがカトウツケオの占



図 1 .

座している葉上に飛来し、時にはその腹部に乗って体を舐めているように確かに思えるものだった（杉山さんらの許可を得て、図 1 に掲載する）。

これら一連のことから導かれる仮説を以下に挙げてみよう。

(1) ヘリジロツケオとカトウツケオは種類が異なるから誘引性も異なっている。すなわち、ヘリジロツケオは誘引しないが、カトウツケオは誘引するというものである。

(2) カトウツケオに飛来したハエは単に偶然の産物であり、誘引されているように見えただけである。

(3) 誘引物質は、捕獲姿勢をとったときなど限られた条件でのみクモから発せられる。

(4) ハエを誘引するのは臭いではなく、視覚的なものである。

これらを確認するにはさまざまな実験や観察が必要となろう。しかし、千田さんらも指摘しているようにカトウツケオの採集例は極めて少ない。私もクモの研究をはじめてからこのかた 1 度しか遭遇したことがない。ヘリジロツケオにしても西表島まで出掛けなければお目にかかれそうにない。すでに谷川明男さんには西表島での採集や観察をお願いしてあるが、今年の冬は不作だったらしい。

そこで、これを読まれた方には是非ともお願いしたいのである。

どうか、これらツケオグモ類を発見したらアルコール瓶に直行させないでほしい。生きたまま私の元に送っていただいても構わないのだが、できたら自然下でそのまま 1~2 時間ハエなどの小昆虫が飛来しないかどうか、飛来したときにはクモに接近したときの様子などを記録してもらいたいのだ。そして、捕獲されたり飛来したハエを採集してもらえたら最高なのだが。

1~2 時間じっと観察することなどかなりの忍耐がいることなので、ずいぶんご無理なお願いと承知しているが、ご協力ご賛同いただけたら幸甚である。

この問題の解決には関心を持ったひとりでも多くの「目」が必要だと思うからである。

## 石川県かほく市の暖地性クモ類

斎藤 慎一郎<sup>1)</sup>

### はじめに

石川県の沿海地域には暖地性生物が思いのほか多い。

筆者の住むかほく市(面積 64.76km<sup>2</sup>)は、河北潟の北部から宝達山(標高 637m)の西面と裾野にかけて、日本海岸に沿い南北に広がるやや平行四辺形に類似した新しい市である。河北郡旧宇ノ気町・七塚町・高松町の合併により 2004 年 3 月 1 日に市制が敷かれた。本稿ではそのうち市の北端に位置する旧高松町(面積 26.4km<sup>2</sup>)において、2002 年春～2003 年秋までに筆者が確認したクモ類の中で、暖地性要素と考えられる 4 種の棲息を報告する。

### 調査地の生物地理学的特性

かほく市は対馬海流の洗う日本海岸にあって、最も内陸部にあたる宝達山中でさえ海岸線からわずか 8km ほどしか離れておらず、全般的に海洋性気候である。民家の敷地ではソテツに花が咲き、ウチワサボテンが露地越冬し、ツウダツボク(通脱木ノ一名カミヤツデ)が旺盛に繁っている。野生植物ではシダ類のウラジロが分布するし、カラスザンショウ、ウマノスズクサが自生し、蝶類のモンキアゲハ、ジャコウアゲハの棲息地である。また海岸線に隣接した草地にはツマグロヒョウモンが繁殖している。このような暖地性生物要素に対して、かつて雪国といわれた北陸地方の特性をよく表す日本海要素の植物群が分布している。オオバクロモジ、ヒメアオキ、エゾアジサイ、ユキグニミツバツツジ、ショウジョウバカマ、ホクリクネコノメ、スミレサイシン、オオタチツボスミレ、ナガハシスミレ、デウノタツナミソウなどがそれであって、またコシアブラ、ナナカマドといった冷温帯要素の樹木も散見される。

暖流と積雪に象徴される、冬期湿潤型の複合的気候に対応した生物分布の全般的傾向から、クモ類にあっても暖地性・寒地性の両要素の種群が古来棲息していたであろうと、筆者は 2002 年春に当地へ移住した当初から予測していた。

### かほく市の暖地性クモ類

これまでに筆者が直接確認した当地(厳密には石川県かほく市高松・大海地区)の暖地性クモ類は コガネグモ マルゴミグモ スズミグモ(以上コガネグモ科) マミクロハエトリ(ハエ

1) 929-1215 石川県かほく市高松ヲ 2-1-101

トリグモ科)の4種である。マミクロハエトリは太平洋沿岸部では静岡県を北限とし、神奈川県には見いだされていないところから暖地性要素と考える。

コガネグモ *Argiope amoena* L.Koch 1878

コガネグモは新潟県佐渡島にも棲息し、石川県では能登半島にまで分布するので、この報告には発見といった大袈裟な意味はない。しかし北陸の小さな田舎町の片隅にコガネグモの勇姿を見たときの感動は大きかった。

徳本洋氏が2002年8月の日本蜘蛛学会鹿児島大会で石川県河北郡旧高松町のコガネグモを報告した。同氏はこれに先立ち筆者の案内で旧高松町のコガネグモ棲息地を視察された。かほく市は水田地帯を擁し、農薬の散布がさかんであるが、休耕田も多く、とくに谷あいには放棄水田が優占してアシ原と化している。また近年の休耕による水田にはガマなどが繁り、いずれもコガネグモの棲息適地である。2002年夏の盛期には1枚の休耕田にコガネグモ( )20頭以上を数えるところもあったが、2003年夏には激減した。その原因として付近の水田に撒かれる農薬の影響が考えられるが、正確には不明である。また集約的な農法のさかんな水田・畑作地ではコガネグモを見ることはあまりない。

マルゴミグモ *Cyclosa vallata* Keyserling 1886

2003年秋、地元の高松小学校校庭で幼体を見た。このときは慎重を期して種名まで確定しなかった。同小学校3年生の総合学習授業に招かれ、男子4人から成る「トンボとクモの研究グループ」とともに校庭のクモ類調査を行った際、ツツジの植え込みの上に本種(と後に判明)の水平円網を見た。網の上に丸くて黒っぽい小さなクモがあり、枯れ草の茎で刺激すると網を上を一目散に走ったので、マルゴミグモの幼体にまちがいなかろうと推定したが、とり逃がした。この学校は海岸に近い砂丘の上に立地しており、マルゴミグモの棲息にはまことに似つかわしい土地柄と思われた。

後日(同年11月9日)、砂丘上に広がる住宅地と畑地を歩き、同じクモを探したところ、道沿いの畑の生け垣(カイズカイブキ)の北面に斜めの円網を張るマルゴミグモ( /成体)ならびに幼体を見だし、採集した。管見の及ぶかぎりでは、従来マルゴミグモの日本海側分布北限は福井県敦賀市かと思う。徳本洋氏も石川県で本種はこれまで未記録といわれるので、分布北限更新の可能性を考慮しここに報告するとともに、標本は国立科学博物館動物研究部に寄贈することにした。

スズミグモ *Cyrtophora moluccensis* (Doleschall 1857)

2003年8月19日午後、かほく市(旧高松町)大海西山の丘陵上にある果樹園(柿)の路傍でスズミグモ( )1頭とドーム網を見た。翌朝カメラをもって再訪し、撮影した。このとき他に1頭( )が水平状隠れ帯のあるドーム網に占座し、卵嚢を1個巣につけていた。スウェーデン旅行に出かける直前であり、9月はじめに帰国を予定していたので、これらのクモが初秋まで生きながらえる可能性に賭けて採集をさしひかえた。もっと卵を産んでほしいとの期待もあった。帰国後、9月7日午前に同地を訪れたが、スズミグモは2頭とも消えていた。産卵済みのクモの網は痕跡が認められたが卵嚢は見つからなかった。標本をとっておけばよかったのにとの後悔の念と、やはりこれでいいのだという自己肯定の気持ちが相半ばした。写真は鮮明に写っていた。

柿団地（果樹園）には農薬が使用されており，このような環境でスズミグモと出会えたことは意外に思われた．



図 1 - 3 . 石川県かほく市のスズミグモ  
1(上左)，網． 2(上右)，1 の雌の近接撮影．  
3(下)，卵のうと隠れ帯のある別個体．

#### マミクロハエトリ *Evarcha fasciata* Seo 1992

2002 年 4 月，かほく市（旧高松町）内高松の丘陵麓の休耕田草叢にマミクロハエトリ（成体）を見つけ，6 月に成体 も確認した．同年 5 月 22 日，徳本洋氏が来町，上記のスポットで 15 分間に 5 頭を確認，あとは数えるのをやめた．徳本氏は標本を採取．その後旧町内に 6 カ所の棲息地を見いだす．本種は当地の野外で春から梅雨時に最も普通に見られるハエトリグモとってよく，黒色白条（ ）と出現の季節が顕著なので探しやすい．

#### まとめ

本稿に紹介した 4 種のクモのうち，コガネグモを除く 3 種は日本海岸地方における公刊された分布北限記録かと思う．マミクロハエトリの分布確認は 2002 年のうちに石川県河北郡旧高松町（現かほく市）からさらに北上し，同県羽咋郡志賀町でも見いだされた（未公表/徳本・斎藤）．そこで次の問題は，これら 4 種が日本海側北限記録をどこまで伸ばすかである．とりわけ新潟県佐渡島にコガネグモのみならずマルゴミグモ，スズミグモ，マミクロハエトリが棲息するか否か，佐渡を訪れる同学諸兄妹の調査に待ちたい．

#### 参考文献

新海明 2004．スズミグモの全国分布調査結果（2001～2002 年）KISHIDAIA，No．85，13p．東京蜘蛛  
談話会

新海栄一・高野伸二 1984．フィールド図鑑クモ．87p．東海大学出版会

新海栄一・熊田憲一・斎藤慎一郎 2003．中池見湿地のクモ相．福井県敦賀市中池見湿地総合学術調査報告  
（第9章）311p．国立環境研究所  
千国安之輔 1989．写真日本クモ類大図鑑．214，215p．偕成社

#### 謝 辞

石川県のスズミグモ分布記録の KISHIDAIA 投稿を慫慂された新海明氏に御礼を申します．新海氏のお勧めがなければ筆者の日ごろ重い腰は容易に上がらなかったことでしょう．また徳本洋氏からは，当県のクモに関し平素多大のご教示を賜っており，学恩に深謝をささげます．マミクロハエトリの北限記録更新は徳本氏に誘われての調査行の成果でした．



## 物語に登場するクモ・キャラクターの発展についての一考察

### 「蜘蛛の惑星」再論

八 幡 明 彦

古来より、クモは多くの物語に登場して重要な、あるいは瑣末な役割を演じてきた。古今東西の人々が、クモにどんな役割を託して物語を編んできたかは、とても面白い文化的テーマであると思う。私は世界各地の先住民族におけるクモ説話や、日本の「土蜘蛛」の歴史的位置の探求、児童文学や映画におけるクモ・キャラクターの位置づけなど、色々な側面から「人が語ったクモ」について考えてきた。その総合的考察は、いずれ論文にまとめねばならないと思っている。ここでは小論として、ここ数年に私が眼にした映画と小説形式の物語作品のなかで、特に着目しておきたい特徴あるクモ・キャラクターについて紹介、考察してみたい。

#### 1. 意味論的なキャラクター

神話・説話・小説・映画・児童文学・漫画等々の形式の物語に登場するクモたちの多くは、「蜘蛛」一般として人々の心理にばくぜんとイメージされる性質・性格の化身として用いられていることが、圧倒的に多いように思う。誰もが驚く芸術作品である「網」を作る「創造者」としてアメリカ先住民や漁民の神話に登場し、また逆に「有害で残酷な攻撃者」として歌舞伎「土蜘蛛」から、恐怖映画やパニック映画に登場するなどである。「善」か「悪」かという意味づけのために、クモはある性質を抜き出され、誇張されて、象徴と化している。特定の生物が文化のなかで善悪などの象徴とされ、それが歴史とともに変化していく過程は、それ自体面白い文化的課題ではあるが、ここでは論じない。生物としてのクモを愛し、その特徴に惹かれる「生き物屋」として、クモそのものの姿や生態のリアルな描写がどれだけなされているか、という観点から、作品の「出来」を評価してみたい。

近年、ずばり「スパイダー/アラクニッド」と名のつく映画が続々と出た。「クモ全盛時代到来か?」と期待して片端から見たのだが、クモなど登場しないものもあった。それらを、(1)クモが人の性格や性質を表わす意味論的な符号であるものと、(2)クモ(ないしクモらしきもの)が登場して主たる役割をになうものに分けておきたい。

#### (1) クモが人の性格や性質を表わす意味論的な符号である作品

- ・「スパイダーマン」(2002年ファンタジー作品。主役ヒーローはクモに噛まれて、クモに似た特殊能力を得る。)

- ・「スパイダー」（2002年ミステリー作品・原題 Along Came the Spider・マザーグース「ミス・マフェットの蜘蛛」の寓話にかけた謎解き）
- ・「スパイダー／少年は蜘蛛にキスをする」（2002年ミステリー作品・原題 SPIDER・主人公が部屋に縄で蜘蛛の網状のものを作るシーンあり）

レンタルビデオ店などで借りてご覧になる場合は、「クモもの」と間違えぬよう、お気をつけあれ。この（1）類型にあたるものは、一般にクモそのものの描写に凝ることはない。一場面の舞台道具にすぎないからだ。談話会通信 109号で池田博明さんが考察されている「ハリーポッターと秘密の部屋」（2002）のアラゴグも、CGに凝ってはいるがクモそのものを描くことに力点はなく、このカテゴリーに入ろう。

例外的に映画版スパイダーマンでは、冒頭に実物とCGをあわせたリアルな雰囲気をもつクモ数種を登場させたが、ストーリー展開のなかでそれ以上にクモが活躍することはない。なお、主人公を咬んで特殊能力を受けたスーパースパイダーは、ヒメグモ科の実物に赤と青色で着色したものを、円網種をつくった網からぶらさがらせたところを撮っており、手に噛みつくシーンはCGで、ヒメグモの体に部分的に、目の大きいハエトリグモの顔を貼り付けてあるようだった。

## 2. 形態学的なキャラクター

さてここ数年のクモ映画の第2類型に入るのは以下のものである。

（2）クモ（ないしくもらしきもの）が登場して主たる役割をになう作品：

- ・「スパイダーズ」（2000年パニック作品・原題 SPIDERS・巨大化したクモ型モンスター）
- ・「スパイダーズ2」（2001年パニック作品・原題 SPIDERS・続編）
- ・「アラクニッド」（2001年パニック作品・原題 Arachnid・巨大クモ型エイリアン）
- ・「スパイダー・パニック」（2002年パニック作品・原題 Eight Legged Freaks・化学汚染で巨大化した多種類のクモの襲撃）
- ・「アラクニア」（2003年パニック作品・原題 Arachnia・巨大古代？クモ）
- ・「クイーンスパイダー」（2003年パニック作品・原題 WEBS・ヒトを奴隷にしたクモ型エイリアン）

「クモ・パニック」映画は、1950年代から特撮モノのジャンルであったと言ってもよいほど、古くからたくさん作品がある。人とひどくかけ離れたクモの「形態的な異様さ」がそのまま恐怖を生み出す要素として、重用されてきたのだ。クモが捕食者であることを考えれば、そのサイズを大きくするか、攻撃的性格を誇張すれば、観客を被捕食者の位置において恐怖にたたきおとすことができるという作戦である。ここで重要視されたのは、多くの歩脚、餌捕獲のための粘着糸、毒牙等、クモの形態的特徴である。1955年ユニバーサル社の映画「世紀の怪物／タランチュラの襲撃（原題 Tarantula）」では、実物のタランチュラを大写しにしたものと俳優をフィルム上で合成した。それで十分観客を震撼させた。その後、数々の巨大クモ・パニック映画は、張子の人形を糸で釣る迫力のない時代に入る。1977年「巨大クモ軍団の襲撃（Kingdom of the Spiders）」が実物のみを用いた例外的作品で、巨大にならない実物タランチュラをひたすら大量に登場させ、クモに占領された家から人間が逃げ出す「クモ勝利」のラストも珍しく、嬉しい。そ



1955「タランチュラの襲撃」

して、1990年スビルバーグ映画「アラクノフォビア」がふたたび実物タランチュラとアシダカグモ科の一種(*Delena sp.*)に加え、ロボット制御の「女王グモ」クリーチャーを駆使した。

しかし、CG技術や「エイリアン・クリーチャー」フィギュアの製作が歴史を重ねた今日、なぜか私は1950年代の「タランチュラ実写」パニック作品を超える「迫力」を感じないのだ。どうしても「クモの迫力はこんなものではない。もっと実物のクモから学べよ！」と観客席でつぶやいてしま

うのだ。その理由の一つは明確だ。クモの写実性の欠如である。実物を用いたものを別にすれば、歴代作品で、撮影用につくられたフィギュアも、なんでもござれのはずのCG映像も、実物のクモの迫力を描ききっていないのである。どこかでエイリアンにしているために、クモ屋は醒めてしまうのだ。たとえば、眼の個数があわない、複眼である、牙・触肢のほかに頭部の付属肢がやたら多すぎる（これは映画「エイリアン」以降に顕著なエビカニ型顔の特徴）、叫び声を上げて襲ってくる、捕帯糸を口から吐く、などである。

私が、クモが無条件に悪者扱いしかされないパニック映画を性懲りもなく観るのは、「どうせ嫌われて日々殺されているクモだから、いっそ人間がクモを恐れて逃げ惑う姿が心地よい」という、ちょっと意地悪い感覚ではある。誰かホンモノのクモそのもので、パニックに落ちる人間どもを描いてみせてくれないものが、そんな期待をずっと持ってきた。そんな私が、まあ及第点をあげてもよい、と、うなった映画がある。2002年にたった一つの小さな映画館で短期間上映された「スパイダー・パニック」(Eight Legged Freaks)である。ストーリーも演出もB級パニックものとして期待なく(笑)見られる作品だが、クモ・キャラクターがかなり優れており、製作者のこだわりはそこにこそあった。というのも、フィギュア・CG映像とも、実物のクモの種

類をモデルにして、それを忠実に何十倍かに拡大したものになっているのだ。だから、形態学的なりアルさは、近年のクモものではピカイチであった。登場した巨大クモは、ハエトリグモ科の *Habronattus* 属の一種(これはきちんと学名が台詞に登場)、ユカタヤマシログモ(映画では spitter)、ナガコガネグモ (orb weaver)、オオツチグモ科の一種 (tarantula)、キシノウエトタテグモ型の巣穴を作



2002「スパイダー・パニック」

る一種 (trapdoor spider) , クロゴケグモ (black widow) であり, いずれも形態・色彩から明らかであった。オートパイで逃げる暴走族少年たちがハエトリグモに追い回されるシーンや, 女性がトタテグモの巣穴に瞬時に引きこまれるシーンは, ほんとうに胸のすく思いであった。ただ, 形態学的には最高峰を極めたといつてよいこの作品に残念なのが, 生態的な描写の誤りである。ユカタヤマシログモの吐いた糸は綿飴状の繊維である。ナガコガネグモは徘徊種のように地面をノシノシと歩き, やはり奇妙な唸り声を上げる。こうして見てみると, 残された課題は「糸」や「網」の描写であろう。造網性クモが糸に爪をかけてぶら下がりながら歩く様を見事 CG 映像に出来て, 音も立てずに瞬時に人間を網上で捕らえる様が描ければ, 言うことはない。

### 3. 生態学的なクモ・キャラクター

さて, 映画としては私の絶賛する「スパイダー・パニック」に, なお生態的な描写の物足りなさが残ると言ったが, その点で注目すべき作品が近年いくつか現れてきたようだ。クモというグループは, (例えば甲虫目やエビカニ類の多様性に比較したとき) 形態的には機能が特殊化した小グループに分化することが少なく皆似たり寄ったりの姿をしているが, そのわりに空間的には多様なニッチを占めるように分化したと言える。地上のほとんどあらゆる気候帯に進出, 小型捕食者として大成功を収めた分類群だろう。その点, パニック映画に利用された「形態の異様さ」だけではなく, 捕食生態などのユニークさこそ, 生き物を主人公とした物語に, もっとクリエイティブに活用されてよいはずなのだ(この点は, 私の初の談話会通信への投稿である 1990「『蜘蛛の惑星』あるいは『アラクノトピア』」なる小文ですでに指摘した)。

その意味で最近私が驚きをもって読んだ小説が, 「スパイダー・ワールド 賢者の塔」(コリン・ウィルソン著, 講談社 2001 年, 原題 1987 年「Spider World -The Tower」)だ。これはいまだ未完の長編未来 SF ファンタジーであり, クモの描写だけでなく, ストーリーそのものの面白さも第一級の作品と推したい。第一部の, 砂漠に暮らす人類とそれをとりまく恐ろしい大型節足動物たちの描写は, 現代の砂漠生物の事例をモデルにしていねいに創作されていることがわかる。第一ページから登場するのがクモ綱の最も異様な動物・ヒヨケムシ(人と同じくらいの大きさの)であるのも嬉しいではないか。そして, クモのキャラクター設定が特異だ。この未来世界では, 人間は砂漠の洞窟でクモの襲撃を恐れて隠れ暮らす被捕食者であり, 「デス・スパイダー」とよばれるクモは, 「気球に乗り」(バルーンング), 空のうえから隠れた獲物の心理的な「恐怖心」のありかを探查して(一種のテレパシー), 見つけ出した人間を捕獲し, 連れ去ってクモの国で奴隷にしてしまう, というのだ。ここにはスピリチュアル・ファンタジー風の「恐怖の探信」というアイデアに置き換えられてはいるが, 「物言わぬ静かな捕食者」であるクモの性質が実によく描かれている。網の上で逃げようと暴れるからこそ居場所を悟られてしまうというクモに捕獲された虫のジレンマが, 「恐怖をコントロールできなければ, 見つけられてしまう」という仕組みに置き換えられる。クモ恐怖症の人間心理と, クモの捕食生態の特徴を実に巧妙にむすびあわせたアイデアだと, 私は感服した。恐怖と支配の関連を描いた作品として, 官僚制社会主義政権の崩壊した後のロシアで, ベストセラーとなったというのもうなずける。一節を引用しよう。

「突然、彼(引用註:主人公の少年ナイアル)は理解した。クモは、通りかかる昆虫を待って、巣の片隅で全生涯を過ごす。クモにとっては、巣の振動がほとんど言語の形式となっている。ひと揺れひと揺れが、一つの言葉だ。受動的に待つ以外にすることはなく、自分を囲む何千もの波動を研究している。・・・クモは、木々が視界に入るよりはるか前に、既にナイアルの存在に気づいていた。なぜなら、人間の波動は、ハチの波動と同じくらいやかましいからである。

・・・クモの意識は、ほとんど純粋な知覚だった。クモは、獲物が自らの罠に引っ掛かるのを望みながら、坐って待つことで生涯を過ごす唯一の生物だ。他のすべての生物は、出かけて行って、自らの食物を探し求めなければならない。だからクモは、知覚を、純粋な意志の光線に変える能力を発達させたのだ。ハエが空中をぶんぶんと飛んでいるとき、見守っているクモは、それが巣の中に入るのを欲する。・・・<死蜘蛛(デススパイダー)>が地上の支配者になったのは、意志の力を武器として用いる能力を身につけたからだ。」(「第一部 砂漠のナイアル」より)

地上の支配者である知性をもつ「デス・スパイダー」のほかに、こうした念波で獲物を察知するクモが、トタテグモ、コモリグモ、あるいは造網性クモとして、何種類か登場する。残念ながら日本語訳書に誤訳があり、コモリグモとすべき wolf spider を「毒蜘蛛」と訳したりしている問題もあるが、総じて作品がクモに与えた地位の巧妙なアイデアは、著者のクモへの畏敬の念の現われに違いないと私は感じた。物語が進むにつれ、クモは単なる「悪役」ではなく、静かな知性ある生物として、ナイアルとの間に奇妙な共存意識が芽生えていくのも大変に面白い。こうしたクモの「生態」をSF的に解釈発展(進化?)させたファンタジー物語は、もはや形態学的・分類学的なクモの描写の正確さとは別の次元で「クモらしさ」の魅力をかもしだしている。私の物語好みの分類のなかでは、意味論的なクモ、形態学的なクモに続き、生態学的なクモ物語として、第三世代の誕生を告げた、記念すべき作品である。

最後にもう一作品、映画とも小説とも性格の違う本を紹介したい。厳密には「物語」作品ではないのかもしれないが、「フューチャー・イズ・ワイルド - 驚異の進化を遂げた2億年後の生命世界 -」(Dougal Dixon & John Adams 著、松井孝典監修、ダイヤモンド社2004年、原題 The Future is Wild)である(米国でテレビ映像化もされたようだ)。古生物学者・古気候学者・進化生物学者・動物分類学者らの国際チームが、人類絶滅後の地球上に広がる生態系の有り得る一具体例を生き生きと描きだしたこの本は、CG挿絵とあわせて、たいへん魅力的な読み物だ。登場する動植物は、現在の分類群と無縁の空想の怪物ではなく、氷河期や世界的火山活動による大量絶滅のあとに空いたニッチに、今とは別の分類群の動物が進出したらどんな進化を遂げるだろうか、という関心から描いてみせた一つの可能性の姿である。たとえば500万年後の氷期にアザラシのニッチにおさまった飛べない巨大なカツオドリ、1億年後の温暖期に浅海でサンゴに替わって造礁する紅藻類と、その受精を助ける「ベクター」(媒介動物)役をする遊泳型ウミウシ、陸生の脊椎動物が絶滅したあとの2億年後の第二パンゲア超大陸の高温多湿な森林地をのしあるく巨大な陸生イカ、などなど奇想天外な生き物が登場する。そこには、1億年後のユーラシア南東部にある高山地帯に生息する社会性クモ「シルバースパイダー」も描かれている。現在よりかなり大型のこのクモは、コロニーの共同作業で、谷間に24キロもの橋糸を渡して巨大な網を張り(糸はよりあわされてワイヤー状)、小昆虫や風に飛ばされた植物の種子を捕獲す

る。コロニーには社会性構造があり、複数の女王グモだけが生殖し、ワーカーメスは卵のうを作るかわりに植物種子を糸で包み糸いぼにつけて運ぶという(このくだりの日本語訳が正確でないのだが、おそらく原意はこういうことだろう)。メタリックな銀色の体は、紫外線の害を防ぐとともに、昆虫の誘引にも役立っているらしい。そして驚いたことに、クモが岩の割れ目に溜め込んだ種子の山を、地上最後の哺乳類「ポグル」(クマのような顔の)が食べ、クモはいずれ太ったポグルを女王の餌に供するのだ。社会性アリがアブラムシや菌類を「飼って」いたように、シルバースパイダーはこの「イソウロウ・グマ」を家畜としているのだ。和名をつけるならさしずめ「シロカネ・イソウロウサセ・グモ」であろうか。

この作品が描く世界の面白さの一つは、ニッチが入れ替わって、現代の捕食者である分類群のものが、未来には被捕食者に回っているという意外さである。人類の天下はもちろん、哺乳類の天下も終わっている。そこには、「スパイダー・ワールド」が描いた「クモの天下」と共通する痛快さがある、と感じるのは私ひとりだろうか。ちなみに、この「2億年後」のプロジェクト・チームには、アリゾナ大学の生態学進化生物学准教授 Leticia Avilés(現在はブリティッシュコロンビア大学)の名が見えるが、彼女は社会性クモの研究者という背景がある。また、登場する動植物たちには、巧妙な種間関係の共進化のアイデアや、食物網とエネルギー収支を踏まえた群集構造のアイデアが織り込まれているため、生物種の面白さだけではなく生態系の面白さが感じられるようになっている。大量絶滅期をかいくぐって生き残った分類群の適応放散や、なおも過酷な環境下ではスペシャリストになることによってニッチを確保した戦略など、現代の生態系に見出されるルールも、忠実に(愉快的な未来動物を題材にして)再現してみせられる。それゆえに、本書が名指しで登場させる高山の大型造網クモのほかにも、読者が想像力を広げるならば、もっと空想のクモを思い描いて楽しむことさえできる。1億年後の南極森林地で適応放散した巨大昆虫たちを捕食する巨大造網クモ類がいるはずではないか。2億年後の超大陸中央の砂漠の下にある地下貯水池と花崗岩洞窟に棲む特殊なゴカイ類たちに混じってホラヒメグモ類も群れているかもしれない。現代までの過去4億年間にはさしたる形態的特殊化をとげなかったらしいクモ目が、2億年後にひょっとして形態的特殊化さえとげたスペシャリストを産むとすれば、どんなトンデモグモがどんな捕食生態をとるか、考えるだけで楽しい。

生態面からクモの面白さを反映させた物語というのは、現代私たちが見るクモの生き様に、汲めど尽きぬアイデアの宝庫が横たわっている。この星は「蜘蛛の惑星」なのだから、さらに優れたクモ物語が生まれるのを期待したい。

## 2004年6月の沖縄クモ観察記

谷川明男

2004年6月10日から29日まで、沖縄島、久米島、宮古島、与那国島、西表島をめぐるクモの旅をした。誰に聞いても沖縄は6月が一番よいという。夏の生き物たちが最も生き生きしている時期だし、稀産種が見つまっているのもほとんどが6月だという。この旅行の主目的は、オオハシリグモの近縁種の採集であった。久米島、宮古島、与那国島からはアオグロハシリグモの記録がある。すなわちオオハシリグモの近縁種がいるということである。その正体を見極めるために、それらの島々をめぐる採集旅行を計画した。また、インガキアオグロハシリグモの雄は飼育によって得られた個体しか知られておらず、自然界からは未知である。これを発見することが西表島での最大目的であった。また、沖縄島での稀産種の発見や、西表島でのヘリジロツケオグモの観察も視野に入れていた。この文章は、そのクモ旅で気がついたことをつれづれに書き並べたものである。

### 沖縄島

6月10日、沖縄島に着いた。台風5号が沖縄に接近しており、私の乗った飛行機は、那覇空港に着陸できない場合は関西空港か羽田空港に引き返すという条件で離陸した。台風は、久米島のほうへそれたので、飛行機は無事に那覇空港に着陸した。琉球大学で佐々木健志さんとしばらく四方山話をし、やんばる野生生物保護センターに向かった。さすがに台風がすぐ近くにあるだけあって風が強く、雨もときどきザアッとやってくる。しかし、センターに着くころには天候は落ち着き、夜間観察が可能な状態になった。稀産種がよく採れるシーズンなので、ツシマトリノフンダマシでも見つければいいなあと思い、与那の演習林に出かけることにした。この時期の沖縄は日が長い。20時頃になってやっと暗くなり、観察を始めた。オオジョロウグモはまだ小さい。ジョロウグモも小さな幼体だ。スズミグモもまだ幼体だ。スズミグモの網にチリイソウロウグモが入っていない。ハラビロスズミグモの網にはチリがいた。キヌアミグモの網にもいる。どうしてスズミの網にはいないのだろう。そんなことを考えながらふと照らした大きなシダの葉裏に、このシルエットは、えっ、わっ、ワクドだ。なんとワクドツキジグモの雌成体のようである。これはまったく期待していなかったから大変な驚きであった。網は？ つくっていない。雄は？ いない。糸を張って、その途中にぶら下がっている。これから網を張るのかもしれない。また後で来てみよう。そう思って、さらに奥に入って観察を続けた。しばらく行ったところで、がけ崩れがおきており、道がふさがっていた。きっと台風のためだろう。そこから先へ行くのはあきらめて、ワクドのところにもどってみた。先ほどの状態とまったく違いがない。じっとぶら下がっているだけで動かない。もしかしたらつかみ取りかもしれないと思って、わーっと声をかけてみ



た．すると肢を広げる．それではと思って，すぐそばにいたガガンボみたいな昆虫をつかまえ，肢をつまんでクモに近づけてみた．クモはそれを捕まえようとしているみたいに肢をもがくように動かした．しかしうまく捕まえることはできなかった．この時のムシの羽音が刺激になって．網を張るかもしれないと思い，再びその場を離れてほかのクモの観察を続けた．しばらくたってからまた戻ってみたが，まったく動きがない．また明日の夜に来て網を張るかどうか見るべきであろうか．でもどこかへ移動してしまうかもしれないし，がけ崩れの修復工事が行われれば，大型の車両が入ってくるだろうから，このシダの枝はこすられてしまうだろう．そうすればワクドも落ちてしまうかもしれない．そう思うともう我慢できない．ワクドさんには一晩フィルムケースに入ってもらい，翌日，名護まで出かけてタップを買ってきて入れた．

私は，ワクドツキジグモはトリノフンダマシが好むような環境にいるのではないかと想像していた．しかし，そうではなさそうだ．今回の発見は沢沿いの林道である．また，最近，立て続けに3頭のワクドが発見された場所も小さな沢沿いである．久米島で偶然お会いした千木良先生にお聞きしても，やはり沢で発見されたという．どうもワクドツキジグモは沢沿いに生息しているクモのようである．

翌6月11日はワクドのためのタップを買いに名護まで出たので，そのまま中部をポイントにした．まだ台風の影響が残っていて，時折雨が降る．今回，沖縄島では，シロオビトリノフンダ



上，ワクドツキジグモ  
下，アリグモの一種

マシのうち，シロオビが二つの白点に分かれているパターンの個体が見たかった．これについては新海 明さんがキシダイアに報告している．しかし，この日，シロオビトリノフンダマシは1個体も発見できなかった．やはり沖縄ではトリノフンダマシ類は少ない．夜は，座津武川の源流域に出かけた．オオハシリグモを見ようと思って行ったのだが，少数の幼体が見られただけで，成体は1個体も見ることができなかった．不思議だ．冬でさえたくさんの個体が見られる場所なのに．台風の影響だろうか．

6月12日も中部をポイントにした．本部半島の伊豆味では，いままでに見たことのないハエトリグモを採集した．沖縄島には何度も来て採集しているのだが，うーむ，沖縄の自然は奥が深い．夜間観察でやっとシロオビトリノフンダマシを見つけたが，見つかったのは1個体だけで，それも普通のタイプであった．

6月13日は，琉球大学と名城大学の学生さ



んたちと、与那覇岳に出かけた。ヒメハルゼミがうるさいほど鳴いている。と、すーっと鳴きやむ。そしてまたうるさく鳴きはじめる。日がかげると鳴くのだそうだ。登っていく途中で、琉球大学の学生さんが、アリグモがいるとって呼んでくれた。見ると、いやなんと、見たことのないアリグモだ。アリグモにはいろいろな色彩変異があるが、そういう類の違いではない。しかも全部で5個体も見つけてくれた。これは収穫だ。与那覇岳には毎回来て採集しているのに、こんなのは見たことがなかった。やはり時期のちがいか。

#### 久米島

6月14日、久米島に移動した。久米島ではリュウキュウアブラゼミが盛んに鳴いている。少数だがオオシマゼミの鳴き声も聞こえる。一口に沖縄といっても島によって少しずつ違いがあるようだ。そういえば沖縄島ではまだオオジョロウグモはみな小さかったのに、久米島では少し大きめの個体もいる。さて、久米島の主目的はハシリの採集であったが、こちらは大成果があった。初日の昼、佐々木さんに教わった場所へ夜のポイント探しに行った。レンタカーで走っていると、この先自衛隊通り抜けできません という看板。まあ、ぶつかったら戻ろうと思う間もなく、カーブを曲がるやいきなり自衛隊の基地の門前を出てしまい、しかも、門番の兵隊さんと目が合ってしまった。ここでいきなり逃げると怪しまれると思い、悠然と車を止めて、「クモを採りに来た。この辺に沢はないか。」と聞いてみた。すると、横の小屋からもう一人の兵隊さんも出てきて、それなら水源地がいいという。ほんとは入ってはいけないのだが、島の人もよく入っているからと、行き方を教えてくれた。ヤワさんと一緒になくてよかった。テロリストと思われたら絶対に入れてもらえなかっただろう。夜、そのポイントに行ってみると、沢に下りたとたんに幼



久米島のハシリグモ  
上雌，下雄

体がいた。よしよしここにはいる。でもなんかちょっと違う。クモの手が白くない。沖縄島のも西表島のも手の白さがよく目立つのに、久米島のは白くない。それに幼体も石の上にいる。あの特徴的な姿勢、水面に前脚を差し伸べた姿をしていない。沖縄島のオオハシリとは別種かもしれない。さあ、成体の標本がほしい。久米島には沖縄島よりもたくさんハブがいると佐々木さんに脅かされていたし、さっきの兵隊さんもハブがたくさんいるとっていた。びくびくしながら進んでいくと、雄だ！なんと雄が先に見つかるとは。そして、また雄。そして雄。立て続けに3個体もオスを採集した。雌は？ 雌がない。こんな思いは初めてだ。雌がないなんて。と、ふと気がつくと松の根元によく太った雌がいる。やっと雌を見つけた。

久米島 2 日目の朝、ふと目覚めてワクドの容器を見るとなやら盛んに動いている。よく見ると、おお、卵のうを作っている。トリノフンダマシタイプの卵のうではないかと思っていたが、そのイメージとはまったく違って、葉の上にくっつけているようだ。しかし、昼の観察採集を終えて宿に戻り、さあ、完成した卵のうの写真を撮影しようと、容器を見てみると、なんと、クモしかいない。卵のうがない。朝、やせていたクモは太っている。卵を食べてしまったようだ。

その日の晩、久米島ホテル館の佐藤さんの案内で、白瀬川ダムへ行ってみると、いたいた、ハシリの大きな雌。これで雌も 2 個体になった。そして移動。山里のダムの上流に行ってみると、あらあらハシリだらけ。すごい数だ。ここにもあそこにも。そして、視野の中に一度に 3 個体が入った。雌のそばに雄が 2 個体いる。下には大きな脱皮殻。どうやら雌は脱皮の直後らしい。このハシリは雌の脱皮をきっかけにして交接するのかもしれない。一方の雄が肢を震わせて雌の肢に触れているが、雌は嫌がっている。しばらく観察を続けたが、結局交接には至らなかった。

3 日目の晩は、涸れ沢に行ってみた。沢の入り口に水溜りがあり、そこに大きな雌がいた。ここも生息地らしい。気をよくして沢を登っていったが、結局見つかったのは水たまりにいた個体だけで、水のないところでは発見できなかった。やはり水があるところでないといけないようである。水の流れがあれば、水から少し離れたところにもいるといった感じである。

## 宮古島

飛行機から見る宮古島はやっぱり畑だらけだ。こんな平らな島には沢はないだろう。オオハシリがいるとは思えない。着陸直前、飛行機は島の東海岸を旋回して空港に接近した。東海岸は意外なほど高い断崖であった。その途中に沢はないだろうか。滑走路に入る瞬間、ため池とそこから流れ出ている短い川が見えた。岸は大きな岩である。今晚はあそこに行ってみよう。暗くなるのを待って、着陸寸前に見えた短い川へ行って見た。だめだ。いない。もうあとはどこへ行ってよいかわからない。ポイント探しは明日の昼間にして、とりあえず佐々木さんに聞いた熱帯植物園にでも行ってみよう。

熱帯植物園で観察を始めると、いきなりフルサイズのオオジョロウグモがいた。ん？ 次から次へと見つかるオオジョロウグモは完全に成体サイズだ。それに、ころころとよく太った個体は何頭もいる。幼体サイズの個体のほうが少ない。沖縄島、久米島よりもずっと成長が早いようだ。その後、宮古での観察を通じてたくさんのオオジョロウグモが見つかったが、ほとんどが大きかった。宮古では今がオオジョロウグモの最盛期のようだ。個体数もすごく多い。うじゃうじゃという感じだ。また、ハラピロスズミグモもたくさん見た。

翌朝、眼が覚めると、窓の外ではクマゼミが鳴いている。また鳴いているセミが違う。ハシリのポイント探しをしている途中でたくさん鳴いていたのはミヤコニイニイだった。佐々木さんが紹介してくれた宮古在住の昆虫研究家、平良さんが私のリクエストに応じて、水の流れているところをいくつか紹介してくれた。やはり飛行機から見た東海岸の断崖がポイントのひとつだった。地下水の流出しているところがたくさんあるという。

夜、昼の間に下見をしておいたポイントをまわった。まず、来間島の断崖の下にある小さな鍾乳洞の出口。いない。次は、ムイガーの湧水。ここは断崖の下部から地下水が湧き出している。



宮古島のアシダカグモの一種  
上雌，下雄

そのすぐ手前で大きなヤシガニを見ることはできたが、肝心のハシリは、いない。次、浦底の近くにある湧水、いない。次、その裏側の水田へと流れている小さな沢、いない。次、宮原小学校付近の水路、いない。だめだ、気配もない。幼体すら見つからない。やはり宮古にはいないのか。しかし、過去に記録されているアオグロハシリグモはなんなんだ？ 昔は生息していたものの絶滅してしまったのか？

翌日、またポイントを探しまわったが、昨日まわった場所と同じようなところしかなかった。そうこうするうちに、台風 6 号の影響で天気が悪くなってきた。すでに海は大荒れの状態だ。ついに雨が降ってきたので、最後に鍾乳洞に入ってみた。城辺町友利のあま井というところだ。昔は水を汲み出す井戸として使われていたと説明板に書いてある。最後の期待をこめて探してみたのだが、いない。だめか、と、ふと見上げた天井にアシダカグモの姿があった。

ん？ ちがう。アシダカグモじゃない。ホソミアシダカグモのようだ。鍾乳石のでこぼこが邪魔で、採集には苦労したが、何とか雌雄の標本を確保した。宮古からホソミアシダカグモの記録はまだなかったように思う。うまくすれば新種かもしれない。まったくの坊主で終わってしまいそうだった宮古島で、最後の最後に成果があった。初めて沖縄で無駄足を経験するかと思ったが、やっぱり沖縄は無駄足ということのないところであった。しかし、宮古は手ごわかった。そして、水際ばかり見て回ったが、オオシロカネグモがまったく見られなかった。沖縄島でも久米島でも水際にはうるさいくらいにいたのに。

### 石垣島

ハーリー祭りのために満席なのか、与那国行きの飛行機の予約が取れず、宮古から与那国へ 1 日で移動することができなかった。飛行機の乗り継ぎのために石垣で 1 泊しなくてはならず、6 月 20 日の午後は石垣島を見てまわった。森の感じがなんとなく懐かしい。見慣れた感じだ。今までの島々の森とはちょっと雰囲気が違う。そうだ。これは西表の森の感じだ。やはり近いだけあってよく似ている。緑の塊といった感じである。宮古の森のようにすかすかしていない。林縁はいろいろな植物にふさがれてマント群落をしっかりと形成している。於茂登岳のふもとでふと気がついた。オオジョロウグモが小さい。久米島レベルだ。宮古ではみな巨大な成体になっていたのに。うーむ。そして鳴いているセミはヤエヤマニイニイだ。ホテルに入って荷物を整理すると、わー、ワクドが死んでいる。動かない。宮古空港では生きているのを見たのに。いっしょに

つれて歩いているヤエヤマサソリモコゲチャオニグモも無事なのに、大ショックだ。これで、自力で卵のうを確認することは、かなわぬ夢となってしまった。

### 与那国島

与那国の第一印象は、セミが鳴いていないことだ。セミはいないのか？そして、初日の昼間にはオオジョロウグモも1個体も見なかった。夜は、昼の間にあたりをつけておいたアンガイミドゥチへ、オオハシリグモの仲間を探しに出かけた。途中のサトウキビ畑でイワサキクサゼミが鳴いていた。初めてセミの声を聞いた。ポイントに着き、道から沢へ降るとすぐに大きな水溜りがあった。いた。雌だ。イシガキアオグロハシリグモの成体サイズくらいである。しかし、かなり深い水溜りの真ん中にある巨石のへりに静止している。クモに手が届くように体を持っていくと、片手は体を支えていなくてはならず、もう片方の手だけでクモを採らなくてはならない。このクモは片手で採れるほど甘くない。だめだろう、と思ったからだろうか、やっぱり逃がしてしまった。しかし、そのおかげで新たな発見があった。このクモは泳ぐことができる。沖縄島のオオハシリグモや西表島のイシガキアオグロハシリグモも驚くと水の中に逃げ込むが、岩を伝って水の中に入る姿しか見たことがなかった。いま見たのはそうではない。クモは驚いて、ジャンプして水におちた。水に浮いていれば片手でも捕まえられると、ほっとしたのもつかの間、水面にクモがない。おやっと思うとクモは水中を泳いで岩の下へ隠れた。ミズグモ以外のクモが水中を泳いでいるのははじめて見た。その後、このポイントでは10個体のハシリを発見したが、すべて雌か幼体であり、雄を発見することはできなかった。ここのハシリはイシガキアオグロハシリグモくらいの大ささしかない。いや、もうすこし小さいかもしれない。少なくともオオハシリや久米島のハシリよりはずっと小さい。そして久米島のハシリと同様に手が白くない。しかし、久米島のハシリとは違って、すべての個体が水際において、水面に肢を差し伸べていた。水のないところでは1個体も発見しなかった。ここのハシリは水にかなり依存しているようだ。あたりをつけておいたポイントの多くは涸れ沢である。しかし、ここでは水のあるところでないのだめなようだ。ポイントはかなり少なくなった。雄は発見できるだろうか。帰り道、やっとオオジョロウグモの幼体を1個体だけ発見した。ホソミアシダカのようなアシダカグモは何とか雌雄1対を採集することができた。そして、宮古と同じくこの水辺にもオオシロカネグモがいない。沢を歩いていても、行く手をさえぎる網がまったくないのだ。シロカネばかりかアシナガの類もいない。不思議だ。そういえばスズミグモもまだ見ていない。

与那国では、ポイントが見つからないときの相談役として、アヤミハビル館の村松さんを紹介してもらっていたが、なんとか自力でポイントを探ることができた。2日目は、その旨を連絡してから、久部良バリへ網を張るコモリグモを見に行った。網を張るという珍しいコモリグモは、半年ほど前に東京大学の馬場友希君がここで発見した。いくつか網を見つけたが、なかなか採集するのが難しい。馬場君に電話をしてアドバイスをもらった。クモが隠れ家の結構奥にいるのと草の間にすばやく逃げ込んでしまうために採集がうまくいかないことが多かった。それでも、なんとか雌は5個体採集することができたが、雄が見つからない。卵のうをつけている雌もいたから、すでに時期が遅いのもかもしれない。それにしても直射日光の下での採集は暑くてかなわない。



上，与那国島のハシリグモ  
下，網を張るコモリグモ。

沖縄に来ていながら、今までほとんど日に焼けてすんでいたのに、ついに両腕が焼けてしまった。夜に來れば網の上に出ているのではないかと考え、暑い中での採集は午前中で切り上げた。その後、久部良岳のふもとへ行った。林縁や林内にクサグモがたくさんいる。これは意外だった。しかし、チリイソウロウグモは入っていない。木の幹をよく探すとナガイボグモがいた。でもこの日は、オオジョロウグモも、スズミグモも、ハラピロスズミグモも1個体も見なかった。ウズグモ類もない。不思議な島だ。

夜、まずハシリの雄を探しに出かけた。田原川の農業用水の水源地。だめだ、雌もない。次は久部良岳と宇良部岳の間の農業用水の湧水地。だめだ。これで水の流れているポイントは尽きた。アンガイミドゥチに時期を少し早めてくるしかないか。気を取り直して、久部良巴りにコモリを見に行ったら、予想通りクモは網に出ている。これならすぐに雌雄を判断でき

る。幼体が多い。雌の成体が少し。しかし、ついに雄は見つからなかった。

3日目。眼が覚めて驚いた。クマゼミの大合唱だ。昨日まではぜんぜん聞こえなかったのに。今朝はセミの鳴き声がものすごい。今日は曇っているからだろうか。そして、夕方宿に戻ってみると、あれだけたくさんセミが鳴いていた山は、また静まり返っていた。この日は午後からよく晴れた。そのためだろうか。昼の間は、クモの採集がてら水の流れている沢を探したが、その間に、やっとオオジョロウグモの幼体2個体と、ハラピロスズミグモ3個体を発見した。夜は、昼間見つけた沢へ、最後のハシリのオス探索へ出かけた。沢へ降りるとすぐに幼体があった。よかった、ここはハシリのいる沢だ。やはり手は白くない。少し行くと雌の成体が3個体並んでいた。雌の標本は足りているので、水にもぐるところをもう一度見ようとして、クモの体をつついてみた。すると意に反して、このクモは水面をびちゃびちゃと走って逃げた。少しはなれたところで水面に浮いていたので、容易に捕まえることができた。次の個体も、3個体目も同じであった。結局、状況によっていろいろだということのようだ。でも、岩を伝って水中に逃げ込む姿だけは見るができなかった。

西表への移動日の朝、裏山はやはりクマゼミの大合唱だ。今日は日がさしている。このすごいせみ時雨が普通だよなあ。やっぱり最初の日にぜんぜん鳴いていなかったのが不思議だ。

#### 西表島

実は、前回西表に来たとき、意識せずに1頭のヤエヤマサソリをつれて帰ってしまった。家に



帰って荷物を整理したら、リュックサックの中から出てきたのだ。その後、約半年間飼育して、今回島に帰そうとつれてきていた。島に着くとさっそくいつもサソリが見られる祖納の墓場に行き、サソリのアパートとなっているブロックのかたまりに放した。周囲の山ではヤエヤマニイニイが鳴いていた。

初日の夜間観察は浦内川から西のポイント3箇所を回った。目的は、イシガキアオグロハシリグモの雄の採集である。沢に入ると、ヤサガタアシナガグモが多い。オオシロカネグモはほんの数個体しか見なかった。こんなに少なかったかな。オオシロカネグモはもっとたくさんいたように思ったのだが。何個体か発見したオオジョロウグモはやはり小さな幼体であった。こうして見ると、宮古島の大きな個体がとても不思議だ。なぜ宮古島だけあんなに大きくなっていたのだろうか。さて、目的のイシガキアオグロだが、雌しか見つからなかった。まあ、いままで21年間見つけていないのだから簡単には見つからないのかもしれないが、この時期に来るのは初めてなのでかなり期待もしている。明日に期待をつなごう。

2日目、午前中に白浜林道(中断道路)へ行った。車を降りるとすぐにヘリジロツケオグモがいた。カトウツケオグモがムシを誘引しているということが強くほのめかされている写真がある。その真偽を確かめたいが、カトウツケオグモはそうおいそれとは見つからない。かわりに比較的楽に見つけることのできるこのヘリジロツケオグモで確認しようとしていた。そこで、さっそくしばらく見ていた。まったくムシがやってくる気配がない。そのあたりを観察してまた見に戻ってこよう。ちょっといくとまたいた。そこでも少し見ていたが、ムシは来ない。しばらく行くとまたいた。3頭になった。これは、どうしたらいいだろう新海さんに電話をして聞いてみるとやはりじっと見るしかないという。しょうがない、ではしんかいることにしよう(じっと立ちすくんで、あるいは座り込んでクモの観察をすること)。ちょっと離れたところにいた1頭(C)を2番目(B)のところに連れてきて葉の上に放した。その後、4時間しんかいったのだが、結局、いずれの個体もムシを捕ることはなかった。夜また来てみよう。一番最初に見つけた個体(A)も移動させ、一箇所に集めて山を出た。

夜、イシガキアオグロハシリの雄の捜索に行く前に、ヘリジロツケオのところに寄ってみた。あとからその場所につれてきた2頭がいない。やっぱりそういうことしちゃだめか、と、周囲を探してみると、Cがすぐ隣のクワズイモの葉にいる。おーしかも何かハエを捕まえている。餌を捕ればここに定着してくれるかもしれない。でも、貴重な餌の記録だ。とりあえず写真を撮って、ちょっと悩んだ末、餌は取り上げた。するとそのあたりを歩き回って、隣の葉に移動し、そこで静止した。そのまま落ち着いてくれよ。Bはというと、葉の表面で待機姿勢をとっている。夜も餌を捕れるのだろうか。ハシリ探しのあとでもう一度来てみよう。

ハシリの雄の捜索は、今日は船浦の水道施設の裏の沢に行くことにした。ついでにオオハラダカグモ(2年前にここで発見した)の定着状態も見てもこよう。沢に入ったとたん、いた、石の上にハシリの雄がいた。手が白くない。頭胸部のヘリは幅広く白い。そして体は小さい。飼育個体よりやや大きいくらいか。長年探し続けたクモだが、出現はあっけなかった。しかし、手が白くないのは意外だ。メスの手は真白なのに。ほかにもいるかと思って、さらに奥に入っていったが、雄はその1頭だけであった。オオハラダカはいない。やはり一時的な定着だったようだ。



イシガキアオグロハシリグモ  
上, 雌, 下, 雄

ヘリジロツケオのところに戻ってみると .B は変わりなし . C は , なんと , もとの葉に戻っていた . しおり糸が残っていたのだろうか . このまま定着してくれるとよいのだが . . . . . また明日 , 見に来よう .

3 日目 , 気になるヘリジロツケオのところに  
行ってみると 両者ともに昨日と同じ場所にいる . よかった . さっそくしんかいることにした .  
きょうは昨日見なかった小さなハエが時々飛来する . 葉の表面に止まるとくるくるとせわしなく走り回るハエだ . 9 : 57 , C がこのハエを捕らえた . せわしなく走り回っている間にクモの直前に来て捕らえられた . そのハエを取り上げるのはちょっと気の毒だったので , また飛来したほかの個体を採集した . これでツケオの捕った獲物を 2 つ確保した . しんかいったかいがあったというものだ . 12 : 00 で中断し , 16 : 40 と 20 : 44 に見に来たが , 特に変化はなかった .

4 日目 , 午前のしんかい中に , 見失っていた A が隣のクワズイモの葉にとまっているのに気がついた . しかも何か食べている . 取り上げようとよく見ると小さなハエトリであった . これでは取り上げても種名は絶対にわからないから , そのまま食べてもらうことにした . 今日 C のクモのところによく走り回る小さなハエがよく飛来した . 隣の葉と比べると明らかに飛来頻度が高い . これを見ると誘引しているように思われるが , B や A のところへはそれほど来ていない . うーむ .

夜は , 沢には入らずに山道を見た . ここで不思議だったのは , ヤマシロオニグモをまったく見なかったことだ . 沖縄島では真っ盛りであった . たくさんの個体を見たのだが , 西表ではぜんぜん見ない . ワキグロサツマノミダマシやコゲチャオニグモの幼体が見られた . また , セイロンアシナガグモの雄がミナミノシマゴミグモの網をのっとっているところを目撃した .

最終日は , 昼から午後にかけてヘリジロツケオグモの前でしんかいった . 台風の影響でけっこう風があり , 観察ポイントがちょうど風の通り道なので , 葉が揺れて見にくい . 気がついたのは , 昨日と葉に飛来するハエが違っていることだ . 昨日 , C のところによく飛来していたハエが今日はまったく見られない . 代わりに , クワズイモの葉の上にいる A のところには黒くて小さいハエ , これも葉にとまると歩き回る , がけっこう来ている . 周囲の葉と見比べてみると , クモがいる葉よりもむしろクモがいない葉のほうがハエの個体数は多い . これも誘引については否定的な光景だ . A は 11 : 54 と 12 : 18 にこの黒くて小さなハエを捕らえた . 12 : 48 に A は葉の裏へはいり , すぐに表に出てきた , が , 出てきたときにはハエを持っていない . おやっと思って葉の裏を



上，2頭のハエを捕らえたヘリジロツケオグモ  
下，葉の裏につけられたハエ

見ると，そこにハエがつけてある．食べきれないので貯食したように思える．Aは12:51にアリを捕らえたが，すぐに放した．やはりアリは食べないようだ．いつもはアリが近づいても無視しているか，あるいは前脚ではじいてしまうのに，何を誤解したのか他のムシを捕らえるのと同じようにアリを抱きかかえた．15:43に，Cは葉柄づたいに歩いて隣の葉へ移動した．静止するとすぐに座布団を少し作った．座布団は，自分がいる場所を決めるとすぐに自分で作るものようだ．

最後の夜間観察には，美田良（アシナガグモ通り）に行った．西表トンネルができて，ここが裏道となってからは，周囲の草刈があまり行われなくなったので，ますます観察にいい状態になった．今回特に気がついたのは，ヒゲナガハシリグモが目立ったことである．ヒゲナガハシリグモは，水辺でよく見られるクモなのに，水田のそばとはいえ，道路際のススキの葉にとまっているのを見て不思議な気がした．



## 二人のデーニッツ 小さな誤解について

笹岡文雄

### 1. はじめに

今日我々はウィルヘルム・デーニッツ (Friedrich Karl Wilhelm Dönitz, 1838-1912) について、ハエトリグモやサラグモに冠せられたその名から、彼が日本のクモ学に残した足跡の一端を知ることが出来る。

にもかかわらずデーニッツの日本における業績について包括的に記した物は、かつて江崎 (1955) のもののみであった。しかし近年、そのクモ学における名声に比して不明な点の多かったデーニッツの業績についても多数の研究によりかなり明確になりつつある。

小関 (1977, 1980) は彼の滞日中の行動および業績を詳細に調査した。また市場 (1975, 2001) は佐賀県勤務時代の医学業績およびクモの採集状況を記している。さらに篠原 (1995) はデーニッツの日本の動物相研究への治績を詳述している。

その江崎の記したものに W. デーニッツと旧ドイツ海軍提督 K. デーニッツとが親子関係にあるという文章がある。これは多分に疑義があると思われるが、現在までに検証された後がない。

このことは W. デーニッツの業績と直接関係がないものの、それを事実として引用する向きもあり、筆者は本邦で入手できる資料で検証を試みた。

### 2. 記述について

江崎の著作「日本昆虫学史話」の文末に「ドイツ海軍の潜水艦の最高権威で、(中略) 悲劇的な終戦を迎えた Karl Dönitz 提督は彼の子息であったという。彼は日本滞在中その婦人を同伴していたので、Karl は日本で生まれたのかもしれない。」とある。

この点についてはすでに小関 (1977) の指摘がある。それは「なお、長男アルフレッドを第二次大戦中のドイツ海軍の Karl Dönitz と混同している論文があるがこれは誤りである。デーニッツ提督は一八九一年ベルリン生まれである。」と書いている。小関の指摘する論文が江崎のそれであるかどうかはわからないが、その点について明確に否定している。

しかし小関はウィルヘルムの長男アルフレッド (Alfred) とカール・デーニッツ提督 (Karl Dönitz, 1891-1980) との混同を指摘しているものの、カールがウィルヘルムの子息でないとはまでは言い切っていない。ウィルヘルムは 1886 年に家族と共に帰国しているのでその後母国でもうけた可能性は残る。

この点について篠原 (1995) は江崎・小関双方の記述を引き、子息であるかどうか未確認としている。

### 3. カール・デーニッツ提督について

カール・デーニッツは生涯に自伝 (Mein wechselvolles Leben 邦題「ドイツ海軍魂 デーニッツ元帥自伝」)、回想録 (10 Jahre und 20 Tage 邦題「デーニッツ回想録 10年と20日間」)、他 1 編 (Die U-Bootswaffe 邦訳なし) の 3 つの著作を残している。

その自伝に家系は農家であり、1857 年生まれの父はイェナ Jena のカール・ツァイス社で技師をし、そして一度も国外へ出たことがないと書いている。また自身も小関の記述通り、1891 年 9 月 16 日ベルリン市郊外のグリューナウ Grunau で生まれている。兄弟は兄が 1 人、また 1895 年に母親と死別し、その後も父親は再婚しなかった。

これらの記述からカール・デーニッツが、ウィルヘルムの子息ではないことは間違いない。ただカール自身、ウィルヘルムと思われる人物のことを耳にしていたらしく、同書には以下の記述

もあった。

「日本が西洋文明に対して鎖国を解いた後の 1864 年に、最初に招聘された医学の大学教授の中にデーニッツという名前も含まれていた。このデーニッツは後年、日本の天皇の侍医になっている。」

ただウィルヘルムが来日したのは 1873 年であり、天皇の侍医にもなっていない。日本における医学関係の招聘外国人で、デーニッツという姓の人物はウィルヘルムだけであるので、まったく別の人物と混同していると思われる。

招聘外国人医師で唯一、天皇の侍医になったエルウィン・ベルツ (Erwin von Baelz, 1849-1913) は、

ウィルヘルムと同じドイツ人であったので恐らく彼であろうか。

カールの記述から推定するとウィルヘルムとカールは同じ一族、遠縁にあたるかもしれない。しかしながら本邦の資料ではそこまで検証できるものは見つからなかった。

カール・デーニッツ Karl Dönitz 略歴

妻, 2 男 1 女

1891. 9. 16 ベルリン郊外グリューナウ生まれ

1910. 4. 1 海軍兵学校 (Seekadett) 入校

第一次世界大戦中, U-Boot の艦長を務める

1939. 9. 19 潜水艦隊司令長官 (BdU)

1942. 3. 14 海軍大将

1943. 1. 30 元帥

1943. 1. 31 海軍総司令官

1945. 4. 20 ヒトラーの後任の総統に指名

戦犯容疑で逮捕，ニュルンベルク裁判にて有罪，禁固 10 年．

1956.10.1 釈放

1980.12.24 ハンブルク近郊，アウミューレ Aumuhle の自宅にて死去，享年 89 歳．

#### 4．ウィルヘルム・デーニッツについて

ウィルヘルム・デーニッツの日本における業績については前述の通り，江崎（1955），小関（1977，1980），篠原（1995）の他，中原（1974），鍵山（1981）がある．

フリードリッヒ・カール・ウィルヘルム・デーニッツは 1838 年 6 月 27 日，プロイセン国の首都であったベルリン府に生まれた．日本暦では幕末・天保 9 年，12 代将軍家慶の治世下，大塩平八郎の乱の翌年，蛮社の獄の前年にあたる．ベルリン大学で医学を修め，1864 年に医師免許を取得する．

明治初期，日本は急速な近代化を達成するために，海外から各分野に多くの学者・技術者を招聘した．世にいう「お雇い外国人」であり，ウィルヘルムもその内の一人であった．

1873 年（明治 6）東京医学校（後の東京大学医学部）に，解剖学および組織学の教師として赴任している．雇用期間 3 年，俸給は小関（1977）と鍵山（1981）が月額 300 弗，中原（1974a）は 300 円としている．この間さらに 1875 年内の半年間は月給 170 円追加の兼雇として警視庁と契約している．

東京医学校雇用期間満期後はその契約を更新せず，期間 3 年・月給 500 円にて警視庁雇となる．警視病院にて法医学に基づく診断および臨床講義を行った．ウィルヘルム・デーニッツが日本において医学者としてもっとも評価される治績がこの法医学の分野であった．（中原 1974b）．

この後 1879 年（明治 12）今度は長崎県に 3 年契約・月給 300 円（後 500 円に昇給）で，雇用され，佐賀（佐賀は明治 16 年に分離するまで長崎県）に赴任することになる．佐賀における雇用（佐賀郡立佐賀病院）は 1880 年（明治 13）の一時帰国をはさんで 1885 年（明治 18）までおよび，この間九州各地に採集旅行をおこない，クモ学を始め生物学における多くの治績を残した（中原 1974c，市場 2001）．

当時外国人は日本国内を自由には行き来できず，必ず外務省の許可が必要であった．デーニッツも東京に滞在している頃から何度も「通行免状」の発行を願い出ている．

佐賀においては公用および自身または家族の療養については，県令の仮免状にて旅行が許可されることになった．東京滞在中より自由に出入りできるようになった彼は，かなりこれを採集に利用した節がある．その後はさらに巡回治療や急患診療の為には免状の申請が事態に対応出来ないため，随時有効の公用免状が発行されることになる．これによってデーニッツは業務という口実が必要とはいえ，実質佐賀県内はどこでも自由に事前承認なしで行き来出来ることになった．

おもしろいことに手続き上，池田寿助院長の私雇とし，さらに公立病院の雇いなので「官雇」扱いとするとされていることである．（小関 1980）予算は長崎県から支出されていたのは間違いないが，どうしてこのような経緯になったか不明である．

佐賀時代は臨床医として診療に尽くし，また佐賀医学校においても教鞭を執った．そしてこれらの業績によって 1884 年（明治 17）10 月佐賀県令より内務省へ「独逸国人へ勲章授与之儀上

申」が出され、同 12 月勲四等旭日小授章を受勲している（中原 1974c, 市場 2001）。

本邦の各資料とも佐賀への赴任の経緯についてはまったく記録がなく現在も不明である。市場（1975）は佐賀病院関係者の尽力があったのではないかと推定するのみである。また市場は東京滞在時も各地へ採集旅行を行っていることから、各種の生物を九州地方で採集できることに魅力を感じた可能性も指摘している。

ドイツに帰国後、母校ベルリン大学で衛生学ついで伝染病学を講義した。コッホ(Robert Koch, 1843-1910)と共に伝染病媒介昆虫の研究をし幾多の論文を書いた。（江崎, 1955）

そしてベルリン昆虫学会に入会、後に会長にもなった。

1912 年 3 月 12 日、ベルリンにて化膿性腹膜炎にて死去、享年 73 歳。



Friedrich Karl Wilhelm Donitz  
(江崎悌三著作集 2 p.91 より)

#### 最後に

この説の出所は明らかではないが、江崎は「日本昆虫学史話」を軽い読み物のつもりで書いたと記していることから、彼自身かもしれないがどうであろうか。

#### 謝 辞

故高橋登さんから、江崎の文章の紹介を紹介してもらってから 10 年余がすぎました。高橋さんもその記事に関心を持っておられ、雑談の中から私が事実を追跡して見ることにしました。その後すぐ簡易な調査版を東京蜘蛛談話会通信に寄稿でき、とりあえず高橋さんにはご報告できました。

たださらに本邦の資料を出来るだけ調査したものをお知らせすると約束したまま、怠慢にも時間が打ちすぎる内、高橋さんは急逝されました。本稿をおこすにあたっても資料のやり取りがあり、また色々アドバイスもいただきました。その成果をご報告することもできず、今日を迎えてしまったのはもう取り返しがつきません。

高橋登さんにはあらためてお詫び、また厚く感謝を申し上げる次第です。

そしてまた篠原圭三郎さんには本稿執筆の際、ご著作文献をご寄贈いただきました。重ねてお礼を申し上げます。

#### 参考文献

##### ウィルヘルム・デーニッツ関係

石橋長英・小川鼎三 1969. 鹿島研究所出版会, 東京, お雇い外国人 9 医学, pp.213.

市場利哉 1975. 佐賀県でクモを採集した W. デーニッツ. 採集と飼育, 37: 1-4.

市場利哉 2001. 佐賀病院の御雇教師 W. Dönitz ノート. 佐賀自然史研究, 7: 1-8.

- 江崎悌三 1955 . 日本昆虫学史話 1 . 昆虫 , 23 : 120-123 .  
( 江崎悌三 , 1984 . 新思索社 , 東京 , 江崎悌三著作集 2 . 日本昆虫学史話明治篇 , 87-139 . )
- 鍵山栄 1981 . 佐賀医療の功績者デーニッツ . 佐賀史談 , 12 : 16-22 .
- 小関恒雄 1977 . 御雇教師ウィルヘルム・デーニッツ . 日本医史学雑誌 , 23 : 29-41 .
- 小関恒雄 1980 . 御雇教師ウィルヘルム・デーニッツ ( 二 ) . 日本医史学雑誌 , 26 : 54-65 .
- 小関恒雄・市場利哉 1990 . デーニッツの明治十八年福岡旅行 . 日本医事新報 , 3477 : 59-61 .
- 篠原圭三郎 1995 . 日本動物相研究へのウィルヘルム・デーニッツの貢献と彼をめぐる動物学者達 . 東京都葛西南高等学校紀要 , 15 : 15-29 .
- 中原英典 1974a . 警視庁御雇人ウィルヘルム・デーニッツおぼえがき ( 上 ) 明治警察史資料 13 . 警察研究 , 45 : 125-134 .
- 中原英典 1974b . 警視庁御雇人ウィルヘルム・デーニッツおぼえがき ( 中 ) 明治警察史資料 13 . 警察研究 , 45 : 85-100 .
- 中原英典 1974c . 警視庁御雇人ウィルヘルム・デーニッツおぼえがき ( 下・完 ) 明治警察史資料 13 . 警察研究 , 45 : 97-115 .
- カール・デーニッツ関係
- デーニッツ , K . 1981 . ドイツ海軍魂 デーニッツ元帥自伝 . 224p . 原書房 , 東京 .
- デーニッツ , K . 1986 . デーニッツ回顧録 10年と20日間 . 438p . 光和堂 , 東京 ,  
その他
- 笹岡文雄 1996 . クモと潜水艦 二人のデーニッツ . 東京蜘蛛談話会通信 , 86 : 10 .

## オペレッタ『夜叉蜘蛛』のこと

中 島 晴 子

### はじめに

日本音楽に現れるクモといえばまず「土蜘蛛」、あとにも先にもこれひとつ、という観があります。能の『土蜘蛛』に始まり、それが歌舞伎の中での長唄、常盤津、また浄瑠璃などにいわゆる「土蜘蛛もの」という形で何度も登場します。そこでのクモはきまって（話の元が同じですから当然かもしれませんが）、おどろおどろしい「魔もの」の姿で現われ、人間に悪さをしかけるも最後には討ち取られて終るといった典型的勤善懲悪の悪の代表格を演じるのです。

この何とも恐しげな姿が、日本人の「クモ嫌い」に長年にわたって「貢献」してきたとは言えないでしょうか。『みつばちマーヤの冒険』に出てくる憎たらしいクモが多くの少年少女たちを洗脳(?)してきたように。

私はずっとそのことを口惜しく残念に思っておりました。そして蠅螂の斧に例えることさえおこがましい身でありながら、多少とも音楽創作に携わる者として何か出来ることはないかと考えていたそんな折、ひとつの出会いがやってきました。それは東京蜘蛛談話会で企画された「クモグッズ展」で八幡明彦さんご紹介下さった一冊の絵本です。『月夜のかりうど』（文・松岡洋子、絵・松岡達英、北隆館 1979）の中のたった2頁のその文と絵は、多分蜘蛛伝説「浄蓮の滝」を下敷きにしたと思えるものの、限りなく優しく美しいものとなっていました。乙女の姿をしたクモの精ときこりの若者が結ばれて滝の底で永遠のいのちを約束される・・・と私には解釈できる不思議な終わり方をしていたのです。

この絵本からひとつのオペラが誕生しました。現代の自然破壊の問題と、人間の愛の永遠性とをテーマとした壮大かつファンタジックなオペレッタ『夜叉蜘蛛』です。台本作りに5年（渡辺里仁作）、私の作曲に5年かかり、2003年の10月に東京の調布での初演が実現しました。大ぶろしきを広げるようですが、ここにその作品の紹介をさせていただきます。

### 物 語

#### 第一幕 現代のある土地開発会社

けたたましい電話のベルと共に幕が開き、社長の真壁みどり（ソプラノ）が電話口で今進行中の開発事業についてのやりとりをしている。音楽は耳障りな乾いた音質でのピアノと打楽器との競演。そこへ先代から仕えている野心家の秘書高鍋（テノール）が入ってきて、反対住民の代表石部（バリトン）の来訪を告げる。「役所へ行っても何の相手にもしてもらえません。どうか森を壊さないで下さい。」と訴える石部をさえぎり、呼び集めた社員やガードマン（混声合唱）に、

「やれ」と合図を送る真壁。「帰れ、帰れ、お国のためだと分らないのか」と、さんざん打ちのめされ、放り出される石部。「これでいいの？ほんとうに？」と自分に問いかける真壁を横目に、「これでいい、いつか運がめぐって俺さまが社長に・・・」とほくそえむ高鍋。

## 第二幕 縄文時代の山の中

幕が開くまでにフルートと箏による間奏曲が流れ、スライドで20世紀（原爆の映像）から早送り時代を戻し、縄文時代末期となる。石の斧を手に、祭りのための大木を探してさまようイシルベ（石部との二役）を森の小妖怪たち（合唱）が見え隠れにとり囲む。杉の巨木を見つけ斧をふり上げたイシルベは、木の根元に大きなクモがいるのに気づき、そっと抱き上げて岩陰の方へ移してやる。するとクモはイシルベの石の斧に糸を巻きつけ、下の淵へ落してしまう。驚くイシルベの前に、森の小妖怪たちが「夜叉蜘蛛さま」と呼んでうやまう女神（コロラチュラ・ソプラノ）が現われ、石の斧と鋼の斧を手に「どちらがおまえの斧か」と訊ねる。一瞬鋼の斧の方へ目をやったイシルベは、しかし「石の斧は木と言葉を交わすことができる」という内容の Aria を歌い、自分の斧を返してもらう。「里へお帰り」とイシルベに言う夜叉蜘蛛。

## 第三幕 縄文の里

大きな栗の木を切り倒し運んできたタカルベ（高鍋と二役）は、これで巫女メカルナ（真壁と二役）のむこになる資格がある、と里長（バス）にせまり、3人の里娘や里人たち（合唱）もタカルベを誉めそやす。イシルベはメカルナに森での一部始終を打ち明け、もう一度あの杉の木を求めて山へ向う決意を告げる。盗み聴いたタカルベは、鋼の斧への欲からその後を追う。メカルナは占いの中で夜叉蜘蛛と対決し、「愛しいイシルベを奪われてなるものか」と飛び出してゆく。「女が里と山の端境を越えればさまよう鬼となる」といさめる里人の合唱を後にして。

## 第四幕 一・二場 縄文の山の中

小妖怪たちが「落葉ふりつみ、いのちほめぐると大地の美しい歌をうたい、そして「夜叉蜘蛛さまの力が弱まっている」といぶかる。クモの化身でありながら人間イシルベに恋してしまった夜叉蜘蛛は「おいで、戻っておいで」と透明な悲しみの Aria を歌い、やがてやって来たイシルベを横たわせその体に自分の卵を産みつけようとする。そこへタカルベが現われ、わざと自分の斧を岩陰に放り込み大声をあげる。いったん姿を消した夜叉蜘蛛が二つの斧を手に現われると、タカルベは自分の斧はこちらだと言って鋼の斧を手に走り出そうとするが、夜叉蜘蛛の光の矢に射られ倒れる。その時メカルナが現われ、タカルベの落とした鋼の斧を拾い夜叉蜘蛛を裂くが、倒れ際の夜叉蜘蛛に射られやはり倒れる。我に返ったイシルベは瀕死のメカルナを抱き「この場所ですらでも待つ」と永遠の愛を誓う。

## 第四幕 三場 現代の山の中

大杉のある同じ場所。「社長、社長」と呼びかけながら高鍋が登ってくる。この森の開発計画は挫折し会社を潰した真壁を秘書に、今は新しい会社の社長におさまった高鍋は「そうだ、今では

俺さまが社長なのだ」と浮かれアリアを歌う。真壁が「ホラ、出世のお祝いに」と帽子から沢山の子グモを出してふりかけようとする。クモ嫌いの高鍋が悲鳴をあげて逃げ出したあと、「この緑の陰、ずっと昔ここに来たことがある」と澄みきったアリアを歌う真壁。石部が現われ真壁と手を取り合い、杉の木を見上げ、「時、戻り着いた時、巡り帰る時」と歌う全員合唱の彼方から、「ああ、呼び求めたなら聞えるはず」と夜叉蜘蛛の透明な声が響いてフィナーレとなる。

#### 音楽と舞台

演奏時間は約2時間、楽器編成はピアノ、フルート、箏、打楽器という簡素なものでしたが、夜叉蜘蛛の登場には箏の多様な響きが特異な雰囲気を作り、フルートは主に森の幻想性を、ピアノは現代から古代までの幅広い展開を、打楽器は奏者ひとりで13種（木の葉のガラガラやチベットの仏具などを含め）の楽器を駆使しての活躍で時空を超える役割を、それぞれに担って全体ではオーケストラに劣らぬ効果をあげていたと思います（ここでも自画自賛）。

舞台は「岩陰」を下手の高い位置に据え、その辺りと背景中央には必要に応じて幾重にもかさなるクモの網が投影されました。その上を時折クモが行き来することもありましたが、このクモの歩行のCG作りに当っては八幡氏に歩脚の順番などをご教示頂きました。実は姿が立派だということでタランチュラがモデルなのです。

#### おわりに

夜叉蜘蛛の姿は白一色、長い裾をひき、透きとおる高い声で語り歌います。オペレッタ『夜叉蜘蛛』は夜叉蜘蛛が主役というわけではなく、やはり人間のドラマが中心ではあるのですが、私の希望ではこの不思議な白い姿は自然の守り神あるいは自然そのものとして印象づけられる存在であってほしいのです。

なぜ自然を守らなければならないか。それは、人間も自然の一部であり、その自然というのは全てを含み、百年も千年も万年もくり返し大きく廻る生命の輪のことだから・・・という考えを持ち続けながら、私はこの音楽を書きました。でも、大それた物言いとは別に、この作品を観たり聴いたりした方々に「面白かった」とひとことでも言ってもらえたら、それが私にとっては一番うれしいことなのです。（2004年1月16日）

#### 追記

2006年に鹿児島県加治木町の「クモ合戦」の前夜祭的イベントとして、オペレッタ『夜叉蜘蛛』が上演されることとなりました。6月の第2日曜日、加音ホールの予定です。



DRAGLINES

## 八王子城址でスズミグモ幼体の越冬を確認

新海 明

東京都や埼玉県でのスズミグモの生息がつぎつぎと確認されている[新海 2003( K 85 )].  
もはや、東京都での記録はさほど珍しいものではなくなっているが、2004 年冬にスズミグモの幼体の越冬を観察したので報告する。

発見したのは、2004 年 1 月 10 日午後 0 時 45 分頃で東京都八王子市にある八王子城址であった。スズミグモの幼体は山頂へ向かう登山道の四合目付近の梅林の入口にあったツバキの高さ 1.8m ほどの所の葉陰にいた。

はじめヒメグモ状の網に卵のうがかかっていたのに気付いた。よく見ると卵のうの上部に 100 頭ほどの子グモが出のうしていた。網の大きさはタテ 20cm×ヨコ 20cm×高さ 20cm ほどで、網目はどこにもなく不規則に張られたものだった。子グモが歩きまわったせいか網の上部のほうが、細い糸で稠密に張られていた。卵のうは網の中央にかかり、大きさは高さ 3cm×幅 1.5cm ほどだった。

卵のうの形態からスズミグモのものと直観的に判断したのだが、幼体を 4 個体採集してルーペで確認した。色彩は肩付近は白く後部にいくにしたがい薄緑色になっていた。ここにスズミグモ特有の文様があった。

私は八王子城址で 1980 年ころから継続調査をしている。これまでスズミグモについては 1996 年 9 月に八王子城址内を流れる城山川(御殿谷川ともいう)沿いの林道で網のみを 1 度確認しているだけである[新海・金野 1998( K 75 )]。今年の夏、ここで大量のスズミグモの観察ができたら・・・と願っている。

追記：その後、2 月 13 日にも同所で、1 月 10 日とまったく同様に越冬しているスズミグモの幼体を確認している。関東地方でのスズミグモの越冬の状態を示す 1 例記録として貴重なものと考えている。

## &lt; 目録ドラッグラインズ &gt;

## 山梨県一宮浅間神社のクモ

新海 明・谷川 明 男

採集日 2004 年 4 月 24 日

採集場所 山梨県南巨摩郡市川大門町一宮浅間神社境内

DRAGLINES

<i>Ariadna lateralis</i> (Karsch 1881)	ミヤグモ	住居
<i>Mimetus testaceus</i> Yaginuma 1960	オオセンショウグモ	FM
<i>Uroctea compactilis</i> L. Koch 1878	ヒラタグモ	Fy
<i>Achaearanea tepidariorum</i> (C. Koch 1841)	オオヒメグモ	Ffy
<i>Anelosimus crassipes</i> (Bös. & Str. 1906)	アシプトヒメグモ	Mf
<i>Argyrodes bonadea</i> (Karsch 1881)	シロカネイソウロウグモ	y
<i>Takayus chikunii</i> (Yaginuma 1960)	バラギヒメグモ	M
<i>Takayus yunohamensis</i> (Bös. & Str. 1906)	ユノハマヒメグモ	f
<i>Neolinypbia nigripsectoides</i> (Oi 1960)	ムネグロサラグモ	FM
<i>Turinyphia yunohamensis</i> (Bös. & Str. 1906)	ユノハマサラグモ	F
<i>Metleucauge yunohamensis</i> (Bös. & Str. 1906)	メガネドヨウグモ	f
<i>Nephila clavata</i> L. Koch 1878	ジョウロウグモ	e
<i>Tetragnatha yesoensis</i> S. Saito 1934	エゾアシナガグモ	FM
<i>Araneus viridiventrtris</i> Yaginuma 1969	ハラビロミドリオニグモ	y
<i>Araniella yaginumai</i> Tanikawa 1995	ムツボシオニグモ	F
<i>Argiope boesenbergi</i> Levi 1983	チュウガタコガネグモ	f
<i>Cyclosa argenteoalba</i> Bös. & Str. 1906	ギンメッキゴミグモ	y
<i>Cyclosa octotuberculata</i> Karsch 1879	ゴミグモ	fy
<i>Neoscona scylla</i> (Karsch 1879)	ヤマシロオニグモ	y
<i>Diaea subdola</i> O. P.-Cambridge 1885	コハナグモ	fm

## 高知県合宿のその後

貞 元 己 良

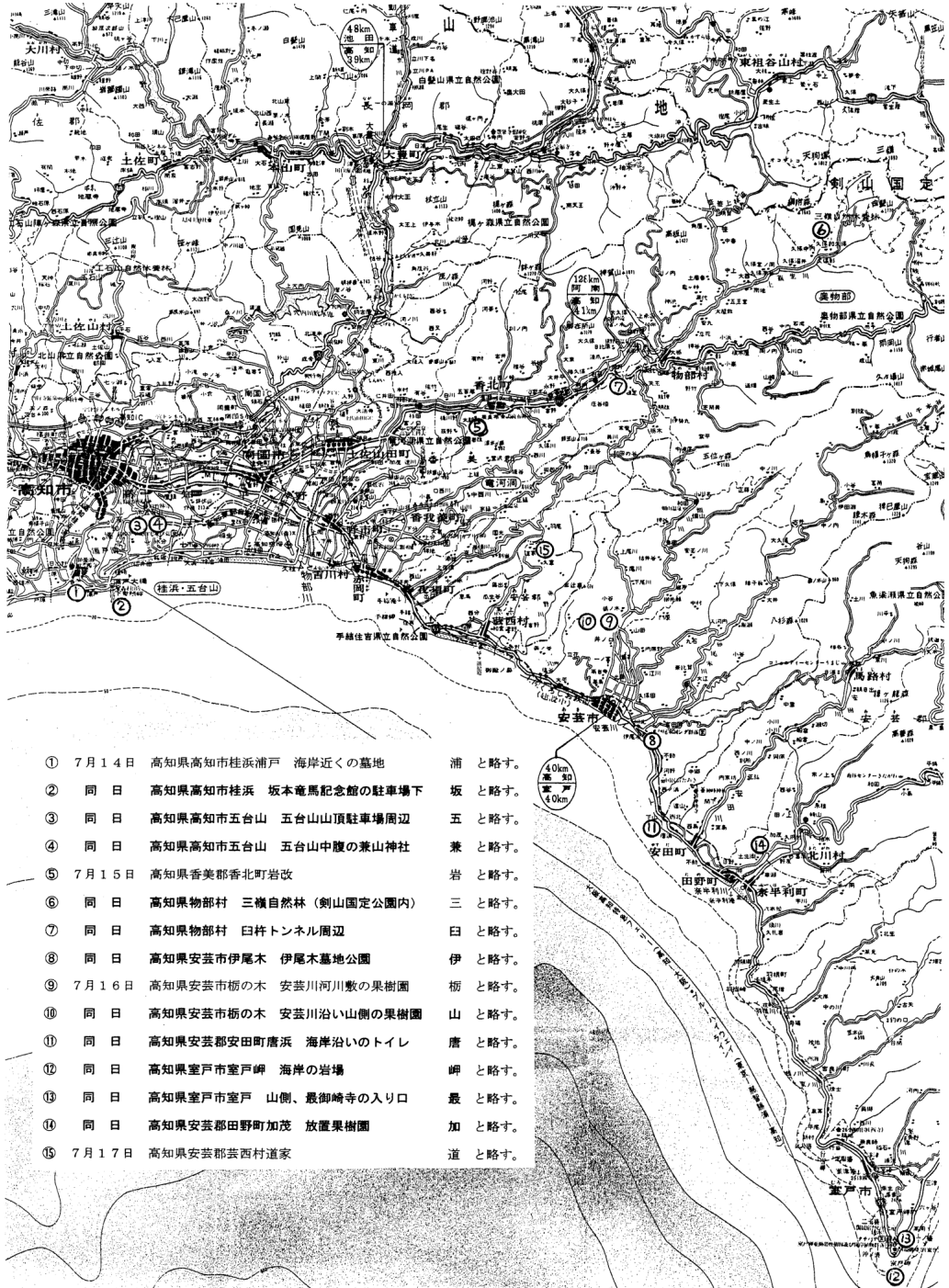
1995年度の東京クモ談話会恒例、夏の合宿は平松毅久氏の世話により「高知県東部のクモ」の調査、観察、研究が行われた。私は2003年の夏、ほぼ同じ場所での観察採集旅行の機会を得たので、前回の合宿報告を踏まえ初記録種も含め報告したいと考えた。

- 1 期間 平成15年7月14日から7月17日までの4日間。
- 2 場所 高知県、高知市内から太平洋側の室戸岬まで
- 3 採集方法 ハンドソーティングおよびピーティングで採集
- 4 日程

7月14日、東京羽田空港から飛行機で高知空港に飛ぶ。空港近くでレンタカーを借り、高知の主である中平清先生のお宅を訪問し、高知県でのクモの採集に対するの理解と了承を得た。その後、桂浜へ向かうが途中海岸近くの墓地に良い空間が見えたため、車を止めしばし採集。地名を探すと「浦戸」とある。チュウガタシロカネグモがたくさん居た。次に桂浜へ移動、坂本竜馬記念館の駐車場下の空き地に車を止め海岸に下りる道で採集。色の薄いオオヒメグモという印象で採集したクモは、吉田 哉氏の同定によりリュウキュウヒメグモと判明。夜は高知市内のビジネスホテルで一泊、夜間観察は近くの五台山へ上る。途中の兼山神社と山頂駐車場に車を止めて採集。兼山神社ではクサグモの網の中に居たヒゲナガヤリグモを採集、山頂ではオオトリノフンダマシを採集した。

7月15日、多分二度と行くことは無いだろうと、地図を見て山奥を目指す。移動の途中、香美郡香北町岩改という地で採集、採集目的であったヒザブトヒメグモを採集。ほかにコガネグモ、オオシロカネグモがたくさん居た。最終的に剣山国立公園内物部村三嶺自然林の沢地と山間部の分岐点地点に車を止めて採集。約50種をハンドソーティングおよびピーティングで採集した。夕方、夜間採集の場所を探し広大な畑、水田地帯の奥の丘陵地にお墓群を発見。下見を行い確信が持てたので、この場所に決め時間の許す限り採集。ユアギグモ、オダカグモ、タニカワヤリグモ、チュウガタシロカネグモ、ムシバミコガネグモ、キヌアミグモ、ゲホウグモ、カマスグモなど東京ではちょっと見られないクモがたくさん採れた。

7月16日、安芸市柘ノ木へ行く。この場所は以前東京クモ談話会の合宿でマメイタイセキグモのオスが日本で初めて新海栄一氏と塩崎哲哉氏により発見された場所で、思い出の地であった。しかし、8年の歳月は長くこの場所には作業場が建ち、入れなかった。それでも、と期待を持って近くの河川敷沿いにある果樹園を徹底的に探しても、オオトリノフンダマシ、アカイロトリノフンダマシ、ゲホウグモの発見が限界だった。ここで諦めないのが私の得意とするところで、更に



- ① 7月14日 高知県高知市桂浜浦戸 海岸近くの墓地 浦と略す。
- ② 同日 高知県高知市桂浜 坂本竜馬記念館の駐車場下 坂と略す。
- ③ 同日 高知県高知市五台山 五台山山顶駐車場周辺 五と略す。
- ④ 同日 高知県高知市五台山 五台山中腹の兼山神社 兼と略す。
- ⑤ 7月15日 高知県香美郡香北町岩改 岩と略す。
- ⑥ 同日 高知県物部村 三嶺自然林(剣山国定公園内) 三と略す。
- ⑦ 同日 高知県物部村 臼杵トンネル周辺 臼と略す。
- ⑧ 同日 高知県安芸市伊尾木 伊尾木墓地公園 伊と略す。
- ⑨ 7月16日 高知県安芸市栃の木 安芸川河川敷の果樹園 栃と略す。
- ⑩ 同日 高知県安芸市栃の木 安芸川沿い山側の果樹園 山と略す。
- ⑪ 同日 高知県安芸郡安田町唐浜 海岸沿いのトイレ 唐と略す。
- ⑫ 同日 高知県室戸市室戸岬 海岸の岩場 岬と略す。
- ⑬ 同日 高知県室戸市室戸 山側、最御崎寺の入り口 最と略す。
- ⑭ 同日 高知県安芸郡田野町加茂 放置果樹園 加と略す。
- ⑮ 7月17日 高知県安芸郡芸西村道家 道と略す。

日程と採集地

山の上に果樹園があるのを探し出し徹底的に歩き回った。その結果キジロオヒキグモ、ムシバミコガネグモ、などが採集できた。しかし、肝心のイセキグ類は発見できなかった。その後、この

地を“後ろ髪を引かれる”想いで後にし、日程の都合上室戸岬へ向かった。途中に立ち寄ったトイレで、たくさんのアシナガグモを発見、一見普通のアシナガグモに見えたが勘が働き、オスメスのつがいを数個体採集、谷川明男氏の同定によりヒカリアシナガグモと判明。室戸岬の海岸では逃げ足の速いイソハエトリのオスを採集、室戸岬山側最御崎寺へ場所を移し、人目を気にしながらスリーピング・ヒゲナガヤリグモ、イボカニグモなどを採集。宿にしていた安芸市内に帰る途中、安芸郡田野町加茂の果樹園に立ち寄る。この果樹園に決めた理由は、農薬散布が無く下草も伸び放題で以前マメイタイセキグモやムツガイセキグモが見つかった環境に近いと感じたからであるが、少し人里近くであった点は珍品発見には向かないとも同時に感じていた。この地ではムシバミコガネグモが非常に多く、次いでキヌアミグモ、ゲホウグモ、ジョロウグモが多く見られた。夜間採集は昨日と同じ墓地へ行ったが、最初にマムシが悠々と這い回る姿を見てしまい、恐怖が先にたつて藪に入らず、墓石周辺の足元が良く見えるところしか移動できず。

7月17日、昨晚の雪辱戦ではないが、今回の採集旅行では一番環境の良かった安芸市内伊尾木墓地へ昼間、三度目のアタック。ヒゲナガヤリグモ、アカイロトリノフンダマシなどを採集は採集したが、目的にしていたイセキグモ類やツケオグモ類の発見には至らなかった。

高知空港へ行く途中、安芸郡芸西村道家に立ち寄る。ここを夜間観察の場にすれば良かったと後悔するほど、いい場所であった。トリノフンダマシ、オオトリノフンダマシ、アカイロトリノフンダマシが見られ、こんな長い突起のゲホウは初めてと図鑑で見るツツゲホウグモを彷彿させるゲホウグモが居たりして、時間があれば一日をここで過ごしてみたいと感じる場所だった。この日昼過ぎ、飛行機に乗り現実の世界へと戻って行った。

## 5 日程と採集地

### 図参照

## 6 リスト

リスト中の記号は次のとおり

(地名略記、浦=高知市桂浜浦戸、坂=高知市桂浜 坂本竜馬記念館下、五=高知市五台山の山頂駐車場、兼=高知市五台山の中腹 兼山神社、岩=香美郡香北町岩改、三=物部村三峰自然林、白=物部村白杵トンネル周辺、伊=安芸市伊尾木 墓地、栃=安芸市栃の木 安芸川河川敷果樹園、山=安芸市栃の木 安芸川沿い山側の果樹園、唐=安芸郡安田町唐浜、岬=室戸市室戸 室戸岬、最=室戸市室戸 最御崎寺、加=安芸郡田野町加茂、道=安芸郡芸西村道家)

F: 成体, M: 成体, f: 亜成体, m: 亜成体, y: 性別不明幼体

### Mimetidae センショウグモ科

*Ero japonica* センショウグモ 五 F 兼 M 伊 FM

### Uloboridae ウズグモ科

*Miagrammopes orientalis* マネキグモ 五 y 栃 y 山 F 道 F

*Octonoba sybotides* カタハリウズグモ 三 F 浦 m 兼 M 伊 F

*O ctonoba varians* ウズグモ 三 F 坂 F 山 F

### Theridiidae ヒメグモ科

<i>Achaearanea angulithorax</i>	ツリガネヒメグモ	三 F 坂 F
<i>Achaearanea culicivola</i>	カグヤヒメグモ	三 F 兼 F 坂 F
<i>Achaearanea ferrumequina</i>	ヒザブトヒメグモ	岩 F
<i>Achaearanea japonica</i>	ニホンヒメグモ	兼 y 浦 y 栃 y 道 f
<i>Achaearanea kompirensis</i>	コンピラヒメグモ	三 F
<i>Achaearanea ryukyu</i>	リュウキュウヒメグモ	兼 F 坂 F
<i>Achaearanea tepidariorum</i>	オオヒメグモ	三 FM 坂 M 臼 F 伊 y 最 y
<i>Anelosimus crassipes</i>	アシブトヒメグモ	浦 F 伊 FM 岬 F y
<i>Argyrodes bonadea</i>	シロカネイソウロウグモ	伊 fMm y 栃 F 山 F 加 F
<i>Argyrodes cylindratus</i>	トビジロイソウロウグモ	臼 F
<i>Ariamnes cylindrogaster</i>	オナガグモ	三 F 五 y 岩 y
<i>Argyrodes kumadai</i>	チリイソウロウグモ	坂 M 兼 M 伊 FM 加 F
<i>Argyrodes fur</i>	フタオイソウロウグモ	坂 F 臼 F
<i>Rhomphaea sagana</i>	ヤリグモ	伊 y 加 F 最 y
<i>Rhomphaea tanikawai</i>	タニカワヤリグモ	伊 FM
<i>Rhomphaea labiata</i>	ヒゲナガヤリグモ	兼 M 最 M 伊 F
<i>Chrysso argyrodiformis</i>	オダカグモ	伊 F
<i>Chrysso albipes</i>	ギボシヒメグモ	栃 y
<i>Yaginumena castrata</i>	ボカシミジングモ	三 Fm 五 F 岬 y
<i>Trigonobothrys flavomarginata</i>	キベリミジングモ	兼 f 最 m
<i>Trigonobothrys mustelina</i>	カニミジングモ	兼 m 岩 M y 伊 fM 最 FM
<i>Yaginumena mutilata</i>	コアカクロミジングモ	最 y
<i>Dipoena punctisparsa</i>	シモフリミジングモ	五 F 兼 Fm 伊 FM
<i>Episinus affinis</i>	ヒシガタグモ	山 y
<i>Moneta caudifer</i>	ハラナガヒシガタグモ	五 M
<i>Theridion pinastri</i>	ムナグロヒメグモ	三 M
<i>Keijia sterninotata</i>	ムナボシヒメグモ	五 F 兼 M 伊 F 加 F 最 F
<i>Takayus takayensis</i>	タカユヒメグモ	三 F 臼 F
<i>Takayus yunohamensis</i>	ユノハマヒメグモ	三 F

Theridiosomatidae カラカラグモ科

<i>Theridiosoma epeiroides</i>	カラカラグモ	三 F
--------------------------------	--------	-----

Symphytognathidae ヌアギグモ科

<i>Patu</i> sp.	ユアギグモ	伊 F 山 M
-----------------	-------	---------

Mysmenidae コツブグモ科

<i>Mysmenella jobi</i>	ナンブコツブグモ	山 y
------------------------	----------	-----

Linyphiidae サラグモ科

<i>Labulla contortipes</i>	アシヨレグモ	三 y
----------------------------	--------	-----

<i>Neolinyphia nigripectoides</i>	ムネグロサラグモ	三 F 山 F
<i>Prolinyphia longipedella</i>	アシナガサラグモ	三 f
<i>Strandella fluctimaculata</i>	サザナミサラグモ	岩 F
<i>Strandella yaqinumai</i>	ヒメヨツボシサラグモ	三 F
<i>Oedothorax bipunctis</i>	ヌカグモ	三 F

Tetragnathidae アシナガグモ科

<i>Leucauge blanda</i>	チュウガタシロカネグモ	浦 FM 伊 FM 栃 f 山 M 道 F
<i>Leucauge magnifica</i>	オオシロカネグモ	三 F 坂 F 兼 F 岩 FM
<i>Leucauge subblanda</i>	コシロカネグモ	三 M 兼 F 岩 F 白 F 栃 F
<i>Leucauge subgemmea</i>	キララシロカネグモ	道 F
<i>Meta reticuloides</i>	ヤマジドヨウグモ	三 y
<i>Metleucauge chikunii</i>	チクニドヨウグモ	三 F
<i>Nephila clavata</i>	ジョロウグモ	兼 y 栃 y 加 y
<i>Tetragnatha lauta</i>	キヌアシナガグモ	栃 M
<i>Tetragnatha nitens</i>	ヒカリアシナガグモ	唐 FM
<i>Tetragnatha praedonia</i>	アシナガグモ	兼 F 岩 M y 伊 Mm 山 y 加 F
<i>Tetragnatha squamata</i>	ウロコアシナガグモ	三 F 岩 F 伊 m 栃 F 山 M 加 FM

Araneidae コガネグモ科

<i>Acusilas coccineus</i>	ハツリグモ	山 F
<i>Arachnura logio</i>	キジロオヒキグモ	山 f
<i>Araneus ejusmodi</i>	ヌサオニグモ	伊 F 栃 y
<i>Araneus ishisawai</i>	イシサワオニグモ	三 f
<i>Araneus pentagrammicus</i>	アオオニグモ	兼 FM 山 Fm 伊 M
<i>Araneus uyemurai</i>	ヤマオニグモ	三 F
<i>Araneus ventricosus</i>	オニグモ	岬 y
<i>Araneus viridiventris</i>	ハラビロミドリオニグモ	栃 Fm
<i>Argiope aetheroides</i>	ムシバミコガネグモ	伊 F 山 F 加 F
<i>Argiope amoena</i>	コガネグモ	五 M 岩 F 栃 FM 加 M
<i>Argiope minuta</i>	コガタコガネグモ	浦 f 兼 y 伊 y
<i>Chorizopes nipponicus</i>	ヤマトカナエグモ	三 F 岩 F
<i>Cyclosa argenteoalba</i>	ギンメッキゴミグモ	岩 Fm 栃 F 山 FMm 最 y
<i>Cyclosa ginnaga</i>	ギンナガゴミグモ	岩 F 山 F
<i>Cyclosa laticauda</i>	キジロゴミグモ	三 F
<i>Cyclosa octotuberculata</i>	ゴミグモ	岩 F 白 F 伊 F
<i>Cyclosa omonaga</i>	シマゴミグモ	

	兼 f 岩 y 白 F 伊 f 栃 fm 山 f 岬 f 最 F 道 F
<i>Cyclosa sedeculata</i>	ヨツデゴミグモ 三 F
<i>Cyrtarachne bufo</i>	トリノフンダマシ 山 f 道 F
<i>Cyrtarachne inaequalis</i>	オオトリノフンダマシ 五 f 栃 F 道 F
<i>Cyrtarachne yunoharuensis</i>	アカイロトリノフンダマシ 栃 f 山 M 伊 F 道 F
<i>Cyrtophora exanthematica</i>	キヌアミグモ 伊 F 加 F
<i>Cyrtophora moluccensis</i>	スズミグモ 浦 y
<i>Eriovixia pseudocentrodes</i>	トガリオニグモ 岩 fm 栃 FMfm 山 F y 道 F
<i>Hypsosinga sanguinea</i>	シロスジショウジョウグモ 三 F
<i>Neoscona mellotteei</i>	ワキグロサツマノミダマシ 浦 f 坂 y 五 F y 兼 y 栃 f 山 y
<i>Neoscona nautica</i>	イエオニグモ 唐 FM
<i>Neoscona punctigera</i>	コゲチャオニグモ 兼 y
<i>Neoscona scylla</i>	ヤマシロオニグモ 三 F 五 M 兼 FM 白 F 山 F 岬 F 最 M
<i>Neoscona scylloides</i>	サツマノミダマシ 浦 FM 坂 M 五 m 兼 M 岩 F 伊 m 最 M
<i>Neoscona subpullata</i>	ヘリジロオニグモ 三 n 兼 y 岩 y 伊 y 栃 m 山 y 唐 M 岬 Fm 最 F 道 f
<i>Poltys illepidus</i>	ゲホウグモ 伊 Ff 栃 f 加 f 道 F
<i>Eriophora sachalinensis</i>	カラフトオニグモ 三 F 兼 y 栃 y 最 y
	Pisauridae キシダグモ科
<i>Dolomedes raptor</i>	アオグロハシリグモ 三 y 岩 y
<i>Dolomedes saganus</i>	スジアカハシリグモ 三 y
<i>Dolomedes sulfureus</i>	イオウイロハシリグモ 道 y
	Oxyopidae ササグモ科
<i>Oxyopes macilentus</i>	シマササグモ 山 M 加 F 道 F
<i>Oxyopes sertatus</i>	ササグモ 岩 F 伊 F 道 F
	Agelenidae タナグモ科
<i>Agelena limbata</i>	クサグモ 三 f
	Cybaeidae ナミハグモ科
<i>Cybaeus nipponicus</i>	カチドキナミハグモ 白 fm
	Amaurobiidae ガケジグモ科
<i>Coelotes corasides</i>	ヤマヤチグモ 三 f
	Liocranidae ウエムラグモ科
<i>Phrurolithus nipponicus</i>	ウラシマグモ 三 F
	Clubionidae フクログモ科



<i>Clubiona vigil</i>	ムナアカフクログモ	伊 M
<i>Cheiracanthium eutittha</i>	アシナガコマチグモ	五 M 伊 f
<i>Cheiracanthium japonicum</i>	カバキコマチグモ	三 F
<i>Cheiracanthium unicum</i>	ヤサコマチグモ	兼 M
<i>Clubiona jucunda</i>	ヤハズフクログモ	五 M
	Zodariidae ホウシグモ科	
<i>Asceua japonica</i>	ドウシグモ	坂 FM
	Sparassidae アシダカグモ科	
<i>Sinopoda forcipata</i>	コアシダカグモ	坂 F
<i>Thectocoris severa</i>	カマスグモ	伊 F
	Philodromidae エビグモ科	
<i>Philodromus flavidus</i>	キエビグモ	三 F
<i>Philodromus subaureolus</i>	アサヒエビグモ	兼 F
	Thomisidae カニグモ科	
<i>Boliscus tuberculatus</i>	イボカニグモ	最 y
<i>Diaea subdola</i>	コハナグモ	三 FM 兼 F
<i>Lysiteles coronatus</i>	アマギエビスグモ	三 F
<i>Misumenops tricuspidatus</i>	ハナグモ	伊 F
<i>Oxytate striatipes</i>	ワカバグモ	三 F 岩 y
<i>Thomisus labefactus</i>	アズチグモ	山 fM 最 y 道 f
<i>Tmarus piger</i>	トラフカニグモ	三 F
<i>Tmarus rimosus</i>	セマルトラフカニグモ	兼 F 最 y
<i>Xysticus ephippiatus</i>	シナカニグモ	三 F
	Salticidae ハエトリグモ科	
<i>Carrhotus xanthogramma</i>	ネコハエトリ	栃 y 山 F y
<i>Evarcha crassipes</i>	アシブトハエトリ	栃 M
<i>Evarcha fasciata</i>	マミクロハエトリ	岩 F
<i>Helicium yaginumai</i>	ジャバラハエトリ	三 y
<i>Phintella bifurcilinea</i>	キアシハエトリ	栃 F
<i>Plexippoides doenitzi</i>	デーニッツハエトリ	三 y 岩 y 最 y
<i>Plexippus setipes</i>	ミスジハエトリ	浦 F
<i>Hakka himeshimensis</i>	イソハエトリ	岬 M
<i>Rhene atrata</i>	カラスハエトリ	三 y 浦 M
<i>Yaginumaella striatipes</i>	ウススジハエトリ	三 F
<i>Yaginumanis sexdentatus</i>	ムツバハエトリ	三 F

以上, 21 科 124 種を確認した。リュウキュウヒメグモ, カグヤヒメグモの同定は吉田哉氏に, ヒカリアシナガグモの同定は谷川明男氏に, ヤサコマチグモ, ヤハズフクログモ, ワカバグモの

同定は小野展嗣氏にそれぞれ同定して頂いた。この場を借りてお礼申し上る。

さて、高知県におけるクモのリストは 1994 年に中平清先生が「私と生き物たち」と題する著書の中で「高知県産クモ目録」として、265 種を発表している。その後、前項の 1995 年度東京クモ談話会が合宿を実施し、149 種を記録し 19 種の初記録種を KISHIDAIA No.78, 46-56 頁で発表している。また同号の 44-45 頁に池田博明氏が、東京クモ談話会が合宿を行う 2 年前に高知県でクモを採集し、リストで発表していた。

今回採集できたクモのリストから、高知県初記録は全部で 7 科 18 種であった。初記録の判断は中平 (1994)・池田 (2000)・平松 (2000) のクモ目録を参考にした。以下に初記録種を列挙する。

- No.1 リュウキュウヒメグモ 高知市内、五台山山頂、桂浜の坂本竜馬記念館下で の成体を採集。
- No.2 タカコヒメグモ 剣山国定公園内三峰自然林と物部村臼杵トンネル脇で の成体を採集。
- No.3 ムナグロヒメグモ 剣山国定公園内三峰自然林で の成体を採集。
- No.4 ヒシガタグモ 安芸市柵の木で幼体を採集。
- No.5 ヒゲナガヤリグモ 伊尾木墓地で 成体、五台山、室戸市内最御崎寺で の成体を採集。
- No.6 タニカワヤリグモ 伊尾木墓地で の成体を採集。
- No.7 ヒメヨツボシサラグモ 剣山国定公園内三峰自然林で の成体を採集。
- No.8 サザナミサラグモ 香美郡香北町岩改で の成体を採集。
- No.9 ヌカグモ 剣山国定公園内三峰自然林で の成体を採集。
- No.10 チクニドヨウグモ 剣山国定公園内三峰自然林で の成体を採集。
- No.11 キヌアシナガグモ 安芸市柵の木の河川敷果樹園内で の成体を採集。
- No.12 ヒカリアシナガグモ 安芸郡安田町唐浜、海岸沿いのトイレで の成体を採集。
- No.13 シロスジショウジョウグモ 剣山国定公園内三峰自然林で の成体を採集。
- No.14 ドウシグモ 桂浜の坂本竜馬記念館下の桜の樹で の成体を採集。
- No.15 セマルトラフカニグモ 五台山で の成体を採集。
- No.16 アマガエビスグモ 剣山国定公園内三峰自然林で の成体を採集。
- No.17 ジャバラハエトリ 剣山国定公園内三峰自然林で幼体を採集。
- No.18 ウスズジハエトリ 剣山国定公園内三峰自然林で の成体を採集。

このなかで、東京クモ談話会の合宿報告 (KISHIDAIA No.78 の 56 頁) でカグヤヒメグモの近似種について指摘されているが、標本の同定によりリュウキュウヒメグモの可能性が強いと思われる。また、セマルトラフカニグモについては同報告で sp. 扱いであるが、今回の私の採集記録でセマルトラフカニグモと確認できた。

科、種名の配列は谷川 (2000) に従った。

#### 7. 今回の採集旅行で学んだこと。(感想)

私は、高知県へは今回で 2 回目であるが、いずれも東部方面のごく限られた地域しか行ってい

ないので正確なことは言えないのだが、地形地図を見る限り平地が少なく海岸からすぐに山が迫っているという感じがした。関東地方では、平地が広いため海岸性のクモと平地のクモ、山のクモは割りと規則正しい住み分けが見られるが、高知県の採集ではクモの住み分けがハッキリしているとは言えず、例えばヘリジロオニグモなどは海岸性のクモであり感覚的に海岸にしか居ないと思っていたが、徳島県との県境付近の山奥でも採集できた。その代わり本来居てもいいはずのオオクママイロオニグモは発見できなかった。ヤマシロオニグモも海岸から山間部まで広い範囲で採集できた。オニグモは僅かな平地や人家の周りでは発見できず、海岸の樹林帯で多く観察した。また、それぞれのクモの発生の時期も関東地方に生息する同じクモとは少しズレが見られ、例えばアオオニグモは春に成体と思っていたものの高知では夏が成体だった。ゴミグモ・ギンメッキゴミグモ・ヨツデゴミグモ等も春から夏にかけて成体が多く見られると思っていたが高知では、サイズを見る限り夏から秋に成体が多く見られると感じた。その他に、スズミグモがたくさん見られると期待して行ったものの、最初の日海岸の墓地内で数頭見ただけだった。また、コガネグモよりもムシバミコガネグモがたくさん居たのには驚いた。

最後になりましたが、この採集記録文をまとめるに当たり適正な御助言と的確な御指導を頂きました池田博明氏に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

#### 参考文献

- Oi, R. 1964. A supplementary note on Linyphiid spiders of Japan. J. Biol. Osaka Cty Univ. 15: 23-30.
- 八木沼健夫 1986. 原色日本クモ類図鑑. 305 p. 保育社, 大阪.
- Ono, H. 1988. A Revisional Study of the Spider Family Thomisidae (Arachnida, Araneae). 252p. National Science Museum, Tokyo.
- 千国安之輔 1989. 写真・日本クモ類大図鑑. 308p. 偕成社, 東京.
- 平松毅久 2000. 高知県東部のクモ. Kishidaia, 78: 46-56.
- 池田博明 2000. 1993年9月の高知のクモ. Kishidaia, 78: 44-45.
- 谷川明男 2000. 日本産クモ類目録. Kishidaia, 78: 79-142.
- 南宮 俊 2001. The Spiders of Korea. 数学社, Seoul.
- 吉田 哉 2003. 日本産ヒメグモ科総説. 224 p. 日本蜘蛛学会, 大阪.

## 東京蜘蛛談話会 2003 年度合宿報告 北海道上士幌町糠平周辺のクモ

八 幡 明 彦・新 海 明・甲 野 涼

2003 年度の東京蜘蛛談話会の合宿は、例年と異なり日本蜘蛛学会大会に合わせて 8 月 20 日（水）から 22 日（金）の 2 泊 3 日で北海道上士幌町糠平で 27 名の参加者を迎えて行なわれた。

北海道のクモについては、東京蜘蛛談話会の会員でもある松田まゆみ氏によってすでにまとめられたリストがあり、合計 486 種類が報告されている（松田 1997, 2000）。今回はその松田さんが住んでおられる、河東郡上士幌町糠平を中心とした地域で観察採集をおこなった。おもな採集地点を図 1 に示す。

なお、合宿の宿舎の手配や採集地の紹介さらに標本の同定では松田まゆみさんに、リストの作成では谷川明男さんにお世話になった。ここに御礼申し上げる。

### 日 程

8 月 20 日（水）曇り。18:00 糠平館観光ホテルに集合。夕食後、ホテルから然別湖へ通じる道路沿いで夜間観察を実施。キバナオニグモ、タイリクサラグモ、イナズマクサグモなどが観察できた。クマの生息密度が高い場所と聞いていたので、いつもより注意しながらの観察会だった。

8 月 21 日（木）晴れ。午前中は然別湖北岸のキャンプ場で観察会。キバナオニグモ、アカオニグモ、ニワオニグモなどのほかにヤマキレアミグモが腐るほど観察できた。キャンプ場で昼食と記念撮影をすませ、午後の調査地は然別湖のさらに先にある駒止湖を過ぎた東ヌブカウシヌブリへの登山口周辺で行なわれた。ここを少し登ったところにはマツダタカネオニグモが生息していた。夜間採集は宿舎ホテルのそばの神社周辺で実施。ヒメハナグモ、ムレサラグモ、エゾガケジグモなどを観察採集した。

8 月 22 日（金）晴れ。午前中は幌加除雪センター（旧幌加駅跡）周辺で実施。北海道ならではのキバナオニグモ、アカオニグモなどに加えてマユミオニグモも発見。昼食後、午後 1 時ころに糠平館観光ホテルにて解散。その後、学会大会の準備作業に加わる。

### 参加者

池田博明、井原庸、小澤實樹、河井安子、加藤輝代子、加藤倫之、工藤泰恵、木村知之、塩崎哲哉、新海明、新海栄一、須藤昌子、谷川明男、徳本洋、永井垂紀、中島晴子、新村誠、萩本房枝、萩本果南、初芝伸吾、初芝涼、初芝琢磨、初芝秋沙、伴満、藤沢庸助、安田明雄、八幡明彦



参加者一同（然別湖畔にて）

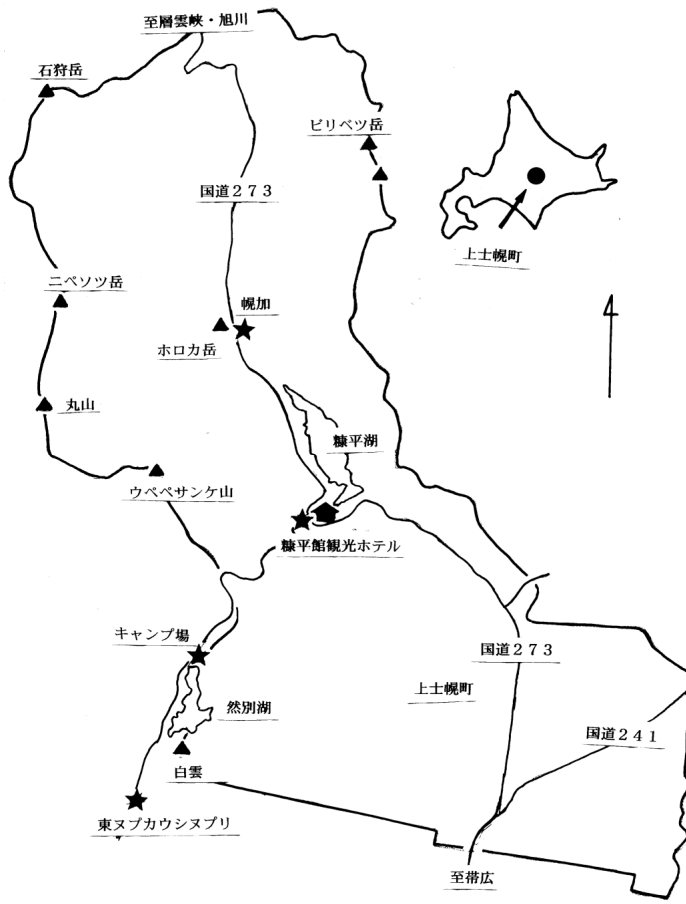


図1．北海道士幌町糠平での合宿の主な採集地．印で示した場所．

目 録

同定には慎重さが必要と考え、現場で書きとめたもののうち、合宿終了後標本が手元にあるものについては検鏡により再確認し、リスト全体を北海道の松田まゆみさんにも見てもらって、最終的にリストをまとめた。現場でいったん記録したが、疑問と思われるものは、リストから除き、最後に参考としてまとめた。

観察採集地の略号は次のとおり。

糠0：8月20日糠平温泉スキー場の車道沿い（標高600m前後）．夜間

糠1：8月21日糠平の小学校前から糠平川沿いの林道へ（標高550m付近）．夜間

糠他：東大雪博物館（540m）周辺からの報告（学会夜間観察含む）

然別：8月21日然別湖（標高804m）北岸野営地

白樺：8月21日白樺峠（東ヌプカウシヌプリ登山口・標高910m），ただしマツダタカネオニグモ観察のガレ場は1000m前後と推測される。

幌加：8月22日幌加除雪ステーション（標高660m）から林道

		糠0	糠1	糠他	然別	白樺	幌加
カネコトタテグモ科 Antrodiaetidae							
<i>Antrodiaetus yesoensis</i>	エゾトタテグモ	-	-	-	住居	M	-
ユウレイグモ科 Pholcidae							
<i>Pholcus opilionoides</i>	タイリクユウレイグモ	-	-	-	-	-	F
ウズグモ科 Uloboridae							
<i>Octonoba yesoensis</i>	エゾウズグモ	y	F	-	F	-	
ヒメグモ科 Theridiidae							
<i>Achaearanea riparia</i>	イワマヒメグモ	F 死骸	-	-	-	-	-
<i>Achaearanea tabulata</i>	オオツリガネヒメグモ	F+e	F	-	F	-	-
<i>Achaearanea tepidariorum</i>	オオヒメグモ	-	-	-	Fe	-	-
<i>Dipoena punctisparsa</i>	シモフリミジグモ	-	-	-	-	-	F
<i>Enoplognatha margarita</i>	シロタマヒメグモ	-	-	-	Fe	F	FeM
<i>Neottiura bimaculata</i>	フタスジヒメグモ	-	-	-	-	F+e	-
<i>Rhomphaea sagana</i>	ヤリグモ	m	F	-	-	-	-
<i>Rugathodes nigrolimbata</i>	タカネヒメグモ	-	-	-	Fey	F	-
<i>Takayus lyricus</i>	シモフリヒメグモ	-	-	-	-	-	Fy
<i>Takayus subadultus</i>	コケヒメグモ	-	-	-	Fe	-	-
<i>Takayus takayensis</i>	タカコヒメグモ	Fe	-	-	-	-	-
<i>Takayus yunohamensis</i>	ユノハマヒメグモ	F	Fy	-	Fe	-	-
<i>Theridion pinastri</i>	ムネグロヒメグモ	-	Fy	-	-	-	-
<i>Trigonobothrys mustelina</i>	カニミジグモ	Fy	M	-	-	-	-
<i>Yaginumena castrata</i>	ボカシミジグモ	Fy	F	-	-	-	-

		糠0	糠1	糠他	然別	白樺	幌加
<i>Enoplognatha tecta</i>	ヤマトコノハグモ	-	-	-	-	-	Fe
Nesticidae ホラヒメグモ科							
<i>Nesticus yesoensis</i>	エゾホラヒメグモ	-	-	-	FM	F	-
Linyphiidae サラグモ科							
<i>Bathylinyphia major</i>	ヤマトテナガグモ	-	Fy	-	FM	-	-
<i>Drapetisca socialis</i>	ムレサラグモ	-	FM	-	-	y	FM
<i>Agyneta nigra</i>	クロケシグモ	-	-	-	F	-	-
<i>Floronia exornata</i>	ハナサラグモ	Fy	-	-	m	y	y
<i>Herbiphantes cericeus</i>	キヌキリグモ	FM	FM	-	FM	F	-
<i>Neolinyphia angulifera</i>	ハンモックサラグモ	y	y	-	F	-	-
<i>Neriere jinjaenses</i>	アミメサラグモ	-	-	-	-	-	F
<i>Prolinyphia emphana</i>	タイリクサラグモ	FM	F	-	F	F	F
<i>Prolinyphia limbatinella</i>	フタスジサラグモ	-	-	m	-	-	F
<i>Prolinyphia marginella</i>	コシロブチサラグモ	y	-	-	F	-	-
<i>Strandella fluctimaculata</i>	サザナミサラグモ	F	-	-	FM	-	-
<i>Strandella quadrimacurata</i>	ヨツボシサラグモ	Fy	y	-	-	-	-
<i>Ummeliata saitoi</i>	サイトウアカムネグモ	-	-	-	M	-	-
<i>Ummeliata insecticeps</i>	セスジアカムネグモ	-	-	-	M	-	-
<i>Lepthyphantes nigriventris</i>	ハラクロヤセサラグモ	F	-	-	M	-	-
<i>Erigone atra</i>	クロヒザグモ	-	-	-	M	-	-
<i>Labulla insularis</i>	和名なし	F	-	-	F	-	-
Tetragnathidae アシナガグモ科							
<i>Tetragnatha extensa</i>	ハラピロアシナガグモ	-	-	-	F	-	-
<i>Tetragnatha pinicola</i>	ミドリアシナガグモ	y	-	-	-	-	-
<i>Tetragnatha yesoensis</i>	エゾアシナガグモ	y	y	-	Fey	-	y
Araneidae コガネグモ科							
<i>Aculepeira matsudae</i>	マツダタカネオニグモ	-	-	-	-	y	-
<i>Araneus abscissus</i>	キザハシオニグモ	-	-	-	-	-	F
<i>Araneus borealis</i>	キタマメオニグモ	Fm	-	-	-	-	-
<i>Araneus cornutus</i>	ナカムラオニグモ	F	Fy	-	FMmy	-	-
<i>Araneus diadematus</i>	ニワオニグモ	y	-	-	FM	FM	-
<i>Araneus fuscocoloratus</i>	ヤミイロオニグモ	-	-	-	-	-	F
<i>Araneus ishizawai</i>	イシサワオニグモ	fM	-	-	-	-	-
<i>Araneus marmoreus</i>	キバナオニグモ	FM	F	-	F	FM	FM
<i>Araneus mayumiae</i>	マユミオニグモ	M	-	F	-	-	FM
<i>Araneus pinguis</i>	アカオニグモ	-	-	-	-	FMy	FMy

		糠0	糠1	糠他	然別	白樺	幌加
<i>Araneus rotundicornis</i>	マルコブオニグモ	-	Fe	-	F	-	F
<i>Araneus ventricosus</i>	オニグモ	Fy	FMy	-	-	-	-
<i>Araniella yaginumai</i>	ムツボシオニグモ	y	-	-	Ff	-	m
<i>Cyclosa kumadai</i>	クマダギンナガゴミグモ						
		-	F	F	-	-	-
<i>Eriophora aurea</i>	キンカタハリオニグモ	-	-	-	F	-	-
<i>Eriophora sachalinensis</i>	カラフトオニグモ	-	Fy	-	-	F	Fy
<i>Hypsosinga sanguinea</i>	シロスジショウジョウグモ						
		m	-	-	-	Fy	-
<i>Meta japonica</i>	サンロウドヨウグモ	y	-	-	-	-	-
<i>Metleucauge yaginumai</i>	キタドヨウグモ	-	Fy	-	-	-	-
<i>Neoscona adianta</i>	ドヨウオニグモ	F	-	-	-	-	y
<i>Zygiella dispar</i>	ヤマキレアミグモ	-	-	-	FM	-	-
<i>Alopecosa pulverulenta</i>	チリコモリグモ	-	-	-	-	-	y
	Lycosidae コモリグモ科						
<i>Pardosa lugubris</i>	エゾコモリグモ	-	-	-	Fe	-	-
<i>Pardosa paramushirensis</i>	タカネコモリグモ	-	-	-	-	Fe	-
<i>Xerolycosa nemoralis</i>	モリコモリグモ	-	-	-	-	-	F
	Pisauridae キシダグモ科						
<i>Dolomedes raptor</i>	アオグロハシリグモ	-	-	Fy	-	-	-
	Agelenidae タナグモ科						
<i>Agelena labyrinthica</i>	イナズマクサグモ	Fe	-	-	-	-	Fe
	Cybaeidae ナミハグモ科						
<i>Cybaeus aokii</i>	エゾナミハグモ	-	-	-	FM	-	FM
<i>Cybaeus petegarinus</i>	ベテガリナミハグモ (註1)						
		-	F	-	FM	FM	FM
	Amaurobiidae ガケジグモ科						
<i>Callobius hokkaido</i>	エゾガケジグモ	-	M	-	FMe	F	-
<i>Cybaeopsis typicus</i>	ナミハガケジグモ	-	-	F	M	-	-
	Anyphaenidae イツツグモ科						
<i>Anyphaena pugil</i>	イツツグモ	-	-	-	-	-	my
	Liocranidae ウエムラグモ科						
<i>Phrurolithus claripes</i>	イナズマウラシマグモ	-	-	F	-	-	-
	Clubionidae フクログモ科						
<i>Clubiona yagata</i>	ヤガタフクログモ	F	-	-	Femy	-	y
<i>Clubiona mayumiae</i>	マユミフクログモ	FM	-	-	-	-	M



		糠0	糠1	糠他	然別	白樺	幌加
<i>Clubiona</i> sp.	フクログモ属の一種(註2)	F	-	-	-	-	-
	Gnaphosidae ワシグモ科						
<i>Kishidaia albimaculata</i>	ヨツボシワシグモ	-	-	-	-	y	y
	Zoridae ミヤマシボグモ科						
<i>Zora spinimana</i>	シボグモモドキ	-	-	-	-	y	-
	Philodromidae エビグモ科						
<i>Philodromus aureolus</i>	コガネエビグモ	-	-	-	-	-	F
<i>Philodromus margaritatus</i>	ブチエビグモ	-	-	-	-	-	y
<i>Tibellus oblongus</i>	スジシャコグモ	-	-	-	y	My	y
	Thomisidae カニグモ科						
<i>Diaea subdola</i>	コハナグモ	y	-	-	-	-	y
<i>Lysiteles coronatus</i>	アマギエビスグモ	y	y	F	-	y	y
<i>Lysiteles maius</i>	タカネエビスグモ	y	F	-	F	FM	y
<i>Misumena vatia</i>	ヒメハナグモ	-	y	-	-	-	y
<i>Misumenops tricuspidatus</i>	ハナグモ	-	-	-	-	-	My
<i>Oxytate striatipes</i>	ワカバグモ	y	y	-	-	-	y
<i>Synema chikunii</i>	チクニエビスグモ	F	-	-	-	-	-
<i>Xysticus kurilensis</i>	チシマカニグモ	-	-	F	-	-	-
	Salticidae ハエトリグモ科						
<i>Evarcha proszynskii</i>	ホオジロハエトリ	-	-	-	-	Fm	-
<i>Heliophanus ussuricus</i>	ウスリーハエトリ	-	-	-	-	-	y
<i>Phintella arenicolor</i>	マガネアサヒハエトリ	-	-	-	-	-	F
<i>Sitticus penicillatus</i>	シラホシコゲチャハエトリ	-	-	M	-	-	-
<i>Yaginumaella striatipes</i>	ウススジハエトリ	y	M	-	FMm	fM	-

以上 21 科 94 種 (うち 2 種は未確定種)

集計担当 八幡明彦．同定に協力いただいた谷川明男・松田まゆみさんに感謝します．ハナサラグモm, フタスジサラグモm, イツツグモmは, 採集後や綿が成体になるまで飼育したものの標本で同定．

註1 : F は未記載 註2 : 標本は初芝氏が所有

疑問種としての追加メモ

現場で報告された種名	糠0	糠1	糠他	然別	白樺	幌加	備考
カラフトコモリグモか							
アライトコモリグモ?	-	-	-	-	-	F	標本なし

ヤマジサラグモか？	-	F	-	-	Fy	-	北海道で確認されていない M での要確認
ダイセツコモリグモか？	-	-	-	-	-	F	標本なし 森林限界以上の種で、 幌加にはいないと思われる
デーニッツハエトリか？	-	-	-	-	-	y	標本なし．疑問視される古い 記録しかない
カタハリウズグモか？	-	-	-	-	-	y	北海道で見られていない 成体で要確認（松田）
ユウレイグモ？	-	-	-	-	-	y	標本所有者不明のためリスト から除外
キタセンショウグモ？	F	-	-	-	-	-	標本所有者不明
ツリガネヒメグモ？	-	m	-	-	-	-	亜成体のまま死亡，同定不可
オクチサラグモ？	F	-	-	-	-	-	標本所有者不明
ケシグモの一種	-	-	-	m	-	-	同定不可
ウツキコモリグモ？	-	-	-	y	-	-	幼体で同定不可
ハグモの一種	-	-	-	-	-	y	幼体のまま死亡
キンヨウグモ？	-	-	y	-	-	-	成体で確認されれば糠平で初 記録になる

#### 引用文献

- 松田まゆみ 1997. 北海道産クモ類目録. 上土幌町ひがし大雪博物館研究報告, 19:1-46.
- 松田まゆみ 2000. 北海道産クモ類目録補遺. 上土幌町ひがし大雪博物館研究報告, 22:35-41.

## 東京蜘蛛談話会 2003 年度観察採集会報告

### さいたま緑の博物館

今井正巳・谷川明男

2003 年度クモ採集会は埼玉県のさいたま緑の博物館でおこなわれた。緑の博物館は、狭山丘陵の北西部に位置し、入間市宮寺地区・所沢市椈谷・堀之内地区にまたがり、約 85ha の広さがある。ここでは、狭山丘陵の雑木林や湿そのものを保存・維持が行われていて、動植物も豊富に生息している。採集会のコースは案内所をスタートに、大谷戸湿地、雑木林広場、西久保湿地を経由して案内所に戻るコースで実施した。さて、採集会の方は、多いときは 40 人近くの参加者が集まる盛況で、クモの方も全体で 150 種近く確認することができた。



5月の参加者一同

#### 参加者

5月11日

中島晴子, 萩本房枝, 赤羽尚夫, 小峰光弘, 新村 誠, 伴 満, 笠原喜久雄, 須長利晃, 平松 毅久, 井出和美, 新海 明, 加藤輝代子, 谷川明男, 吉井 光, 小野広樹, 初芝伸吾, 初芝琢磨, 初芝秋沙, 甲野 涼, 澤田和久, 澤田弘子, 小田島悠祐, 小田島直子, 小田島永佳, 津久井優子,

布施佳子，八幡明彦，木村知之，今井正巳，池田博明，泉 宏子，本間 征，永井亜紀，吉野光代，加藤むつみ，工藤秦恵．

7月13日

加藤輝代子，谷川明男，吉井 光，津久井優子，八幡明彦，今井正巳，池田博明，泉 宏子，永井亜紀，吉野光代，工藤秦恵，浅間一茂，荻野康則，新井浩司，嶋田順一，狩野一江．

10月19日

笠原喜久雄，井出和美，谷川明男，吉井 光，初芝伸吾，初芝琢磨，初芝秋沙，甲野 涼，津久井優子，八幡明彦，今井正巳，池田博明，泉 宏子，永井亜紀，吉野光代，加藤むつみ，工藤秦恵，浅間一茂，高津素夢，安藤昭久，和仁道大，芝崎孝雄，山根 隼，三戸 茂，駒野英昭．

2月15日

谷川明男，初芝伸吾，初芝琢磨，初芝秋沙，甲野 涼，八幡明彦，木村知之，今井正巳，池田博明，永井亜紀，吉野光代，荻野康則，嶋田順一，安藤昭久，貞元己良

目 録

		5月	7月	10月	2月
	Atypidae ジグモ科				
<i>Atypus karschi</i>	ジグモ	F	y		N
	Ctenizidae トタテグモ科				
<i>Ummidia fragaria</i>	キノボリトタテグモ	y		y	N
	Pholcidae ヨウレイグモ科				
<i>Pholcus crypticolens</i>	ヨウレイグモ	F	Fye	y	y
	Segestriidae エンマグモ科				
<i>Ariadna lateralis</i>	ミヤグモ	y	F	Fy	Fy
	Mimetidae センショウグモ科				
<i>Ero japonica</i>	センショウグモ	e	F	y	
	Oecobiidae チリグモ科				
<i>Uroctea compactilis</i>	ヒラタグモ	F			y
	Uloboridae ウズグモ科				
<i>Miagrammopes orientalis</i>	マネキグモ	f	F	y	y
	Theridiidae ヒメグモ科				
<i>Achaearanea angulithorax</i>	ツリガネヒメグモ	y			
<i>Achaearanea culicivola</i>	カグヤヒメグモ		FM	Fye	
<i>Achaearanea japonica</i>	ヒメグモ		F	F	
<i>Achaearanea kompirensis</i>	コンピラヒメグモ			F	
<i>Achaearanea tepidariorum</i>	オオヒメグモ	Fy	F	F	My
<i>Anelosimus crassipes</i>	アシプトヒメグモ			y	
<i>Argyrodes bonadea</i>	シロカネイソウロウグモ	y		F	

		5月	7月	10月	2月
<i>Argyrodes cylindratus</i>	トビジロイソウロウグモ	y	F	y	
<i>Argyrodes fur</i>	フタオイソウロウグモ			y	
<i>Argyrodes kumadai</i>	チリイソウロウグモ	y	FMy	F	
<i>Ariamnes cylindrogaster</i>	オナガグモ	FMe	Fy	y	y
<i>Chrysso foliata</i>	ホシミドリヒメグモ	F	Fye	My	y
<i>Coleosoma octomaculatum</i>	ヤホシサヤヒメグモ			m	
<i>Dipoena punctisparsa</i>	シモフリミジングモ	M	m		
<i>Enoplognatha abrupta</i>	カレハヒメグモ				F
<i>Episinus affinis</i>	ヒシガタグモ	y			y
<i>Episinus nubilus</i>	ムラクモヒシガタグモ			y	y
<i>Keijia sterninotata</i>	ムナボシヒメグモ	Fy			F
<i>Phoroncidia altiventris</i>	ハラダカツクネグモ	F			
<i>Phoroncidia pilula</i>	ツクネグモ			F	
<i>Rhomphaea sagana</i>	ヤリグモ	FM	Fe	My	M
<i>Steatoda cingulata</i>	ハンゲツオスナキグモ	F			
<i>Stemmops nipponicus</i>	スネグロオチバヒメグモ			y	
<i>Takayus chikunii</i>	バラギヒメグモ	FMy		m	y
Theridiosomatidae カラカラグモ科					
<i>Ogulnius pullus</i>	ヤマジグモ		F	m	
Linyphiidae サラグモ科					
<i>Asperthorax communis</i>	ザラアカムネグモ		F	F	M
<i>Doenitzius pruvus</i>	コデーニッツサラグモ				FM
<i>Floronia exornata</i>	ハナサラグモ		y	F	
<i>Labulla contortipes</i>	アシヨレグモ	F		y	FM
<i>Neriere oidedicata</i>	ヘリジロサラグモ	FM		y	y
<i>Oia imadatei</i>	イマダテングヌカグモ				M
<i>Prolinyphia longipedella</i>	アシナガサラグモ	y	S M	F	
<i>Solenysa mellottei</i>	アリマネグモ				F
<i>Turinyphia yunohamensis</i>	ユノハサラグモ	F			y
<i>Ummeliata feminea</i>	アトグロアカムネグモ				M
Tetragnathidae アシナガグモ科					
<i>Dyschiriognatha quadrimaculata</i>	ヨツボシヒメアシナガグモ				M
<i>Leucauge magnifica</i>	オオシロカネグモ	Mm		Fy	
<i>Leucauge subblanda</i>	コシロカネグモ	Fy			
<i>Leucauge subgemmea</i>	キララシロカネグモ		Fy		
<i>Menosira ornata</i>	キンヨウグモ		y	FM	ye

		5月	7月	10月	2月
<i>Meta reticuloides</i>	ヤマジドヨウグモ		M	F	
<i>Metleucauge yunohamensis</i>	メガネドヨウグモ	Ff		fy	
<i>Nephila clavata</i>	ジョロウグモ		y	FM	
<i>Tetragnatha caudicula</i>	トガリアシナガグモ	e			
<i>Tetragnatha praedonia</i>	アシナガグモ	F	My		
<i>Tetragnatha squamata</i>	ウロコアシナガグモ	FMe	y		y
Araneidae コガネグモ科					
<i>Acusilas coccineus</i>	ハツリグモ	FM			
<i>Araneus abscissus</i>	キザハシオニグモ	FM	y	My	
<i>Araneus ishizawai</i>	イシサワオニグモ		y		
<i>Araneus macacus</i>	ヤエンオニグモ	f		y	
<i>Araneus mitificus</i>	ビジョオニグモ		y	F	
<i>Araneus pentagrammicus</i>	アオオニグモ	F		y	My
<i>Araneus semilunaris</i>	マルヅメオニグモ		y		
<i>Araneus tsurusakii</i>	カラオニグモ	FM			
<i>Araneus variegatus</i>	ニシキオニグモ			F	
<i>Araneus ventricosus</i>	オニグモ	f		y	
<i>Araniella yaginumai</i>	ムツボシオニグモ		F		
<i>Argiope amoena</i>	コガネグモ	y			
<i>Argiope boesenbergi</i>	チュウガタコガネグモ	fy	Fy	y	y
<i>Argiope bruennichii</i>	ナガコガネグモ		F	F	
<i>Argiope minuta</i>	コガタコガネグモ		y	F	
<i>Chorizopes nipponicus</i>	ヤマトカナエグモ	F	Fe		
<i>Cyclosa argenteoalba</i>	ギンメッキゴミグモ	Fy	y	F	y
<i>Cyclosa octotuberculata</i>	ゴミグモ	f	Fe	y	y
<i>Cyclosa sedeculata</i>	ヨツデゴミグモ	Fy	Fe	y	y
<i>Cyclosa atrata</i>	カラスゴミグモの一種			F	
<i>Cyrtarachne inaequalis</i>	オオトリノフンダマシ			Fe	
<i>Cyrtarachne nagasakiensis</i>	シロオビトリノフンダマシ		y		
<i>Eriophora sachalinensis</i>	カラフトオニグモ	f			y
<i>Hypsosinga sanguinea</i>	シロスジシヨウジョウグモ	FMy	y	FM	y
<i>Neoscona mellottei</i>	ワキグロサツマノミダマシ	y	y	F	
<i>Neoscona punctigera</i>	コゲチャオニグモ		y		
<i>Neoscona scylla</i>	ヤマシロオニグモ	fy	M		y
<i>Neoscona scylloides</i>	サツマノミダマシ		F		
Lycosidae コモリグモ科					

		5月	7月	10月	2月
<i>Arctosa ebicha</i>	エビチャコモリグモ	Fe		F	M
<i>Arctosa fujiii</i>	フジイコモリグモ				y
<i>Arctosa japonica</i>	ヒノマルコモリグモ	M	M		
<i>Arctosa subamylacea</i>	クロココモリグモ	y	F	F	
<i>Hygrolycosa umidicola</i>	シッチコモリグモ	FM	ye		
<i>Pardosa agraria</i>	イナダハリゲコモリグモ	M	F		
<i>Pardosa astrigera</i>	ウツキコモリグモ		FM		My
<i>Pardosa laura</i>	ハリゲコモリグモ		Fe		
<i>Pardosa pseudoannulata</i>	キクツキコモリグモ				y
<i>Pirata subpiraticus</i>	キバラコモリグモ		F		y
	Pisauridae キシダグモ科				
<i>Dolomedes raptor</i>	アオグロハシリグモ			y	y
<i>Dolomedes sulfureus</i>	イオウイロハシリグモ	y		Fy	y
<i>Pisaura lama</i>	アズマキシダグモ		Fy		y
	Oxyopidae ササグモ科				
<i>Oxyopes sertatus</i>	ササグモ		F		y
	Ctenidae シボグモ科				
<i>Anahita fauna</i>	シボグモ	m	M	F	
	Agelenidae タナグモ科				
<i>Agelena limbata</i>	クサグモ	y			
<i>Agelena opulenta</i>	コクサグモ	y	y	FM	
	Dictynidae ハグモ科				
<i>Dictyna felis</i>	ネコハグモ	y		F	
	Amaurobiidae ガケジグモ科				
<i>Coelotes corasides</i>	ヤマヤチグモ			F	Fy
<i>Coelotes insidiosus</i>	シモフリヤチグモ			FM	
<i>Coelotes luctuosus</i>	メガネヤチグモ		F	Fy	
	Anyphaenidae イツツグモ科				
<i>Anyphaena pugil</i>	イツツグモ	F			F
	Liocranidae ウエムラグモ科				
<i>Itatsina praticola</i>	イタチグモ		y		
<i>Phrurolithus komurai</i>	コムラウラシマグモ	F		FM	
<i>Phrurolithus nipponicus</i>	ウラシマグモ	FM			y
<i>Phrurolithus pennatus</i>	ヤバネウラシマグモ		F		
	Clubionidae フクログモ科				
<i>Cheiracanthium japonicum</i>	カバキコマチグモ	m	Fy		

		5月	7月	10月	2月
<i>Clubiona vigil</i>	ムナアカフクログモ				y
	Corinnidae ネコグモ科				
<i>Trachelas japonicus</i>	ネコグモ	FM			y
	Gnaphosidae ワシグモ科				
<i>Gnaphosa kompirensis</i>	メキリグモ	M			
	Philodromidae エビグモ科				
<i>Philodromus auricomus</i>	キンイロエビグモ	y		y	y
<i>Philodromus spinitarsis</i>	キハダエビグモ	M			y
<i>Philodromus subaureolus</i>	アサヒエビグモ	y			y
<i>Thanatus miniaceus</i>	ヤドカリグモ	Fy			
	Thomisidae カニグモ科				
<i>Bassaniana decorata</i>	キハダカニグモ	m			y
<i>Diaea subdola</i>	コハナグモ		y		
<i>Lysiteles coronatus</i>	アマギエビスグモ	F		y	y
<i>Misumenops kumadai</i>	クマダハナグモ	f		F	y
<i>Misumenops tricuspoidatus</i>	ハナグモ	Fy	y	F	FM
<i>Oxytate striatipes</i>	ワカバグモ	F	M	y	F
<i>Synema chikunii</i>	チクニエビスグモ	F			
<i>Thomisus labefactus</i>	アズチグモ	y	FMy	Fy	
<i>Tmarus piger</i>	トラフカニグモ		F		
<i>Tmarus rimosus</i>	セマルトラフカニグモ	y	FM		
<i>Xysticus croceus</i>	ヤミイロカニグモ	FM			
	Salticidae ハエトリグモ科				
<i>Carrhotus xanthogramma</i>	ネコハエトリ	FM		y	f
<i>Evarcha albaria</i>	マミジロハエトリ	FMy	M	y	
<i>Harmochirus insulanus</i>	ウデプトハエトリ	F		y	
<i>Helicius cylindratus</i>	コジャバラハエトリ	F	F	y	
<i>Marpissa pulla</i>	ヨダンハエトリ	fMy	m	F	y
<i>Mendoza elongata</i>	ヤハズハエトリ	My	F		
<i>Myrmarachne formicaria</i>	タイリクアリグモ			y	
<i>Myrmarachne inermichelis</i>	ヤサアリグモ	My	F	y	y
<i>Myrmarachne japonica</i>	アリグモ			F	y
<i>Phintella abnormis</i>	チャイロアサヒハエトリ	y	M	F	y
<i>Phintella linea</i>	メガネアサヒハエトリ	M		M	y
<i>Plexippoides annulipedis</i>	マダラスジハトリ				m
<i>Plexippoides doenitzi</i>	デーニッツハエトリ	F	Fy	FM	



		5月	7月	10月	2月
<i>Pseudicius vulpes</i>	イナズマハエトリ			y	
<i>Rhene atrata</i>	カラスハエトリ	F		y	y
<i>Sibianor pullus</i>	キレワハエトリ	f	My		
<i>Siler cupreus</i>	アオオビハエトリ	My		y	y
<i>Yaginumaella striatipes</i>	ウススジハエトリ			M	

## 文献による富山県産クモ類目録

新海 明・谷川 明 男

富山県から報告されたクモ類の記録は、筆者らが知るかぎりでは 17 編である。ここでは、これらの記録を集めて富山県産のクモ類目録を作成した。この結果、富山県産クモ類は 32 科 192 種となった。

読者の中には、ここで報告したリストに載っていないクモを、富山県への採集旅行の際に見たという方もおられると思う。しかし、この目録はあくまですでに発表された文献に基づいてまとめたものである。もし、発表済みであるにもかかわらず、ここに掲載されていないクモの種類があれば、文献情報ともども著者らにまでご連絡いただければ幸いである。

目録の作成にあたっては、2004 年 6 月 30 日までに発表された富山県での採集記録や観察記録などのクモ類のデータを収集した。ただし、富山県産クモ類の種名のリストアップを目的としたので、同一種について扱っている文献を網羅はしていない。出典のもとになった文献は種名のあとに番号で示した。この番号は引用文献のものと同じしている。引用した文献中で種名が特定できないもの、たとえば××グモの一種、××sp.、××グモ?などとされているものについては、すべて目録から除外した。

科名・属名・種名・和名ならびに配列は、すべて谷川(2004)によった。

	Atypidae ジグモ科	
<i>Atypus karschi</i> Donitz 1887	ジグモ	1, 12
	Scytodidae ヤマシログモ科	
<i>Scytodes thoracica</i> (Latreille 1804)	ユカタヤマシログモ	1
	Leptonetidae マシラグモ科	
<i>Leptoneta inabaensis</i> Nishikawa 1982	イナバマシラグモ	5
	Pholcidae コウレイグモ科	
<i>Pholcus crypticolens</i> Bos. & Str. 1906	コウレイグモ	1, 7, 9, 12
<i>Pholcus phalangoides</i> (Fuesslin 1775)	イエコウレイグモ	12, 13
<i>Spermophora senoculata</i> (Duges 1836)	シモングモ	1
	Segestriidae エンマグモ科	
<i>Ariadna lateralis</i> (Karsch 1881)	ミヤグモ	1, 7
<i>Segestria nipponica</i> Kishida 1913	コマツエンマグモ	9

Mimetidae センショウグモ科

<i>Ero japonica</i> Bos. & Str. 1906	センショウグモ	9, 12
<i>Mimetus japonicus</i> Uyemura 1938	ハラヒロセンショウグモ	12
<i>Mimetus testaceus</i> Yaginuma 1960	オオセンショウグモ	12

Oecobiidae チリグモ科

<i>Uroctea compactilis</i> L. Koch 1878	ヒラタグモ	1, 12
---	-------	-------

Uloboridae ウズグモ科

<i>Miagrammopes orientalis</i> Bos. & Str. 1906	マネキグモ	12
<i>Octonoba varians</i> (Bos. & Str. 1906)	ウズグモ	1, 12
<i>Octonoba yesoensis</i> (S. Saito 1934)	エゾウズグモ	12

Theridiidae ヒメグモ科

<i>Achaearanea angulithorax</i> (Bos. & Str. 1906)	ツリガネヒメグモ	9, 12
<i>Achaearanea culicivola</i> (Bos. & Str. 1906)	カグヤヒメグモ	12, 13
<i>Achaearanea ferrumequina</i> (Bos. & Str. 1906)	ヒザブトヒメグモ	12
<i>Achaearanea japonica</i> (Bos. & Str. 1906)	ニホンヒメグモ	7, 12, 13, 16, 17
<i>Achaearanea simulans</i> (Thorell 1875)	ハモンヒメグモ	16, 17
<i>Achaearanea tabulata</i> Levi 1980	オオツリガネヒメグモ	12
<i>Achaearanea tepidariorum</i> (C. Koch 1841)	オオヒメグモ	1, 9, 12, 13
<i>Anelosimus crassipes</i> (Bos. & Str. 1906)	アシブトヒメグモ	1, 12
<i>Anelosimus iwawakiensis</i> Yoshida 1986	イワキアシブトヒメグモ	12
<i>Argyrodes kumadai</i> Chida & Tanikawa 1999	チリイソウロウグモ	7
<i>Argyrodes miniaceus</i> (Doleschall 1867)	アカイソウロウグモ	1
<i>Argyrodes nipponicus</i> Kumada 1990	ツノナガイソウロウグモ	12
<i>Ariamnes cylindrogaster</i> (Simon 1888)	オナガグモ	1, 7, 12
<i>Chryssio albipes</i> (S. Saito 1935)	ギボシヒメグモ	7, 12
<i>Chryssio foliata</i> (L. Koch 1878)	ホシミドリヒメグモ	12
<i>Enoplognatha abrupta</i> (Karsch 1879)	カレハヒメグモ	1, 12
<i>Enoplognatha tecta</i> (Keyserling 1884)	ヤマトコノハグモ	12
<i>Episinus nubilus</i> Yaginuma 1960	ムラクモヒシガタグモ	12
<i>Keijia mneon</i> (Bos. & Str. 1906)	サトヒメグモ	12
<i>Keijia sterninotata</i> (Bos. & Str. 1906)	ムナボシヒメグモ	1, 12
<i>Rhomphaea sagana</i> (Don. & Str. 1906)	ヤリグモ	12
<i>Steatoda triangulosa</i> (Walckenaer 1802)	マダラヒメグモ	10
<i>Stemmops nipponicus</i> Yaginuma 1969	スネグロオチバヒメグモ	12
<i>Takayus chikunii</i> (Yaginuma 1960)	バラギヒメグモ	12
<i>Takayus subadultus</i> (Bos. & Str. 1906)	コケヒメグモ	12, 13
<i>Takayus takayensis</i> (S. Saito 1939)	タカユヒメグモ	12

<i>Takayus yunohamensis</i> (Bos. & Str. 1906)	ユノハマヒメグモ	12
<i>Theridion pinastri</i> L. Koch 1872	ムネグロヒメグモ	10, 12, 17
<i>Thymoites okumae</i> Yoshida 1988	クロササヒメグモ	12
<i>Trigonobothrys mustelina</i> (Simon 1888)	カニミジグモ	12
<i>Yaginumena castrata</i> (Bos. & Str. 1906)	ボカシミジグモ	4, 4, 12
<i>Yaginumena mutilata</i> (Bos. & Str. 1906)	コアカクロミジグモ	12
Theridiosomatidae カラカラグモ科		
<i>Ogulnius pullus</i> Bos. & Str. 1906	ヤマジグモ	12
Anapidae ヨリメグモ科		
<i>Comaroma maculosum</i> Oi 1960	ヨロイヒメグモ	4, 4
<i>Conoculus lyugadinus</i> Komatsu 1940	ヨリメグモ	7, 12
Linyphiidae サラグモ科		
<i>Gnathonarium exsiccatum</i> (Bos. & Str. 1906)	ニセアカムネグモ	1
<i>Herbiphantes cericeus</i> (S. Saito 1934)	キヌキリグモ	12
<i>Neolinyphia angulifera</i> (Schenkel 1953)	ハンモックサラグモ	12
<i>Neolinyphia nigripectoides</i> (Oi 1960)	ムネグロサラグモ	12
<i>Neriere montata</i> (Clerck 1758)	ヤマジサラグモ	1
<i>Neserigone nigriterminorum</i> (Oi 1960)	ハシグロナンキングモ	12
<i>Oedothorax bipunctis</i> Bos. & Str. 1906	ヌカグモ	7
<i>Prolinyphia limbatinella</i> (Bos. & Str. 1906)	フタスジサラグモ	7, 12
<i>Prolinyphia longipedella</i> (Bos. & Str. 1906)	アシナガサラグモ	7, 12
<i>Prolinyphia marginella</i> Oi 1960	コシロブチサラグモ	8, 12
<i>Strandella yaginumai</i> H. Saito 1982	ヒメヨツボシサラグモ	12
<i>Turinyphia yunohamensis</i> (Bos. & Str. 1906)	ユノハマサラグモ	12
Tetragnathidae アシナガグモ科		
<i>Dyschiriognatha tenera</i> (Karsch 1879)	ヒメアシナガグモ	1
<i>Leucauge magnifica</i> Yaginuma 1954	オオシロカネグモ	7, 12
<i>Leucauge subblanda</i> Bos. & Str. 1906	コシロカネグモ	7, 12
<i>Leucauge subgemmea</i> Bos. & Str. 1906	キララシロカネグモ	12
<i>Menosira ornata</i> Tikuni 1955	キンヨウグモ	2, 12
<i>Meta reticuloides</i> Yaginuma 1958	ヤマジドヨウグモ	12
<i>Metleucauge chikunii</i> Tanikawa 1992	チクニドヨウグモ	7
<i>Metleucauge kompirensis</i> (Bos. & Str. 1906)	タニマノドヨウグモ	1, 12
<i>Metleucauge yaginumai</i> Tanikawa 1992	キタドヨウグモ	12
<i>Metleucauge yunohamensis</i> (Bos. & Str. 1906)	メガネドヨウグモ	1
<i>Nephila clavata</i> L. Koch 1878	ジョロウグモ	1, 12, 13
<i>Tetragnatha caudicula</i> (Karsch 1879)	トガリアシナガグモ	1

<i>Tetragnatha maxillosa</i> Thorell 1895	ヤサガタアシナガグモ	12
<i>Tetragnatha pinicola</i> L. Koch 1870	ミドリアシナガグモ	12
<i>Tetragnatha praedonia</i> L. Koch 1878	アシナガグモ	1, 7, 12, 13
<i>Tetragnatha shinanoensis</i> Okuma & Chikuni 1978	シナノアシナガグモ	12
<i>Tetragnatha squamata</i> Karsch 1879	ウロコアシナガグモ	1, 12
<i>Tetragnatha yesoensis</i> S. Saito 1934	エゾアシナガグモ	12
Araneidae コガネグモ科		
<i>Acuilas coccineus</i> Simon 1895	ハツリグモ	12
<i>Araneus abscissus</i> (Karsch 1879)	キザハシオニグモ	12
<i>Araneus acusisetus</i> Zhu & Song 1994	オオクマヤミイロオニグモ	12
<i>Araneus cornutus</i> Clerck 1758	ナカムラオニグモ	1, 12
<i>Araneus ishizawai</i> Kishida 1928	イシサワオニグモ	7, 12
<i>Araneus pentagrammicus</i> (Karsch 1879)	アオオニグモ	12
<i>Araneus seminiger</i> (L. Koch 1878)	コケオニグモ	1
<i>Araneus uyemurai</i> Yaginuma 1960	ヤマオニグモ	7, 12
<i>Araneus ventricosus</i> (L. Koch 1878)	オニグモ	1, 12
<i>Araniella yaginumai</i> Tanikawa 1995	ムツボシオニグモ	7, 12
<i>Argiope amoena</i> L. Koch 1878	コガネグモ	12
<i>Argiope boesenbergi</i> Levi 1983	チュウガタコガネグモ	1
<i>Argiope bruennichii</i> (Scopoli 1772)	ナガコガネグモ	1, 7, 12
<i>Argiope minuta</i> Karsch 1879	コガタコガネグモ	1, 7, 12
<i>Cyclosa hamulata</i> Tanikawa 1992	カギヅメカラスゴミグモ	12
<i>Cyclosa octotuberculata</i> Karsch 1879	ゴミグモ	1, 7, 12
<i>Cyclosa sedeculata</i> Karsch 1879	ヨツデゴミグモ	1, 12
<i>Cyrtarachne bufo</i> (Bos. & Str. 1906)	トリノフンダマシ	7, 12
<i>Cyrtarachne inaequalis</i> Thorell 1895	オオトリノフンダマシ	7, 12
<i>Cyrtarachne nagasakiensis</i> Strand 1918	シロオビトリノフンダマシ	12
<i>Eriophora sachalinensis</i> (S. Saito 1934)	カラフトオニグモ	12
<i>Gasteracantha kuhlii</i> C. Koch 1837	トゲグモ	7, 12
<i>Gasteracantha mammosa</i> C. Koch 1844	チブサトゲグモ	1
<i>Hypsosinga sanguinea</i> (C. Koch 1844)	シロスジショウジョウグモ	12
<i>Neoscona mellottei</i> (Simon 1895)	ワキグロサツマノミダマシ	7, 12
<i>Neoscona nautica</i> (L. Koch 1875)	イエオニグモ	1, 12
<i>Neoscona punctigera</i> (Doleschall 1857)	コゲチャオニグモ	1, 12
<i>Neoscona scylla</i> (Karsch 1879)	ヤマシロオニグモ	1, 7, 12
<i>Neoscona scylloides</i> (Bos. & Str. 1906)	サツマノミダマシ	1, 7, 12

<i>Yaginumia sia</i> (Strand 1906)	ズグロオニグモ	12, 13
Lycosidae コモリグモ科		
<i>Arctosa japonica</i> (Simon 1888)	ヒノマルコモリグモ	14
<i>Arctosa subamylacea</i> (Bos. & Str. 1906)	クロココモリグモ	1
<i>Pardosa astrigera</i> L. Koch 1878	ウツキコモリグモ	1, 4, 4, 7
<i>Pardosa brevivulva</i> Tanaka 1975	ヤマハリゲコモリグモ	7
<i>Pirata clercki</i> (Bos. & Str. 1906)	クラークコモリグモ	7
<i>Pirata piratoides</i> (Bos. & Str. 1906)	イモコモリグモ	7
Trechaleidae サシアシグモ科		
<i>Shinobius orientalis</i> (Yaginuma 1967)	シノビグモ	7
Pisauridae キシダグモ科		
<i>Dolomedes pallitarsis</i> Don. & Str. 1906	スジプトハシリグモ	1
<i>Dolomedes raptor</i> Bos. & Str. 1906	アオグロハシリグモ	7, 12
<i>Dolomedes saganus</i> Bos. & Str. 1906	スジアカハシリグモ	7, 12
<i>Dolomedes stellatus</i> Kishida 1936	キクメハシリグモ	1
<i>Dolomedes sulfureus</i> L. Koch 1878	イオウイロハシリグモ	1, 7, 12
<i>Pisaura lama</i> Bos. & Str. 1906	アズマキシダグモ	12
Ctenidae シボグモ科		
<i>Anahita fauna</i> Karsch 1879	シボグモ	12
Agelenidae タナグモ科		
<i>Agelena limbata</i> Thorell 1879	クサグモ	1, 7, 12, 13
<i>Agelena opulenta</i> L. Koch 1878	コクサグモ	7, 12, 13
Dictynidae ハグモ科		
<i>Dictyna felis</i> Bos. & Str. 1906	ネコハグモ	13
<i>Lathys sexoculata</i> Seo & Sohn 1984	ムツメカレハグモ	4, 4
Amaurobiidae ガケジグモ科		
<i>Coelotes corasides</i> (Bos. & Str. 1906)	ヤマヤチグモ	7, 12
<i>Coelotes tumidivulva</i> Nishikawa 1980	デベソヤチグモ	6
Titanocidae ヤマトガケジグモ科		
<i>Nurscia albofasciata</i> Strand 1907	ヤマトガケジグモ	12
Anyphaenidae イツツグモ科		
<i>Anyphaena pugil</i> Karsch 1879	イツツグモ	7, 12
Liocranidae ウエムラグモ科		
<i>Itatsina praticola</i> (Bos. & Str. 1906)	イタチグモ	4, 4, 14
<i>Orthobula crucifera</i> Bos. & Str. 1906	オトヒメグモ	4, 4
<i>Phrurolithus komurai</i> Yaginuma 1952	コムラウラシマグモ	4, 4
<i>Phrurolithus nipponicus</i> Kishida 1914	ウラシマグモ	14

Clubionidae フクログモ科		
<i>Cheiracanthium japonicum</i> Bos. & Str. 1906	カバキコマチグモ	12
<i>Cheiracanthium lascivum</i> Karsch 1879	ヤマトコマチグモ	12
<i>Cheiracanthium unicum</i> Bos. & Str. 1906	ヤサコマチグモ	12
<i>Clubiona jucunda</i> (Karsch 1879)	ヤハズフクログモ	1, 12
<i>Clubiona tateyamensis</i> Hayashi 1989	タテヤマフクログモ	3
<i>Clubiona vigil</i> Karsch 1879	ムナアカフクログモ	12
Corinnidae ネコグモ科		
<i>Trachelas japonicus</i> Bos. & Str. 1906	ネコグモ	4, 4
Gnaphosidae ワシグモ科		
<i>Callilepis schuszeri</i> (Herman 1879)	フタホシテオノグモ	4, 4
<i>Drassyllus sanmenensis</i> Platnick & Song 1986	エビチャヨリメケムリグモ	14
<i>Drassyllus sasakawai</i> Kamura 1987	ヤマヨリメケムリグモ	14
<i>Gnaphosa potanini</i> Simon 1895	モリメキリグモ	14
<i>Kishidaia albimaculata</i> (S. Saito 1934)	ヨツボシワシグモ	1
<i>Sernokorba pallidipatellis</i> (Bos. & Str. 1906)	マエトビケムリグモ	12, 14
Selenopidae アワセグモ科		
<i>Selenops bursarius</i> Karsch 1879	アワセグモ	1
Sparassidae アシダカグモ科		
<i>Heteropoda venatoria</i> (Linnaeus 1758)	アシダカグモ	1, 11
<i>Sinopoda forcipata</i> (Karsch 1881)	コアシダカグモ	12
Philodromidae エビグモ科		
<i>Philodromus aureolus</i> (Clerck 1758)	コガネエビグモ	12
<i>Philodromus spinitarsis</i> Simon 1895	キハダエビグモ	7, 9, 12
<i>Tibellus tenellus</i> (L. Koch 1876)	シャコグモ	1
Thomisidae カニグモ科		
<i>Bassaniana decorata</i> (Karsch 1879)	キハダカニグモ	12
<i>Coriarachne fulvipes</i> (Karsch 1879)	コカニグモ	1
<i>Diaea subdola</i> O. P.-Cambridge 1885	コハナグモ	7, 9, 12
<i>Lysiteles coronatus</i> (Grube 1861)	アマギエビスグモ	12
<i>Misumenops tricuspidatus</i> (Fabricius 1775)	ハナグモ	1, 12, 13
<i>Oxytate striatipes</i> L. Koch 1878	ワカバグモ	1, 12
<i>Ozyptila nipponica</i> Ono 1985	ニッポンオチバカニグモ	4, 4
<i>Synema chikunii</i> Ono 19833	チクニエビスグモ	12
<i>Synema globosum</i> (Fabricius 1775)	フノジグモ	12
<i>Tmarus piger</i> (Walckenaer 1802)	トラフカニグモ	12

<i>Tmarus rimosus</i> Paik 1973	セマルトラフカニグモ	12
<i>Xysticus croceus</i> Fox 1937	ヤミイロカニグモ	12, 14
<i>Xysticus kurilensis</i> Strand 1907	チシマカニグモ	12
<i>Xysticus saganus</i> Bos. & Str. 1906	オオヤミイロカニグモ	12, 13
<i>Xysticus trizonatus</i> Ono 1988	オビボソカニグモ	1
Salticidae ハエトリグモ科		
<i>Aelurillus festivus</i> (L. Koch 1834)	ヤマジハエトリ	12
<i>Carrhotus xanthogramma</i> (Latreille 1819)	ネコハエトリ	12
<i>Evarcha albaria</i> (L. Koch 1878)	マミジロハエトリ	12
<i>Marpissa milleri</i> (Peckham & Peckham 1894)	オオハエトリ	1, 12
<i>Marpissa pomatia</i> (Walckenaer 1802)	ヤバネハエトリ	15
<i>Marpissa pulla</i> (Karsch 1879)	ヨダンハエトリ	4, 4, 12
<i>Mendoza canestrinii</i> (Niini in Canestrini & Pavei 1868)	オスクロハエトリ	1
<i>Mendoza elongata</i> (Karsch 1879)	ヤハズハエトリ	12
<i>Menemerus fulvus</i> (L. Koch 1878)	シラヒゲハエトリ	1
<i>Myrmarachne inermichelis</i> Bos. & Str. 1906	ヤサアリグモ	1, 12
<i>Phintella arenicolor</i> (Grube 1861)	マガネアサヒハエトリ	7, 12
<i>Phintella linea</i> (Karsch 1879)	メガネアサヒハエトリ	12
<i>Plexippoides annulipedis</i> (S. Saito 1939)	マダラスジハエトリ	12
<i>Plexippoides doentzi</i> (Karsch 1879)	デーニッツハエトリ	12
<i>Plexippus niccensis</i> Strand 1906	ニッコウハエトリ	1
<i>Plexippus paykulli</i> (Audouin 1827)	チャスジハエトリ	1
<i>Plexippus setipes</i> Karsch 1879	ミスジハエトリ	1
<i>Pseudicius vulpes</i> (Grube 1861)	イナズマハエトリ	12
<i>Sibianor pullus</i> (Bos. & Str. 1906)	キレワハエトリ	12
<i>Sitticus saevus</i> Don. & Str. 1906	ボケチャハエトリ	1
<i>Yaginumaella striatipes</i> (Grube 1861)	ウススジハエトリ	12
<i>Yaginumanis sexdentatus</i> (Yaginuma 1967)	ムツバハエトリ	12

#### 引用文献

1. 安念嘉一 1940. 富山県産蜘蛛類目録(予報). Acta Arachnol., 5:86-91.
2. 千国安之輔 1955. 面白い日本のクモ5種. Acta Arachnol., 14:29-40.
3. Hayashi, T. 1989. Four new species of the genus *Clubiona* (Araneae: Clubionidae) from Japan. Aracnol. Pap. Pres. Yaginuma, 103-110.
4. 平内好子・加村隆英・石川和男・芝 実・布村 昇 1998. 富山市古洞池周辺の土壌動物相2. 富山市科学文化センター研究報告, 21: 99-104.



5. Nishikawa Y. 1982. A New *Leptoneta* (Araneae, Leptonetidae) from a Green Tuff Mine in Toyama Prefecture, Central Japan. J. Speleol. Soc. Japan, 7:83-87.
6. 西川喜朗 1987. 地下浅層性のデベソヤチグモについて. 追手門学院大学 20 周年記念論集, 443-450.
7. 緒方清人 2002. 北陸・東北クモ紀行. 蜘蛛, 35:27-35.
8. Oi, R. 1960. Lyniphiid spiders of Japan. J. Inst. Polytec. Osaka City University., 11:137-244.
9. 貞元己良 2003. 2001 年 7 月 21 日富山県中新川郡立山町「雄山神社」のクモ. Kishidaia, 84:75.
10. 貞元己良 2003. 2001 年 7 月 21 日富山県魚津市魚津温泉, 海岸線堤防の内側. Kishidaia, 84:75.
11. 関口晃一 1943. アシダカグモ *Heteropoda venatoria* Linnaeus の生活史に就いて(上). Acta Arachnol., 8: 66-73.
12. 新海 明・徳本 洋 2002. 東京蜘蛛談話会 2001 年度合宿報告富山県立山周辺のクモ. Kishidaia, 82:31-38.
13. 須賀瑛文 2001. ちょっと覗いたあちこちのクモ~1999~. 蜘蛛 34:21-24.  
谷川明男 2004. 日本産クモ類目録 Ver.2004R1. <http://www.asahi-net.or.jp/~dp7a-tnkw/japan.pdf>
14. 徳本 洋 1992. シグモの一種 *Atypus* sp. 富山県東部に産す. 蜘蛛 25:1-3.
15. 八木沼健夫・新海栄一 1972. 分布資料. *Atypus*, 58: 43-44.
16. Yoshida, H. 2000. The spider genus *Achaearanea* (Araneae: Theridiidae) from Japan.. Acta Arachnol., 49:137-153.
17. 吉田 哉, 2003. 日本産ヒメグモ科総説. 223p. 日本蜘蛛学会.

## 文献による福井県産クモ類目録

新海 明・谷川 明 男

福井県から報告されたクモ類の記録は、筆者らが知るかぎりでは 25 編である。ここでは、これらの記録を集めて福井県産のクモ類目録を作成した。この結果、福井県産クモ類は 38 科 252 種となった。

読者の中には、ここで報告したリストに載っていないクモを、福井県への採集旅行の際に見たという方もおられると思う。しかし、この目録はあくまですでに発表された文献に基づいてまとめたものである。もし、発表済みであるにもかかわらず、ここに掲載されていないクモの種類があれば、文献情報ともども著者らにまでご連絡いただければ幸いである。

目録の作成にあたっては、2004 年 6 月 30 日までに発表された福井県での採集記録や観察記録などのクモ類のデータを収集した。ただし、福井県産クモ類の種名のリストアップを目的としたので、同一種について扱っている文献を網羅はしていない。出典のもとになった文献は種名のあとに番号で示した。この番号は引用文献のものと同じしている。引用した文献中で種名が特定できないもの、たとえば  $\times \times$  グモの一種、 $\times \times$  sp. ,  $\times \times$  グモ? などとされているものについては、すべて目録から除外した。

科名・属名・種名・和名ならびに配列は、すべて谷川 (2004) によった。

	Atypidae ジグモ科	
<i>Atypus karschi</i> Donitz 1887	ジグモ	3
	Ctenizidae トタテグモ科	
<i>Ummidia fragaria</i> (Donitz 1887)	キノボリトタテグモ	3, 24
	Leptonetidae マシラグモ科	
<i>Leptoneta asuwana</i> Nishikawa 1981	アスワマシラグモ	6
	Pholcidae ヨウレイグモ科	
<i>Pholcus crypticolens</i> Bos. & Str. 1906	ヨウレイグモ	3, 11, 14
<i>Pholcus phalangoides</i> (Fuesslin 1775)	イエヨウレイグモ	3
	Segestriidae エンマグモ科	
<i>Ariadna lateralis</i> (Karsch 1881)	ミヤグモ	3, 11, 14, 22
	Oonopidae タマゴグモ科	
<i>Gamasomorpha cataphracta</i> Karsch 1881	ダニグモ	3
<i>Orchestina okitui</i> Oi 1958	オキツハネグモ	3

<i>Orchestina sanguinea</i> Oi 1955	アカハネグモ	3, 11, 14
	Mimetidae センショウグモ科	
<i>Ero japonica</i> Bos. & Str. 1906	センショウグモ	3, 11, 14
<i>Mimetus testaceus</i> Yaginuma 1960	オオセンショウグモ	3, 14
	Oecobiidae チリグモ科	
<i>Uroctea compactilis</i> L. Koch 1878	ヒラタグモ	3, 11, 14
	Uloboridae ウズグモ科	
<i>Hyptiotes affinis</i> Bos. & Str. 1906	オウギグモ	3, 11
<i>Miagrammopes orientalis</i> Bos. & Str. 1906	マネキグモ	3, 11, 14
<i>Octonoba sybotides</i> (Bos. & Str. 1906)	カタハリウズグモ	3, 11, 14
<i>Octonoba varians</i> (Bos. & Str. 1906)	ウズグモ	3, 14
<i>Octonoba yesoensis</i> (S. Saito 1934)	エゾウズグモ	3
	Nesticidae ホラヒメグモ科	
<i>Nesticella brevipes</i> Yaginuma 1970	コホラヒメグモ	7
<i>Nesticella mogera</i> Yaginuma 1972	チビホラヒメグモ	3
<i>Nesticus asuwanus</i> Nishikawa 1986	アスワホラヒメグモ	7
<i>Nesticus tarumii</i> Yaginuma 1979	オニノホラヒメグモ	7, 18
	Theridiidae ヒメグモ科	
<i>Achaeearanea angulithorax</i> (Bos. & Str. 1906)	ツリガネヒメグモ	3, 11, 14
<i>Achaeearanea culicivola</i> (Bos. & Str. 1906)	カグヤヒメグモ	3, 11, 14
<i>Achaeearanea japonica</i> (Bos. & Str. 1906)	ニホンヒメグモ	3, 11, 14
<i>Achaeearanea kompirensis</i> (Bos. & Str. 1906)	コンピラヒメグモ	3, 11, 14
<i>Achaeearanea oculiprominentis</i> (S. Saito 1939)	キヨヒメグモ	3, 11, 14
<i>Achaeearanea tabulata</i> Levi 1980	オオツリガネヒメグモ	11
<i>Achaeearanea tepidariorum</i> (C. Koch 1841)	オオヒメグモ	3, 11, 14, 15, 22
<i>Anelosimus crassipes</i> (Bos. & Str. 1906)	アシプトヒメグモ	3, 11, 14
<i>Argyrodes bonadea</i> (Karsch 1881)	シロカネイソウロウグモ	3, 11, 14
<i>Argyrodes cylindratus</i> Thorell 1889	トビジロイソウロウグモ	3
<i>Argyrodes fur</i> Bos. & Str. 1906	フタオイソウロウグモ	3, 11, 14
<i>Ariamnes cylindrogaster</i> (Simon 1888)	オナガグモ	3, 11, 14
<i>Chrosiothes sudabides</i> (Bos. & Str. 1906)	ヨツコブヒメグモ	11, 14
<i>Chrysso foliata</i> (L.Koch 1878)	ホシミドリヒメグモ	3, 11
<i>Dipoena punctisparsa</i> Yaginuma 1967	シモフリミジグモ	3, 11, 14
<i>Enoplognatha abrupta</i> (Karsch 1879)	カレハヒメグモ	3, 11, 14
<i>Enoplognatha tecta</i> (Keyserling 1884)	ヤマトコノハグモ	3, 14
<i>Episinus affinis</i> Bos. & Str. 1906	ヒシガタグモ	3, 11, 14
<i>Episinus nubilus</i> Yaginuma 1960	ムラクモヒシガタグモ	3, 11, 14

<i>Keijia sterninotata</i> (Bos. & Str. 1906)	ムナボシヒメグモ	3, 11, 14
<i>Paidiscura subpallens</i> (Bos. & Str. 1906)	ハイイロヒメグモ	3, 14
<i>Phoroncidia altiventris</i> Yoshida 1985	ハラダカツクネグモ	3, 11
<i>Rhomphaea sagana</i> (Don. & Str. 1906)	ヤリグモ	3, 11, 14
<i>Spheropistha melanosoma</i> Yaginuma 1957	クロマルイソウロウグモ	3
<i>Stemmops nipponicus</i> Yaginuma 1969	スネグロオチバヒメグモ	3, 11, 14
<i>Takayus subadultus</i> (Bos. & Str. 1906)	コケヒメグモ	3
<i>Takayus takayensis</i> (S. Saito 1939)	タカユヒメグモ	3
<i>Takayus yunohamensis</i> (Bos. & Str. 1906)	ユノハマヒメグモ	3
<i>Trigonobothrys amamiensis</i> (Yoshida 1985)	アマミミジグモ	3
<i>Trigonobothrys japonica</i> (Yoshida 1985)	ヤマトミジグモ	3
<i>Trigonobothrys mustelina</i> (Simon 1888)	カニミジグモ	3, 11, 14
<i>Yaginumena mutilata</i> (Bos. & Str. 1906)	コアカクロミジグモ	3, 11, 14
Theridiosomatidae カラカラグモ科		
<i>Ogulnius pullus</i> Bos. & Str. 1906	ヤマジグモ	3, 11, 14
<i>Theridiosoma epeiroides</i> Bos. & Str. 1906	カラカラグモ	3, 11, 14
Anapidae ヨリメグモ科		
<i>Conoculus lyugadinus</i> Komatsu 1940	ヨリメグモ	11
Mysmenidae コツブグモ科		
<i>Mysmenella jobi</i> (Kraus 1967)	ナンブコツブグモ	3, 11, 14
Linyphiidae サラグモ科		
<i>Aprifrontalia mascula</i> (Karsch 1879)	コサラグモ	3
<i>Arcuphantes longiscapus</i> (Oi 1960)	ナガエヤミサラグモ	3
<i>Ceratinella brevis</i> (Wider 1834)	チビクロマルハラカタグモ	3
<i>Doenitzius peniculus</i> Oi 1960	デーニッツサラグモ	3
<i>Gongylidioides cucullatus</i> Oi 1960	ズキンヌカグモ	3
<i>Herbiphantes cericeus</i> (S. Saito 1934)	キヌキリグモ	3
<i>Nematogmus stylitus</i> (Bos. & Str. 1906)	ズダカサラグモ	3
<i>Neolinyphia angulifera</i> (Schenkel 1953)	ハンモックサラグモ	3
<i>Neolinyphia fusca</i> (Oi 1960)	クスミサラグモ	3
<i>Neolinyphia nigripsectoides</i> (Oi 1960)	ムネグロサラグモ	3, 11, 14
<i>Neriere albolimbata</i> (Karsch 1879)	ヤガスリサラグモ	14
<i>Neriere clathrata</i> (Sundevall 1830)	コウシサラグモ	3
<i>Neriere montata</i> (Clerck 1758)	ヤマジサラグモ	22
<i>Neriere oidedicata</i> (Helsdingen 1969)	ヘリジロサラグモ	3, 11, 14
<i>Neserigone nigriterminorum</i> (Oi 1960)	ハシグロナンキングモ	3
<i>Neserigone torquipalpis</i> (Oi 1960)	マダラナンキングモ	3

<i>Oedothorax bipunctis</i> Bos. & Str. 1906	ヌカグモ	3, 15
<i>Oia imadatei</i> (Oi 1964)	イマダテテングヌカグモ	3, 14
<i>Prolinyphia limbatinella</i> (Bos. & Str. 1906)	フタスジサラグモ	3, 11
<i>Prolinyphia longipedella</i> (Bos. & Str. 1906)	アシナガサラグモ	3, 11, 14
<i>Solenysa mellottei</i> Simon 1894	アリマネグモ	3, 14
<i>Strandella yaginumai</i> H. Saito 1982	ヒメヨツボシサラグモ	3
<i>Turinyphia yunohamensis</i> (Bos. & Str. 1906)	ユノハマサラグモ	3, 14
<i>Ummeliata angulitubera</i> (Oi 1960)	コトガリアカムネグモ	3, 11, 14

Tetragnathidae アシナガグモ科

<i>Leucauge magnifica</i> Yaginuma 1954	オオシロカネグモ	3, 11
<i>Leucauge subblanda</i> Bos. & Str. 1906	コシロカネグモ	3, 11, 14
<i>Leucauge subgemmea</i> Bos. & Str. 1906	キララシロカネグモ	3, 11, 14
<i>Menosira ornata</i> Tikuni 1955	キンヨウグモ	3, 11, 14
<i>Meta reticuloides</i> Yaginuma 1958	ヤマジドヨウグモ	3, 11
<i>Metleucauge kompirensis</i> (Bos. & Str. 1906)	タニマノドヨウグモ	3, 11
<i>Metleucauge yunohamensis</i> (Bos. & Str. 1906)	メガネドヨウグモ	3, 14
<i>Nephila clavata</i> L. Koch 1878	ジョロウグモ	3, 11, 14
<i>Tetragnatha lauta</i> Yaginuma 1959	キヌアシナガグモ	11, 14
<i>Tetragnatha maxillosa</i> Thorell 1895	ヤサガタアシナガグモ	3, 11, 14
<i>Tetragnatha pinicola</i> L. Koch 1870	ミドリアシナガグモ	3
<i>Tetragnatha praedonia</i> L. Koch 1878	アシナガグモ	3, 11, 14
<i>Tetragnatha squamata</i> Karsch 1879	ウロコアシナガグモ	3, 11, 14
<i>Tetragnatha vermiformis</i> Emerton 1884	シコクアシナガグモ	3
<i>Tetragnatha yesoensis</i> S. Saito 1934	エゾアシナガグモ	3

Araneidae コガネグモ科

<i>Acusilas coccineus</i> Simon 1895	ハツリグモ	3, 11, 14
<i>Araneus abscissus</i> (Karsch 1879)	キザハシオニグモ	3, 11, 14
<i>Araneus acusisetus</i> Zhu & Song 1994	オオクマヤミイロオニグモ	3, 15
<i>Araneus cornutus</i> Clerck 1758	ナカムラオニグモ	3, 11, 14
<i>Araneus ejusmodi</i> (Bos. & Str. 1906)	ヌサオニグモ	3, 11, 14
<i>Araneus ishisawai</i> Kishida 1928	イシサワオニグモ	3
<i>Araneus macacus</i> Uyemura 1961	ヤエンオニグモ	11
<i>Araneus mitificus</i> (Simon 1886)	ビジョオニグモ	3, 11, 14
<i>Araneus pentagrammicus</i> (Karsch 1879)	アオオニグモ	3, 11, 14
<i>Araneus semilunaris</i> (Karsch 1879)	マルヅメオニグモ	3, 14
<i>Araneus tsurusakii</i> Tanikawa 2001	カラオニグモ	3, 11

<i>Araneus ventricosus</i> (L. Koch 1878)	オニグモ	3, 11, 14
<i>Araneus viridiventris</i> Yaginuma 1969	ハラピロミドリオニグモ	11
<i>Araniella yaginumai</i> Tanikawa 1995	ムツボシオニグモ	3, 11, 14
<i>Argiope boesenbergi</i> Levi 1983	チュウガタコガネグモ	3, 11, 14
<i>Argiope minuta</i> Karsch 1879	コガタコガネグモ	3, 11, 14
<i>Chorizopes nipponicus</i> Yaginuma 1963	ヤマトカナエグモ	3, 11, 14
<i>Cyclosa argenteoalba</i> Bos. & Str. 1906	ギンメッキゴミグモ	3, 11, 14
<i>Cyclosa atrata</i> Bos. & Str. 1906	カラスゴミグモ	3
<i>Cyclosa hamulata</i> Tanikawa 1992	カギツメカラスゴミグモ	11, 14
<i>Cyclosa japonica</i> Bos. & Str. 1906	ヤマトゴミグモ	11, 14
<i>Cyclosa monticola</i> Bos. & Str. 1906	ヤマゴミグモ	3, 14
<i>Cyclosa octotuberculata</i> Karsch 1879	ゴミグモ	3, 11, 14, 15, 22
<i>Cyclosa sedeculata</i> Karsch 1879	ヨツデゴミグモ	3, 11, 14
<i>Cyrtarachne bufo</i> (Bos. & Str. 1906)	トリノフンダマシ	3, 11, 14
<i>Cyrtarachne inaequalis</i> Thorell 1895	オオトリノフンダマシ	3, 11, 14
<i>Cyrtarachne nagasakiensis</i> Strand 1918	シロオビトリノフンダマシ	3, 11, 14
<i>Cyrtarachne yunoharuensis</i> Strand 1918	アカイトリノフンダマシ	3, 11, 14
<i>Cyrtophora moluccensis</i> (Doleschall 1857)	スズミグモ	11, 12, 14, 23
<i>Eriophora sachalinensis</i> (S. Saito 1934)	カラフトオニグモ	3, 11, 14
<i>Eriophora sagana</i> (Bosenberg & Strand 1906)	サガオニグモ	3, 14
<i>Gasteracantha kuhlii</i> C. Koch 1837	トゲグモ	3
<i>Hypsosinga sanguinea</i> (C. Koch 1844)	シロスジシヨウジヨウグモ	3
<i>Larinia argiopiformis</i> Bos. & Str. 1906	コガネグモダマシ	3, 14
<i>Neoscona adianta</i> (Walckenaer 1802)	ドヨウオニグモ	11, 14
<i>Neoscona mellottei</i> (Simon 1895)	ワキグロサツマノミダマシ	3, 11, 14
<i>Neoscona nautica</i> (L. Koch 1875)	イエオニグモ	11
<i>Neoscona punctigera</i> (Doleschall 1857)	コゲチャオニグモ	3, 11, 14
<i>Neoscona scylla</i> (Karsch 1879)	ヤマシロオニグモ	3, 11, 14, 22
<i>Neoscona scylloides</i> (Bos. & Str. 1906)	サツマノミダマシ	3, 11, 14
<i>Neoscona subpullata</i> (Bos. & Str. 1906)	ヘリジロオニグモ	3, 11, 14
<i>Ordgarius sexspinus</i> (Thorell 1894)	ムツトゲイセキグモ	11, 12
<i>Poltyx illepidus</i> C. Koch 1843	ゲホウグモ	3, 11
Lycosidae コモリグモ科		
<i>Arctosa ebicha</i> Yaginuma 1960	エビチャコモリグモ	3
<i>Arctosa japonica</i> (Simon 1888)	ヒノマルコモリグモ	16
<i>Lycosa ishikariana</i> (S. Saito 1934)	イソコモリグモ	21
<i>Pardosa astrigera</i> L. Koch 1878	ウツキコモリグモ	3, 11, 14, 22

<i>Pardosa laura</i> Karsch 1879	ハリゲコモリグモ	3, 11, 14
<i>Pardosa pseudoannulata</i> (Bos. & Str. 1906)	キクツキコモリグモ	3
<i>Pardosa yaginumai</i> Tanaka 1977	キシベコモリグモ	3
<i>Pirata clercki</i> (Bos. & Str. 1906)	クラークコモリグモ	3
<i>Pirata procurvus</i> (Bos. & Str. 1906)	チビコモリグモ	3, 11, 14, 22
<i>Trochosa ruricola</i> (De Geer 1778)	アライトコモリグモ	3
Trechaleidae サシアシグモ科		
<i>Shinobius orientalis</i> (Yaginuma 1967)	シノビグモ	3
Pisauridae キシダグモ科		
<i>Dolomedes pallitarsis</i> Don. & Str. 1906	スジプトハシリグモ	3, 14
<i>Dolomedes raptor</i> Bos. & Str. 1906	アオグロハシリグモ	3, 11, 14
<i>Dolomedes sulfureus</i> L. Koch 1878	イオウイロハシリグモ	3, 11, 14
<i>Pisaura lama</i> Bos. & Str. 1906	アズマキシダグモ	3, 11, 14
Oxyopidae ササグモ科		
<i>Oxyopes sertatus</i> L. Koch 1878	ササグモ	11, 14
Ctenidae シボグモ科		
<i>Anahita fauna</i> Karsch 1879	シボグモ	3, 11, 14
Agelenidae タナグモ科		
<i>Agelena limbata</i> Thorell 1879	クサグモ	3, 11, 14, 22
<i>Agelena opulenta</i> L. Koch 1878	コクサグモ	3, 11, 14, 22
Cybaeidae ナミハグモ科		
<i>Cybaeus nipponicus</i> (Uyemura 1938)	カチドキナミハグモ	20
Desidae ウシオグモ科		
<i>Paratheuma shirahamaense</i> (Oi 1960)	イソタナグモ	3
Hahniidae ハタケグモ科		
<i>Hahnica corticicola</i> Bos. & Str. 1906	ハタケグモ	3
Dictynidae ハグモ科		
<i>Dictyna felis</i> Bos. & Str. 1906	ネコハグモ	11
<i>Lathys humilis</i> (Blackwall 1855)	カレハグモ	3, 14
<i>Lathys sexoculata</i> Seo & Sohn 1984	ムツメカレハグモ	3
Amaurobiidae ガケジグモ科		
<i>Amaurobius flavidorsalis</i> Yaginuma 1964	セスジガケジグモ	3
<i>Coelotes corasides</i> (Bos. & Str. 1906)	ヤマヤチグモ	3, 11, 14
<i>Coelotes exitialis</i> L. Koch 1878	ヤチグモ	3, 14
<i>Coelotes interunus</i> Nishikawa 1977	ヒメシモフリヤチグモ	5
<i>Coelotes luctuosus</i> L. Koch 1878	メガネヤチグモ	3
<i>Coelotes personatus</i> Nishikawa 1973	カメンヤチグモ	4

<i>Coelotes tumidivulva</i> Nishikawa 1980	デベソヤチグモ	8
	Titanocidae ヤマトガケジグモ科	
<i>Nurscia albofasciata</i> Strand 1907	ヤマトガケジグモ	3, 14
	Anyphaenidae イツツグモ科	
<i>Anyphaena pugil</i> Karsch 1879	イツツグモ	3, 11, 14
	Liocranidae ウエムラグモ科	
<i>Itatsina praticola</i> (Bos. & Str. 1906)	イタチグモ	3, 11, 14
<i>Orthobula crucifera</i> Bos. & Str. 1906	オトヒメグモ	3, 11, 14
<i>Phrurolithus coreanus</i> Paik 1991	キレオビウラシマグモ	3
<i>Phrurolithus komurai</i> Yaginuma 1952	コムラウラシマグモ	3, 11, 14
<i>Phrurolithus nipponicus</i> Kishida 1914	ウラシマグモ	11, 14
<i>Phrurolithus pennatus</i> Yaginuma 1967	ヤバネウラシマグモ	11
	Clubionidae フクログモ科	
<i>Cheiracanthium eutittha</i> Bos. & Str. 1906	アシナガコマチグモ	3, 14
<i>Cheiracanthium japonicum</i> Bos. & Str. 1906	カバキコマチグモ	3, 11, 14
<i>Cheiracanthium lascivum</i> Karsch 1879	ヤマトコマチグモ	3, 11, 14
<i>Cheiracanthium unicum</i> Bos. & Str. 1906	ヤサコマチグモ	3, 11, 14
<i>Clubiona iharai</i> Ono 1995	イハラフクログモ	3
<i>Clubiona japonica</i> L. Koch 1878	ヤマトフクログモ	3, 11, 14, 25
<i>Clubiona japonicola</i> Bos. & Str. 1906	ハマキフクログモ	11, 14
<i>Clubiona jucunda</i> (Karsch 1879)	ヤハズフクログモ	3, 11, 14
<i>Clubiona kurilensis</i> Bos. & Str. 1906	ヒメフクログモ	3, 11, 14
<i>Clubiona ogatai</i> Ono 1995	オガタフクログモ	3
<i>Clubiona rostrata</i> Paik 1985	マイコフクログモ	14
<i>Clubiona uenoi</i> Ono 1986	ウエノフクログモ	3, 14
<i>Clubiona vigil</i> Karsch 1879	ムナアカフクログモ	3, 11, 14
<i>Clubiona yaginumai</i> Hayashi 1989	ヤギヌマフクログモ	3, 14
<i>Clubiona yoshidai</i> Hayashi 1989	ヨシダフクログモ	3, 14
	Corinnidae ネコグモ科	
<i>Trachelas japonicus</i> Bos. & Str. 1906	ネコグモ	3, 14
	Gnaphosidae ワシグモ科	
<i>Drassyllus shaanxiensis</i> Platnick & Song 1986	チクニヨリメケムリグモ2	
<i>Gnaphosa kompirensis</i> Bos. & Str. 1906	メキリグモ	22
<i>Sanitubius anatolicus</i> (Kamura 1989)	ナミトンビグモ	14
	Sparassidae アシダカグモ科	
<i>Heteropoda venatoria</i> (Linnaeus 1758)	アシダカグモ	9



<i>Sinopoda forcipata</i> (Karsch 1881)	コアシダカグモ	3, 11, 14
Philodromidae エビグモ科		
<i>Philodromus aureolus</i> (Clerck 1758)	コガネエビグモ	3
<i>Philodromus auricomus</i> L. Koch 1878	キンイロエビグモ	3, 14
<i>Philodromus flavidus</i> S. Saito 1934	キエビグモ	3
<i>Philodromus spinitarsis</i> Simon 1895	キハダエビグモ	11
<i>Philodromus subaureolus</i> Bos. & Str. 1906	アサヒエビグモ	3, 11, 14
<i>Tibellus tenellus</i> (L. Koch 1876)	シャコグモ	3, 14, 15
Thomisidae カニグモ科		
<i>Bassaniana decorata</i> (Karsch 1879)	キハダカニグモ	3, 11, 14, 22
<i>Coriarachne fulvipes</i> (Karsch 1879)	コカニグモ	3
<i>Diaea subdola</i> O. P.-Cambridge 1885	コハナグモ	3, 11, 14, 15
<i>Lysiteles coronatus</i> (Grube 1861)	アマギエビスグモ	3, 11, 14
<i>Lysiteles okumae</i> Ono 1980	オオクマエビスグモ	3
<i>Misumenops kumadai</i> Ono 1985	クマダハナグモ	3, 11, 14
<i>Misumenops tricuspидatus</i> (Fabricius 1775)	ハナグモ	3, 11, 14
<i>Oxytate striatipes</i> L. Koch 1878	ワカバグモ	3, 11, 14
<i>Ozyptila nipponica</i> Ono 1985	ニッポンオチバカニグモ	11
<i>Phrynarachne katoi</i> Tikuni 1955	カトウツケオグモ	11, 12, 13
<i>Pistius undulatus</i> Karsch 1879	ガザミグモ	11
<i>Synema chikunii</i> Ono 19833	チクニエビスグモ	3
<i>Synema globosum</i> (Fabricius 1775)	フノジグモ	11
<i>Tmarus piger</i> (Walckenaer 1802)	トラフカニグモ	3, 15
<i>Tmarus rimosus</i> Paik 1973	セマルトラフカニグモ	3, 11, 14
<i>Xysticus croceus</i> Fox 1937	ヤミイロカニグモ	3, 11, 14
<i>Xysticus insulicola</i> Bos. & Str. 1906	アズマカニグモ	14
<i>Xysticus kurilensis</i> Strand 1907	チシマカニグモ	3
<i>Xysticus saganus</i> Bos. & Str. 1906	オオヤミイロカニグモ	3, 11, 14
Salticidae ハエトリグモ科		
<i>Carrhotus xanthogramma</i> (Latreille 1819)	ネコハエトリ	3, 11, 14
<i>Evarcha albaria</i> (L. Koch 1878)	マミジロハエトリ	3, 11, 14, 22
<i>Hakka himeshimensis</i> (Don. & Str. 1906)	イソハエトリ	3, 11, 19
<i>Helicium cylindratus</i> (Karsch 1879)	コジャバラハエトリ	3, 14
<i>Helicium yaginumai</i> Bohd. & Pros. 1987	ジャバラハエトリ	3, 11, 14
<i>Laufeia aenea</i> Simon 1888	エキスハエトリ	3
<i>Marpissa milleri</i> (Peckham & Peckham 1894)	オオハエトリ	3, 11, 14
<i>Marpissa pulla</i> (Karsch 1879)	ヨダンハエトリ	3, 11, 14

<i>Mendoza canestrinii</i> (Niini in Canestrini & Pavei 1868)	オスクロハエトリ	14
<i>Mendoza elongata</i> (Karsch 1879)	ヤハズハエトリ	11, 14
<i>Menemerus fulvus</i> (L. Koch 1878)	シラヒゲハエトリ	3, 11, 14
<i>Myrmarachne formicaria</i> (De Geer 1778)	タイリクアリグモ	3, 11, 14
<i>Myrmarachne inermichelis</i> Bos. & Str. 1906	ヤサアリグモ	3, 11, 14
<i>Myrmarachne japonica</i> (Karsch 1879)	アリグモ	3, 11, 14
<i>Neon minutus</i> Zabka 1985	コガタネオンハエトリ	3, 14
<i>Phintella abnormis</i> (Bos. & Str. 1906)	チャイロアサヒハエトリ	3, 11, 14
<i>Phintella linea</i> (Karsch 1879)	メガネアサヒハエトリ	14
<i>Plexippoides annulipedis</i> (S. Saito 1939)	マダラスジハエトリ	3, 11, 14
<i>Plexippoides doenitzi</i> (Karsch 1879)	デーニッツハエトリ	3, 11, 14, 14
<i>Plexippus setipes</i> Karsch 1879	ミスジハエトリ	3
<i>Pseudicius vulpes</i> (Grube 1861)	イナズマハエトリ	3, 11, 14
<i>Rhene atrata</i> (Karsch 1881)	カラスハエトリ	3, 11, 14
<i>Sibianor pullus</i> (Bos. & Str. 1906)	キレワハエトリ	3, 14
<i>Siler cupreus</i> Simon 1888	アオオビハエトリ	3, 11, 14
<i>Synagelides agoriformis</i> Strand 1906	アメイロハエトリ	3, 14
<i>Yaginumaella striatipes</i> (Grube 1861)	ウススジハエトリ	3
<i>Yaginumanis sexdentatus</i> (Yaginuma 1967)	ムツバハエトリ	3, 11, 14

#### 引用文献

- Ikeda, H. & Saito, S. 1997. New records of a Korean species, *Evarcha fasciata* Seo, 1992 (Araneae: Salticidae) from Japan.. *Acta Arachnol.*, 46:125-131.
- 加村隆英 1990. 日本のワシグモ類 ( ) 日本新記録の1種および最近日本から報告された2種について. *Atypus*, 95: 32-38.
- 熊田憲一 2002. 福井県で採集したクモ 2002年. *しのびぐも*, 30:61-68.
- 西川喜朗 1973. 日本産 *Coelotes* (ヤチグモ属) の2新種. *追大文紀*, 7:75-81.
- 西川喜朗 1977. 大阪府箕面産ヤチグモの3新種. *Acta Arachnol.*, 27(sp.): 33-44.
- Nishikawa Y. 1981. A New Leptonetid Spider from a Tuff Mine in Fukui City, Central Japan. *J. Speleol. Soc. Japan*, 6:23-28.
- Nishikawa Y. 1986. Nesticid Spiders from the Hokuriku District, Central Japan. *Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo*, 12:173-178.
- 西川喜朗 1987. 地下浅層性のデベソヤチグモについて. *追手門学院大学 20周年記念論集*, 443-450.
- 関口晃一 1943. アシダカグモ *Heteropoda venatoria* Linnaeus の生活史に就いて (上). *Acta Arachnol.*, 8: 66-73.
- 新海栄一 1970. 東京蜘蛛談話会最近の収穫より. *Kishidaia*, 18:3-5.

11. 新海明・金野晋 2000. 東京クモ談話会 1999 年度合宿報告 福井県敦賀市周辺のクモ . Kishidaia, 78:67-78.
12. 新海 明・谷川明男 1999. 採集情報 . 遊絲, 5:15.
13. 新海 明・谷川明男 2001. 採集情報 . 遊絲, 9:8-9.
14. 新海栄一・熊田憲一・斎藤慎一郎 2003. 中池見湿地のクモ相 . 福井県敦賀市中池見湿地学術調査報告 : 311-320 . 国立環境研究所 .
15. 須賀瑛文 2002. ちょっと覗いたあちこちの蜘蛛 ~ 2000年 ~ . 蜘蛛, 35:1-6.
16. Tanaka , H. 1990. Lycosid spiders of Japan IV. The genus *Tricca* Simon. *Acta*, 39:21-26.
17. Tanikawa, A. 1992. A revisional study of the Japanese spiders of the genus *Cyclosa* Menge (Araneae: Araneidae). *Acta Arachnol.*, 41:11-85.  
谷川明男 2004 . 日本産クモ類目録 Ver.2004R1 . <http://www.asahi-net.or.jp/~dp7a-tnkw/japan.pdf>
18. 垂水有三 1981. ホラヒメグモに関して Part - ホラヒメグモの飼育法及び既知種の新分布 - . *Atypus*, 78: 13-16.
19. 植村利夫 1937. 蜘蛛研究室彙報 ( 1 ) . *Acta Arachnol.*, 2: 105-112.
20. 植村利夫 1938. バンザイア・ニッポニカ *Bansaia nipponica*. *Acta Arachnol.*, 3: 132-141.
21. 植村利夫 1939. 福井県産一新毒蛛の記載. *Acta Arachnol.*, 4:130-133.
22. 八木沼健夫 1940. 蜘蛛類研究報告 ( ) . *Acta Arachnol.*, 5: 123-132.
23. 八木沼健夫 1952. 北山峡の蜘蛛 ( 北山峡科学調査団報告蜘蛛類予報 ) . *Atypus*, 1: 13-20.
24. 八木沼健夫 1962. クモの分布資料. *Atypus*, 25: 9-12.
25. 八木沼健夫 1976. ムナアカフクログモとヤマトフクログモ. *Atypus*, 67: 35-37.

## 東京蜘蛛談話会

2002・2003 年度運営委員

石島 力・今井 正巳・池田 博明・小野 展嗣・木村 知之・甲野 涼・新海 明・谷川 明男・  
萩本 房枝・初芝 伸吾・安田 明雄

会 長：新海 栄一 185-0011 東京都国分寺市本多 1-6-6

本 部：小野 展嗣 169-0073 東京都新宿区百人町 3 - 23 - 1 国立科学博物館動物研究部

会誌編集：木村 知之 192-0917 東京都八王子市西片倉 2-6-16 ラベニール 210

(原稿送付先) 池田 博明 258-0018 神奈川県足柄上郡大井町金手 1099

E-mail: fwg9084@mb.infoweb.ne.jp

(版下作成) 谷川明男

通信編集：谷川 明男 247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416

E-mail: dp7a-tknw@j.asahi-net.or.jp

事 務 局：初芝 伸吾 186-0002 東京都国立市東 3-11-18-203 (有)エコシス

E-mail: hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

会 計：安田 明雄 231-0861 横浜市中区元町 5-219

E-mail: kobato@gol.com

郵便振替：00170-8-74885 東京蜘蛛談話会 (年会費 一般 3,800 円 学生 2,000 円)

会計監査：笠原喜久雄・梅林 力

---

KISHIDAIA No.86 2004 年 9 月 30 日 印刷 編集者 木村知之

2004 年 9 月 30 日 発行 発行者 新海栄一

発行所 東京蜘蛛談話会

東京都新宿区百人町 3 - 23 - 1 国立科学博物館動物研究部 小野展嗣方

---

印刷 有限会社 相模プロセス 神奈川県相模原市淵野辺 2 - 15 - 27

# K I S H I D A I A

Bulletin of Tokyo Spider Study Group

No.86 , Sep. 2004

## 目 次

徳本 洋：アシダカグモ分布記録へのコアアシダカグモ属の種の誤入 .....	1
松田まゆみ：伊豆諸島式根島で採集したクモとヤマトウシオグモ，タニカワヤリグモの記録 .....	10
安藤昭久：ヨロイヒメグモの網は放射状 .....	13
西野真由子：クモの幼体はなぜ「まどい」を作るのか .....	15
新海 明：積雪上で採集されたクモ .....	21
新海 明：カトウツケオグモはハエを誘引する?! .....	27
斎藤慎一郎：石川県かほく市の暖地性クモ類 .....	29
八幡明彦：物語に登場するクモ・キャラクターの発展についての一考察 「蜘蛛の惑星」再論 .....	33
谷川明男：2004年6月の沖縄クモ観察記 .....	39
笹岡文雄：二人のデーニッツ 小さな誤解について .....	49
中島晴子：オペレッタ『夜叉蜘蛛』のこと .....	54
D R A G L I N E S	
新海 明：八王子城址でスズミグモ幼体の越冬を確認 .....	57
新海 明・谷川明男：山梨県一宮浅間神社のクモ .....	57
貞元己良：高知県合宿のその後 .....	59
八幡明彦・新海 明・甲野 涼：東京蜘蛛談話会 2003年度合宿報告 北海道上土幌町糠平周辺のクモ .....	68
今井正巳・谷川明男：東京蜘蛛談話会 2003年度観察採集会報告さいたま緑の博物館 .....	75
新海 明・谷川明男：文献による富山県産クモ類目録 .....	82
新海 明・谷川明男：文献による福井県産クモ類目録 .....	90